
異端者の踊り

リンシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異端者の踊り

【コード】

N9376I

【作者名】

リンシ

【あらすじ】

もしもスレイヤーズの結界の外の世界が鋼の錬金術師の世界だったなら……。そしてエドワードが……。

出会い(前書き)

これはエドワードが女の子な上、オリキャラが大量に出ます。嫌い
な人はご注意ください。

出会い

カランカラン

ドアベルを鳴らし黒髪の青年が酒場を訪れた。

「その兄さん、捜し人かい？」

辺りを見渡していた青年に酒場の店主が声をかけた。

「護衛を雇いたいんだ、出来れば長期の」

「あゝ、タイミングが悪かったな。この辺りの腕利きは皆、病院さ」「何か事件でも？」

よくよく見れば昼間という事を差し引いても店内は閑散としていた。

「なんでも最近、近くの入江にすんげえ美女が現れるそうだ」

「美女？」

「それで、その美女が自分と勝負しろって言ってくるのさ。それがやたらめつたら強いらしくてな」

「向かった者は全員返り討ちってことか」

「そういう事」

店主はしたり顔で言った。

「それは何処の入江ですか？」

「おいおい、そいつに会いに行くつもりか？やめときなっ」

青年の言葉に店主は眉をひそめた。

「噂になるほどの実力者なら十分護衛になれるでしょう？」

「……東にある町外れの入江だよ」

「そうですか」

それを聞くと青年は店主に背を向け歩き始めた。

「兄ちゃん、名前は？」

「レイ＝マグナス」

青年は振り返りそう名乗ると店を出た。

「ここか」

数日後、レイは教えられた入江に来ていた。

「あれは……?」

事件の噂のせいか全く人気の全くない入り江にレイは岩の上に座る人影を見つけ近寄った。

「こんな所で何をしているんだい?お嬢さん」

「それはこっちの台詞だね、何の用だ、人間」

人にあらざる瞳海の蒼シニャル ゆらゆらと揺らめく水面のような蒼の

瞳で岩の上に座っていた女はレイを見た。

「単なる暇潰しだよ」

「暇潰しでこのセイレーンの入江に来たのか、愚かな」

「手厳しいね、私を虜にする気かい?セイレーン」

セイレーン あらゆる意味で人を喰らう海の魔性、の言葉に

レイは肩を竦めた。

「まさか、悪いが私はそういうのには興味が無い」

「ほう、たいていはすぐに躍りかかってくるんだがな」

「私も我が身は可愛いさ」

「……気付いていたか」

悪戯がばれた子供のようにレイはおどけた。

「当たり前だ。そんなに殺気をばらまいて気付かれないと思ってたのか?」

「そうか」

「で、私を殺すのか?」

「まさか!」

「じゃあ何の用?」

「この辺りに凄腕の女剣士がいるという話を聞いてね、是非護衛を頼もうと」

「それだけの強さがあるのか?」

セイレーンは目を細めた。

「私は魔術師だからね、接近戦をカバーしてくれる相棒が欲しいんだ」

「じゃあ残念だったな。ここにはそんな女剣士はいない、いるのは変わり者のセイレーンだけだ」

「そうか」

「ほら、用が済んだならたつたと立ち去れ」

「君の名前は？」

「は？」

レイの突然の問いにセイレーンはポカンとした顔になった。

「ほら、多少とは言え会話をしたんだ。これも何かの縁だろう」

「名乗るのはまず自分からって教わらなかったか？」

男は苦笑した。

「これは失礼、私の名前はレイ」マグナスだよ」

「エドワード」ライブラ」

「エドワード・・・エドと呼んでも？」

「勝手にしろ」

「ありがとう。じゃあ、エド、また」

そう言っただけでレイは立ち去った。

「また来るつもりか・・・」

一人残されたセイレーン エドワードは呆れたように半眼になるがすぐに興味が失せた様に海に戻って行った。

翌日、レイは再び入り江を訪れていた。

「何の用だ、マグナス」

昨日と同じように岩の上に座っていたエドワードが一瞥し尋ねた。

「覚えていてくれたか」

レイは嬉しそうに目を細めた。

「昨日の今日だからな。お探しの剣士は見つかったか？」

「残念ながらまださ」

「それで？何故ここに来た」

「君に会いに」

「ダウト」

レイの答えにエドワードは即答し、レイはわずかに肩を落とした。

「嘘とはひどいな」

「わざわざセイレーンに会いに来る馬鹿がどこにいる」

「此処に」

「愚かな」

「それは酷いな」

「当たり前前の反応だ」

「そうかい？」

「なぜここに再び来た？」

気を取り直してエドワードは再び尋ねた。

「一目惚れしたんだよ、君に」

「尚更愚かだな、殺されたいのか？」

「まさか」

「どうやら本気で八つ裂きにされたいらしいな」

エドワードは鋭い爪を持つ手をレイの目の前に出した。

「それは困るな」

レイは肩を竦めた。

「君の爪が俺に届く前に退散させてもらうよ」

レイはそう言っただけで入江を去った。

レイがエドワードのいる入江を訪れるようになって一週間が経った。

「また来たのか、いい加減にしろ、マグナス」

エドワードはうんざりとしたような眼差しを向けた。

「レイでいいよ」

「なぜお前の名前を呼ばなければならぬ」

エドワードはレイを睨み付けた。

「こんなくだらない事してる暇があるならたつたと噂の剣士を探したらどうだ？」

「やれやれ、手厳しいな」

「その上、招かれざる客をぞろぞろと引き連れて」

「では私は招かれた客なのかい？」

おどけたように言ったレイをエドワードは苦々し気に睨みつけた。

「屁理屈をこねるな。お前の客だ、お前が相手しろ」

エドワードはそう言って海に飛び込んだ。

「まあ、彼女の為にもさっさと倒すか」

レイはブレスレットを杖に変え構えた。

「いい加減出て来てもらえないか？」

その言葉に反応したのか辺りの岩影から何人もの男達が現れた。

「レイ」マグナスだな。その命貰い受ける」

「やれやれ血の気が多いな。少し血を抜いた方が良いみたいだね」

呆れたようなレイの言葉を合図に男達は飛び掛かって来た。

数分後辺りにはレイ以外の人影は無くなっていた。

「これで終わり、かな。もう出て来ても大丈夫だよエド」

そう言った瞬間レイの影が魔族に変わり襲い掛かった。

「危ない！」

その時、岩影から剣を片手に飛び出したエドワードが魔族を切り捨てた。

「助かったよ」

「話は後だ、立ったと片付けるぞ」

数十分後、レイとエドワードの二人以外に生きている者はいなかった。

「やはり君だったか」

レイは嬉しそうに言った。

「白々しい、気付いてただろうが」

「まさか、君がなかなか尻尾を見せてくれないからね。確証は無かったよ」

「で、あなたはどうするつもり？知つての通りセイレーンは定期的に海水を摂取しないと生きられないぜ」

「それに関してはもう解決策はあるよ。これならいつでも新鮮な海水が手に入る」

レイは何らかの魔術が仕掛けてあるらしい水筒を懐から出した。

「・・・用意周到だな」

「君が噂の剣士であろうがなかるうが連れて行く積もりだったからね」

「はあ、これで行くと言わなければ面倒事になりそうだな」

エドワードは諦めたように肩を落とした。

「わかって貰えて嬉しいよ。これからよろしく、エド」

レイは右手を出した。

「まあ、暇潰しにはなるか」

そう言いながらエドワードはレイの右手を取った。

出会い（後書き）

初めての投稿です。楽しめてもらえれば嬉しいです。

エーウェ教

二人が旅を始めて数カ月後

「それにしても君の戦い方は変わってるな。手を合わせただけで武器を作りだすなんて」

レイの紅い瞳が好奇心に輝いた。

「海の向こうの技術、錬金術の一種だ」

「ほう、どうやって習得したんだい？」

「あつちで人の振りして本を読んだ」

「海水はどうしたんだい？」

「水筒に入れておいいた」

「なるほど」

その時黒髪の女が二人のもとに駆け込んで来た。

「ハルナ?!」

「レイ兄さん! 助けて!」

「妹か?」

「ああ、どうしたんだ?」

「このままじゃアードが殺される!」

「・・・エーウェ教か」

「え?」

「ハルナは古代竜エンシェント・ドラゴンと付き合ってるんだ
なるほど」

「エーウェ教の連中に追い掛けられて、あの人、私を逃がすために
囿に・・・。あの人はその森の近くの集落に捕まっているわ」

ハルナは森を指した。

「・・・どうするんだ?」

「もちろん助けるさ。エド、君の歌で彼らを眠らせてくれないか?」

「分かった」

エドワードは目を閉じると高らかに唄い始めた。

「なんだ?!この声・・・は」

エドワードの唄を聞いた集落の者達はバタバタと倒れていった。

「皆眠ったみたいだね・・・行こうか」

見張りが完全に寝ている事を確認したレイは集落の中に足を踏み入れた。

「こつちよ」

ハルナは二人を集落の中でも一際大きな家に連れて来た。

「アード!」

地下室で倒れている大きな男にハルナは駆け寄った。

「眠っているだけだ。村人と判別がつかなかったからな」

「そう」

「とりあえず彼等が来る前に離れよう」

レイは魔術で男の体を浮かせると外へ運び出した。

「う・・・」

しばらくして男が目を覚ました。

「アード!」

「ハルナ・・・此処は」

「君が捕まっていた集落の近くの森だよ」

「やはり古代竜は目覚めるのが早いな」

「レイ・・・そいつは」

アードは辺りを見渡しエドワードを目に留めた。

「彼女はエドワード!!ライブラ。俺の相棒だよ」

「いやあ、助かったぜ、レイ。あとそつちもな」

「別に」

「随分無愛想なセイレーンだな」

「混血なんぞな」

「混血？初めて聞いたよ」

「初めて言ったからな」

「ほう、セイレーンとなんだ？」

「……麒麟だ」

「……こりやまたずいぶんと変わった組み合わせだな」

麒麟は政を象徴とし聖獣の一種としても数えられる生き物であり、欲望の塊ともいわれるセイレーンとは対極といってもいいのである。

「物心付いた頃には二人共死んでいたからな」

エドワードは肩を竦めた。

「そうか……」

「それよりもなぜ本気で逃げなかった？」

「怪我人が出ちまうからな」

「お前も随分な変わり者だな」

「うるせえ」

「はいはい、喧嘩はそこまでにして、早く此処を離れよう。追っ手がいつ来るかわからないからね」

四人は集落から丸一日歩いた先にある森に着いた。

「それで、そこにいるのは誰だ？」

いきなりエドワードが声を上げた。

「あれ？いつ気付いたの？」

四人の近くの木陰から小さな男の子が現れた。

「隠れたいならちゃんと気配を消すんだな。邪神か？」

「まあね。はじめまして、僕はニック、ニックニミスカト」

「こいつらの情報を連中に流したのはお前だな？」

「うん、暇潰しにはなったよ」

「用がすんだなら帰れ」

「つれないなあ、まあ、また会おうと思うよ。じゃあね」

そう言ってニックは闇に溶けた。

「……厄介なのに目を付けられたな」

エドワードは溜息をついた。

四人はアードの体が治るまで共に旅をした。そして医師に完治したと言われた翌日、四人は分かれ道の岐路にいた。

「じゃあ、私達はこっちに行くわ」

「またな」

「今度はトラブルは無しで頼むよ」

「もう手は貸さんぞ」

笑い合いながらレイとエドワードは左、アーノルドとハルナは右の道へと進んだ。

戦争 前編

「最近あちこちでレッサーデーモンが出没してるな」

「魔族がまたなんか企んでるんだろ」

「大事にならなければ良いんだが」

二人は魔族を倒しながらぼやいた。

その日の夜、宿屋にて

「里帰り？」

「ああ、少し家族が心配だからね」

「どこなんだ？」

「セイルンだよ」

「あそこはあまりエーウエ教の布教は進んでなかったな」

「まあ心配なのはそういう意味だけじゃないんだけどね」

「??？」

「ま、行つて見ればわかるよ」

レイは苦笑し肩をすくめた。

数日後エドワードはレイに先導されセイルンを歩いていた。

「おい、どこに向かつてるんだ？この先には王城しかないはずだぞ」

「うん、目的地はそこだからね」

「は？」

「貴様等！城に何の用だ？」

門の前に立っていた二人の門番が槍を交差させ行方を妨げた。

「しまったな・・・出たのは随分前だからなあ」

「どついつことだ？」

「何の用だと聞いている！」

「はあ、国王にレイが帰つて来たと伝えてくれるかい？」

「・・・ここで大人しくしている」

門番の片方がはしばらくレイを睨むと門の中に入っていた。

「申し訳ありませんでした！」

しばらくすると血相を変えた門番が戻って来た。

「申し訳ありません、レイ様」

「いや、いいよ成人してすぐに飛び出した俺が悪いんだから」

レイは苦笑し、慌てる門番を宥めた。

「グレン陛下が中でお待ちです」

「わかった。行こう、エド」

レイはエドワードを連れ、城の中に入った。

「まさかお前がセイローンの王族だったとはな」

「似合わないのは重々承知だよ」

レイは笑った。

「家は兄が継ぐしね」

「お前には向かな」

「だろうね」

二人が案内され歩いていくと黒髪の青年が向かって来た。

「久しぶりだな、レイ」

「久しぶり、兄さん」

「そこの方は？」

「連れのエドワードだよ」

「エドワード＝ライブラと申します」

「?! セイレーンか？」

エドワードの目を見たグレンが言った。

「彼女は大丈夫だよ。それより兄さん、最近かなり物騒になってるね」

「・・・はあ、彼女の事はお前を信用しよう。最近魔族の活動が活発になっている」

「手を貸すよ、皆でんてこ舞いだろ？」

「頼む」

「私も手伝おう、どうせ暇だ」

「助かる、早速何だが東にある村が魔物に襲われているんだ」

「結局は魔物退治か」

「それだけ人手が足りないんだろ」

「確かにね、最近まで平和だったからみんな腕を鈍らせてしまってるんだろうね」

ある日のこと

「ライブラ、これをどう思う？」

「なんだ？」

グレイは一枚の紙を出した。

「麒麟の血を引く君の評価が聞きたい」

「・・・悪くはない、だがこの部分のツメが甘い」

「なるほど、君ならどうする？」

「この事業は優先して行わなければのちのち面倒が起こりかねない。ならば民への多少の負担は目をつむる方がいい」

「ふむ」

「それで、一体どういう風の吹き回しだ？部外者に政策を問うなんて」

「いや、ちょうど宰相が欲しくてな」

「それは私かなれと言っているのか？」

「ああ、レイには魔術師の統率をして貰うつもりだったからそのついでだ」

「・・・良いだろう」

「助かる、君は純粋な麒麟と違って先を見れるからな」

数日後、エドワードはセイルーンの宰相、レイは魔術師長に任せられた。

戦争 後編

エドワード達が立場に馴染んだ頃

「流石、麒麟の血を引いているだけあるな。書類の書き方も、政策も完璧だ」

「褒めても何も出ないぞ」

「謙遜するな」

「……原因を解決出来なければ意味がないだろう」

「エーウエ教か」

「次の軍の派遣では私を先陣に出して欲しい」

「何か策があるのか？」

「使えば国外追放を免れないだろうがな」

「?……ツセイレーンの唄か！」

「ああ、信者を国ごと滅ぼす。このままでは泥沼だからな」

「……」

「他に手はない」

「そうか……頼む、罪は私が出来ただけ軽くしよう」

「無茶はよせ、マグナスが悲しむ」

「いい加減レイのことを名前で呼んでやれ。あんな事してるんだ、両思いだろう?」

グレンは笑った。

「……そんなじゃない、単なる食料提供だ」

「いつまでも意地を張ってやるなよ」

数日後

エドワードは軍服に身を包み馬に乗っていた。

「これより私はクルス国を滅ぼす！巻き込まれなくなければ此処に待機している！」

エドワードはそう叫ぶと馬を走らせた。

「此処がクルス国が……」

子守唄が辺りに響く。その唄に誘われるように人々は地に倒れ伏した。

その歌声は美しいながらも悲愴な決意を感じさせた。
やがて唄は終わり人々は永久の眠りについていた。

「……すまない、私にはこれしか出来ない」

エドワードが小さく何か呟くと死者達は地に埋まった。

「……本隊に連絡しないと」

エドワードはしばらく目を閉じポツリ呟いた。

エドワードが帰国し、戦果を知った大臣達が詰め寄って来た。

「彼女はあまりにも危険過ぎます！」

「だがこれまでの功を無視し処刑するつもりか？」

大臣の進言をグレンは切り捨てた。

「ですが」

「あれは麒麟の血を引いている、余程の事があつたと見るべきだろう」

「聞き込みをしたところに寄りますと、始めからクルス国を滅ぼすつもりだったようですが？」

「……はあ、ライブラを国外追放とする。それ以上の譲歩は
できません」

「……分かりました」

その夜

「すまない」「いや、仕方のない事だ」

「猶予は一週間だ。それまでに準備をしてくれ」

「大丈夫だ、遠征に行く前に荷造りは済ましてある」

「お前のじゃなくてレイのための猶予だ」

「は？」

「アイツはお前と一緒に行くそうだ」

「な？！止めさせる！アイツはこの国の魔導師の最高位だろう！」

「辞めると言っていたぞ？」

「っ止めにいく！」

「止めておけ、時間の無駄だ」

「何をのんびりしている！アイツがどれだけこの国にとって重要がわかってる筈だろう！」

翌日エドワードはレイの部屋を訪れた。

「珍しいね、君が俺の部屋に来るなんて。ほら、座って」

レイは椅子をだした。

「さて、マグナス。なぜ私が此処に来たかわかるな？」

だされた椅子を無視してエドワードは口を開いた。

「さあ？」

「私と一緒に来ると言ったらしいな？」

「当たり前じゃないか。君は俺の相棒なんだから」

「お前は自分の立場が分かっているのか？」

「あんなのいくらでも代わりはいるさ。例えば俺の前任者とか」

「.....」

「とりあえず、俺は君と一緒に行くよ」

「っ勝手にしろ！」

エドワードは怒鳴って背を向け部屋を出た。

数日後、出立の日。朝早く城をたつ二人を 그레이が見送りに来た。た。

「そつえば言っていなかったな」

具体的はエドワードの前に立った。

「何をだ？」

「私は君の事が好きだ」

「は？・・・」

「まあ、君にはレイがいるから無理だとは分かっていた。ただ言っておきたかったただだから気にしなくて構わない」

「構わないって・・・お前な」

「早く行け、大臣達が煩くなる」

「そうだね、行こう」

二人はグレイに背を向け歩き出した。

密命（前書き）

少し年齢制限（R12くらい）が入ります。

密命

二人が城を出て数年後

「最近ますます異端狩りが酷くなっているな。……セイルーンはかろうじて反抗出来ているが時間の問題か」

「そうだね」

「どうする？」

「どうするもなにも私達は追放された身だ。何も出来やしない」
エドワードは肩を竦めた。

「……さつき兄さんから手紙がきたんだ」

「グレイ陛下から？」

「異端狩りで終われた者達を別の大陸に移したいから逃げれる者を集めてほしいんだって」

「……苦肉の策だな」

「でも最善の策でもあるよ」

「確かに。で、協力するのか？」

「そりゃ兄さんの頼みだからね」

「わかった、なら協力者を捜さないと私達だけじゃどうもしようもないぞ」

「そうだね。ハルナ達も巻き込もう」

「わかった」

そしてそれからさらに一年後

「『愚者』からの連絡だ、来月の十八日に船をだすそうだ」

「『悪魔』の妨害工作は上手くいってるね」

敵に感づかれないうちに主だった者にタロットのアルカナになぞらえたあだ名が付いていた。

「やっほ、女帝、久しぶり」

「ミス……悪魔か」

「ニックって呼んでいいよ。周りには誰も居ないし」

「誰が呼ぶか！」

そう叫んだ途端エドワードはぐらりと揺れた。

「どうかした？」

「いや、単なる立ちくらみだ」

「医者に見て貰え。レイが心配してうざくなる」

「アード……わかった」

「あの、結果は？」

その日の夕方エドワードは近くの村の医者を訪れた。

「妊娠してますよ。お嬢さん」

「は？」

「思い当たる事がありますか？」

「あ、はい」

「相手の方にもちゃんと話して、産むかどうかを決めなさい」

「はい……」

エドワードは医者から帰ると書類を運んでいたレイを呼び止めた。

「マグナス、今夜空いてるか？」

「え、ああちよつと遅くなるかもしれないけど大丈夫かい？」

「ああ」

そしてその夜、レイを待つ間エドワードは初めてレイと関係を持った時の事を思い出していた。

「こんな夜中に何処へ行くんだ？」

「散歩だ」

「嘘は駄目だよ、エド」

「……食事ぐらい摂らせる」

「食事なら俺が相手をする、だから盗賊に会いに行かないでくれ」

「やはりお前か、この前のぞき見してたのは」

「俺がどんな気分で見えたか分かるか？」

「見たくないなら見なければ良い」

「そうじゃない！」

「五月蠅い、周りの部屋に迷惑だ」

「・・・なんであんな真似をしたんだ」

「効率よく食事して尚且つ路銀を稼げる。それにたまに珍しいモノも手に入る。それに愛だの恋だのそういうのはセイレーンにとってはただの兎戯にしかない」

「エド・・・」

「死んでも良いなら相手をしてやろう」

エドワードは口元に笑みを浮かべレイの頬に触れた。

「どうする？」

「なら、君が私を殺せない様にすればいいだけだ」

レイは頬に触れていたエドワードの手を掴み引き寄せた。

「俺もこんな見た目なんでね、それなりに経験はあるさ」

「戯れ事を！」

「単純な船乗りや道楽貴族達と一緒にして貰っては困る、ただ腰を振って出して終わりなんて味気無いじゃないか」

「そういう事を口に出すな！馬鹿者」

「利用する為に覚えた事が意外なところで役にたったね」

「利用だと？」

「女性というのは案外恐ろしいものでね、その分味方につければ心強い」

「っは！成る程な」

「それにセイレーンは人間の血肉じゃなく精を糧にする生き物だろう？」

「労力の問題だ。人間を飼うのは面倒だからな」

「飼っても良いと思わせれば良い訳か」

「出来るものか」

「強情だな・・・その分啼かしがいがある」

「っな！」

「それに君は人を喰いたくないんだろ？」

「なんでそう思う」

「だからギリギリまで我慢してその反動であんなに餓えた狼の巣に入って・・・なら、こうした方がはるかに効率がいい。君にも分かるだろ？旅の連れなんだから」

「・・・」

「声出した方が楽だよ？」

「っやめ！」

「もう遅い溺れる」

レイはエドワードの喉に口を寄せた。

「エド、エド。どうかしたのかい？」

「・・・あ、いや何でもない」

「どうだった、結果」

「・・・」

「まさか・・・」

黙りこむエドワードにレイは顔色が変わる。

「・・・二か月」

「え？」

「だから！妊娠二か月だそうだ！！」

エドワードは顔を赤くして怒鳴り俯いた。

「は、はは・・・心配して損したじゃないか」

レイは破顔するとエドワードはを抱きしめた。

「・・・すまない」

そう言っつてエドワードはレイから体を離れた。

「？・・・なんで謝るんだい？」

「邪魔になる」

「何を言っつて？」

「そうだろう？こんな体では護衛は無理だ」

「そうだね」

「だから、ここでお別れだな。今日中に荷物をまとめておく」

「ふざけるな！」

そう怒鳴ると再びエドワードの腕を掴んで引き寄せた。

「死が二人を分かつまでなんて生温い事を言わない、君は永遠に俺のモノだ」

そう言つてレイはエドワードを抱き寄せ左薬指に黒い指輪を嵌めた。

「……これ……は」

「ブラックオリハルコンに金で文字を入れたんだ、ちなみに俺のはその逆。さ、嵌めてくれるかい？」

レイは体を離すと黄金色のリングをエドワードに渡し左手を出した。

「マグナス……」

「レイ……と呼んで、エド」

「……レ……イ」

そう言つてエドワードは怖ず怖ずと出された手に触れ指輪を嵌めた。

そして出航の日

「君達は行かないの？」

「身重のエドを長期の船旅は無理だからね」

「大丈夫だ、十分隠れられる」

赤眼の魔王ヘルビーアイ (前書き)

少しいつもより長いです。

赤眼の魔王ヘルビーアイ

ハルナ達が亡命して数ヶ月後、異端狩りを避けるためエドワードとレイは山奥に住居を構えてした。しかし・・・

「オイ！セイレーンだ！」

何人も男が叫んだ。

「っ！」

薬草を摘みに来ていたエドワードは踵を返して出来るだけのスピードで駆け出した。

「っなんでこんな奥に人間が」

誰も来ないだろうと油断していたエドワードは舌打ちする暇を惜しむように駆けた。

「ッッ！」

「ちょこまかしゃがって」

しかし身重のエドワードは早く走る事が出来ず追い付かれて、体を押さえ付けられてしまった。

「おい、コイツ孕んでやがるぜ！」

「っ離せ！」

「これ以上化け物が増えちゃかなわねえ、とつとと始末しようぜ」

「そうだな」

「っ止める！！」

「化け物は黙ってる」

そう言った男が腰に下げている剣を抜きエドワードの腹に刺した。

「っぐあ」

「へへっ、化け物の子供だ。ほら見ろよ、まだ動いてるぜ」

そう言いながら男はエドワードの腹を切り裂き胎児を引きずり出した。

「っやめ・・・ろ」

「おい！誰か来たぜ」

異端狩りの片割れが仲間に行った。

「そうだな、そいつにも手伝わせようぜ。やっと餓鬼は死んだが親はなかなかしぶといしな」

「エド！吹き過ぐ風の精霊達よ 我が手に集いて力となれ 魔風！」デイルム・ウィン

レイの目の前には腹部を切り開かれ血まみれになったエドワードと無理やり傷口から引きずり出され動かなくなった胎児が映った。「

あ……ご……めん……赤ちゃ……まも……れな……た」

「エド！エド！しっかりするんだ」

エルの下腹部は命を育む為の揺り籠まで切り開かれ大量の血潮が溢れていた。

「……お前に……会え……て……良か……た」

「エド？……つまらない冗談はよしてくれ……あ、あ、あああ

あ……！」

レイの体から紅いオーラが立ち上る。

「許さん……人間共……許さん！」

レイの叫びが辺りに響きわたった。

エドワードは真っ白な部屋で目を覚ました。

「ん……なぜ私は……」

「よかった、目が覚めたかい？君の部屋だよ、此処は」

「私の部屋だと？」

「そう」

エドワードは起き上がった。

「つつ」

「ダメだよ、まだ起き上がっちゃ」

レイがエドワードの体を支えた。

「マグナス……？違う、お前は誰だ！何故マグナスの姿をしている？……！」

「ひどいな、エド。せつかく蘇らせたのに」

「戯れるな！生死は何者にも扱えない！！」

「そんな事はないよ、お腹の子は間に合わなかったが、君の魂は冥府から取り戻せたじゃないか」

「そうだよ、なんでそんな事言うのさ」

そこに幼い子供の声が響いた。

ヘルムスター

「冥王……！！……まさか……ルビータアイ赤眼の魔王……喰われたか」

「違うよ、俺は自分の意志で動いてるんだから」

「これから何をするつもりだ」エドワードはレイを睨み付けた。

「とりあえず神封じの結界を張らしてもらったからフレアロード火竜王を引き摺り込んで殺すよ。落とし前をつけなきゃね。アードの仲間の分も」

「止める、ルビータアイ赤眼の魔王」

「傷はまだ完全に治ったわけじゃないから二三日大人しくしててくれ」

エドワードの制止を無視しレイは冥王を連れ部屋を出た。

その直後、エドワードはベットから降りたが腹部の痛み思わずしやがみ込んだ。

「っこの程度の痛みごときに負けてたまるか！」

そう言つてよろよろと立ち上がり壁を頼りながら歩き出した。

「誰だ！」

なんとかルビータアイ赤眼の魔王の城から逃げ出したエドワードは物音に素早く剣を錬成し、振り返った。

「アクアロード水竜王がなぜこのようなところにいる」

「それはこちらの台詞だ、セイレーン」

「大方アイツを倒しに来たが神封じの結界で力を出せない、というところか」

「貴様」

「手を組まないか？」

「なんだと？」

「お前も私も赤眼の魔王を倒さなければならぬ、力を出せないな」

「手を組んだ方が楽だろう？なら相手の力も落とせばいいだけだ」
「何？」

「私が奴の力を一部奪えばいい」

「出来るのか？」

「手はある」

「・・・良いだろ」

「エド・・・なんで」

数日後、水竜王と共に現れたエドワードに赤眼の魔王は呆然とした
声を上げた。

「自分が一番よくわかっているだろう赤眼の魔王」

「水竜王、貴様エドをたぶらかしたな」

「そのセイレーンは自分の意志で此処にいる」

「嘘をつくな！」

そう叫んだ瞬間赤眼の魔王の姿がレイのものから醜く巨大な化け物
に変わった。

「カオストラゴン
魔王王！」

赤眼の魔王が叫んだ。すると巨大な龍が上空より現れた。

「我が力を持って水竜王を滅ぼせ」

龍は雄叫びを上げると水竜王に襲いかかった。

「そんな攻撃が効くものかっぐあ」

「水竜王！？っ属性の共鳴か！」

「そつだよ。エド、こつちに来て」

「断る！」

「そつ、なら死ネ」

赤眼の魔王は腕を降り下ろした。

「っ目を醒ませ！レイ！」

エドワードは叫びながら交わし地面へ手をついた。

数時間後、赤眼の魔王以外は満身創痍になりながら立っていた。

「グアアアア！」

水竜王が渾身の力を込めた攻撃に魔竜王が消滅した。カオストラロン

「今だ！」

赤眼の魔王の意識が逸れた瞬間エドワードは手を合わせ地面へついた。

「ナニ?!」

赤眼の魔王の足元に巨大な魔方陣が現れた。

その魔方陣は巨大な円と小さな円が二本の直線で繋がった形をしており、巨大な円の中に赤眼の魔王が、小さな円の中にエドワードが立っていた。

バチバチツ!

赤眼の魔王から紅い光が魔方陣を通じてエドワードに流れ込んでいた。

「つぐ」

エドワードの左目が紅に染まっていった。

「セイレーン！」

「早くやれ！」

思わずエドワードの方を見た水竜王にエドワードは怒鳴り付けた。アクアロード

「ああ、眠れ！赤眼の魔王！」ルビーアイ

水竜王から出た蒼い光が赤眼の魔王を包み込んだ。ルビーアイ

「ナツ！コンナ所デ！」足掻く赤眼の魔王の動きが徐々に鈍くなり光が一際強くなった次の瞬間光ごと赤眼の魔王は遠くに飛ばされた。ルビーアイ

「水竜王！貴様！」アクアロード

それを見たエドワードはふらつく体に鞭を打ち水竜王の胸ぐらを掴んだ。

「なんだ？セイレーン」

「誤魔化すな！なぜ封印した！あの状態なら殺すことも出来ただろう！」

そう言つてエドワードは手を話すと踵を返した。

「どこに行く？」

「止めを刺しに行く」

「止めろ」

「止めるな！アイツを殺させる！そうしないとマグナスが！」

「悪いが、そうされると世界のバランスが崩れる」

「ふざけるな！人一人救えないなら神なんざ名乗るな！」

「・・・お前は邪魔になりそうだな、結界の外を流離うが良い」

「な？！止め！」

エドワードの足元に魔法陣が現れ強く輝いた次の瞬間、光は消えそこにはまるで始めから誰もいなかったかのようにエドワードの姿は無くなっていった。

「我もこれで限界か・・・」

そう呟いた水竜王は光の粒子となり消えた。

千年後、放浪の末

「西の賢者、ホーエンハイムか・・・何か知ってるかもな」

エドワードはリゼンブルにあるホーエンハイムの家を訪れた。

「え？行方不明？」

ホーエンハイムの家から出てきた女性が言った言葉にエドワードは肩を落とした。

「ええ、ごめんなさい」

「うわあぁ〜ん」

「あらあら、アル、どうしたの？」

トリシヤは慌てて家の中に引き返した。

「息子さんですか？いくつに？」

「ええ、八ヶ月になるの。あら？貴方」

振り向くとそこには若い女ではなく幼い少年が立っていた。

「ひどいぜ、母さん、エドワードだって」

「そうね、エド、外で遊んでたの？」

「うん」

「危ないからちゃんと先に言ってちょうだい、心配したわよ」

「ごめんなさい」

そうしてエドワードはリゼンブルに馴染んでいった。

数年後、エドワードとアルフォンスは病に倒れたトリシヤの側に居た。

「母さん！」

「じほっ！アル・・・少しエドと二人きりでお話しさせてくれる」

「・・・うん」

アルフォンスはしぶしぶうなずくと部屋を出た。

「母さん？話って何？」

「エドワードさん……」

「どうしたんだよ、そんな他人行儀な話し方」

「……無理に子供っぽくふるまわなくても良いのよ」

「……気付いて？」

「ええ、アルフォンスの事よろしくね」

「そんなこと言わないでくれ。まだまだ大丈夫なはずだ。アルフォンスのためにも」

そう言うとエドワードはトリシヤの体に手を翳した。

「聖なる癒しのその御手よ 母なる大地のその息吹 我等が前に横たわる傷つき倒れしかの者に 我等全ての力もて 再び力を与えん事を 復活リサレクシヨン」

エドワードの手から淡い光がトリシヤに降り注ぐ。

「どうだ？」

「ええ、大分楽になったわ」

「ならよかった」

しかし、エドワードの治療もむなしくトリシヤは息を引き取った。

「……何の冗談だ……？」

その数日後、エドワードはトリシヤが毎日飲んでいた果汁酒に毒が入っている事に気付いた。

「……なぜ、こんなものが……ヴァン・ホーエンハイム絡みか？」

エドワードは左目を押さえた。

『犯人ヲ殺セ、氣ニ入ツテイタノダロウ？』

「黙れ、赤眼の魔王ルビティアイ」

頭の中で響く声にエドワードは答えると立ち上がった。

「しっかりしないとな」

エドワードは腕まくりをして家事にとりかかった。

「この体は色々不便すぎる、もう少し大きな設定にしておくべきだった」

エドワードはトリシャが亡くなってから火事の大半を担うようになっていた。

そんなある日、稀に見る大雨の中で高度な錬金術を見せたイズミ・カーティスの元に二人は紆余曲折の末弟子入りを志願した。

「ーは全 全はー、か」

試験として放り込まれた無人島で月光浴をしながらエドワードは呟いた。

「もしそうなら私は常にお前と共にいるのか？マグナス」

エドワードは苦笑すると隣で眠るアルフォンスを見た。

「あの子も元気に育っていたらこんな風になつてたのかもな」

数日後二人は試験に合格し正式に弟子になった。

禁忌（前書き）

少し話がとびとびになってるかもしれませんが。

禁忌

イズミの元から修業を終えたエドワード達は近くの農家に頼まれて馬小屋の改装を行った帰り道に一人の男が話し掛けてきた。

「はじめまして、トリシャさんの息子さんだよな」

「誰、アンタ？」

「はじめまして、僕はレイン・オスカー。君のお母さんの古い友人だよ」

「・・・何の用」

長年の勤かエドワードはアルを後ろに下がらせ言った。

「お母さんに会いたくないかい？」

「死者を蘇らせるなんて不可能だ、分別のある大人ならそれくらい分かるはずだ。行こう、アル」

「やあ」

「あなたは」

お使いの帰り道、アルフォンスは待ち伏せしたと思われるレインに遭遇した。

「・・・」

アルフォンスは逡巡するように黙ってレインを見た。

「何か言いたい事があるみたいだね？」

「本当に母さんにもう一度会えるんですか？」

「ああ、もちろん」

「どうやって？」

「錬金術だよ。君だって知ってるだろ？等価交換で取り戻すんだ」

「・・・」

「その為には君の協力が必要だ、頼む」

「・・・はい」

「本当かい?! なら明日の十時にここに来てくれるかい? お兄さんはあまり乗り気じゃないみたいだから」

「わかりました」

「まだ居たのか」

「僕には君達の協力が必要だからね」

「贄の間違いだろう、国家錬金術師」

「おや、気付いていたのか?」

「大総統府の銀時計、そんな見せびらかすように着けてんだから当たり前前だろ?」

「目敏いね」

「大方査定に詰まって禁忌に手を出そうってところか?」

「母親に会いたくはないのかい?」

「死者は生き返らない、なぜなら既に失われているからだ」

「は?」

「錬金術は一種の両替作業ともいえる。手に入れたい物を左の皿に乗せと与える物を対価として右の皿に釣り合うように乗せていく。人体錬成においては根本的に左の皿に乗るものが見つかからない状態で錬成を行う事になる、だから左の皿に適当に物に乗せてしまっただ。」

だから、つり合いがうまくとれずにリバウンドが起こる」

そう言いながらエドワードはレインの周りをまわった。

「.....」

「兄さん、もう少しで母さんに会えるんだよ」

「え?」

「オスカーさんがやり方を教えてくれたから一緒にやろう」

「.....アル、それは絶対にしちゃ駄目な事だ。それにまだあの男に付き合ってたのか」

「うっうっ、兄さんの分からず屋!」

アルフォンスはそう怒鳴ると背を向けて走り去った。

「アル！・・・はあ、生き返らされた方も支払われた対価に苦しむんだよ」

「あんにやる何しでかしゃがった」

アルフォンスが寝たのを確認し、家を抜け出し結界を張っていたエルは家の方から強い錬成反応を感じ、慌てて駆け出した。

「・・・人体錬成・・・アル！何処だ！」

エルのめの前には血まみれの錬成陣あった。

「っ畜生！」

エルは慌てて手を合わせると小さなナイフを錬成した。

「真理！取引だ！」

エルはナイフで指先を傷付けると近くにあつた鎧に錬成陣を書き手を付いた。

「久しぶりだな、セイレーン」

「真理、取引だ。」

「内容は？」

「俺の周りの人間の記憶を書き換える。あとアルを返して貰う」

「残念だが、あの錬金術士の子供は今お前に払える対価じゃ全然足りないぜ」

「記憶の改竄を諦めてもか？」

「ああ」

「わかった、記憶の改竄とアルの魂を返してもらおう」

「それなら足りるな」

「頼む、対価は？」

「全会では関係性をもらったからな。今回は右腕と左足だ」

「いいだろう」

「ばっちゃん、俺に機械鎧つけてくれ」

数日後エドワードはピノコに言った。

「国家錬金術師になってアルと俺の体を戻す方法を見つかる」

「……決めたんだね」

「ああ」

「わかったよ」

「サンキュ」

「私の顔に何かついてるかい？」

「あ、いや何でもない」

そして一年後、国会錬金術師の試験を受けるため向かった東方指令部でエドワードは思わず眼前に立つ男の顔を呆然と見つめる事となった。

壊れた壁 前編

「鋼の、任務だ」

「……」

拝命書と共に資料に目を通したエドワードは目を見張った。

「何か文句でもあるかい？」

「あ……いや無いけど……」

「なんだい？言葉に詰まるなんてらしくない。この件に関して何か情報でも？」

「いや、だつて街一つがいきなり霧に包まれたんだろ？普通は驚くぞ。アルをここに預けても？」

「……そうだな、丁度人手がほしい」

「ん、サンキュー」

数日後

エドワードは中性的な服装を選び町の酒場に向かった。

「お、嬢ちゃん！何処から来たんだい？」

「セントラルから、知り合いの手伝いをね」

エドワードは苦笑しながら酒場の店主に答えた。

「へえ、そうかい」

「ねえ、おじさん、あそこでチエロを持ってるお爺さんどうしたの？」

「ああ、あの偏屈爺さんか」

「？」

「チエロの腕前は良いんだけどな……うちの歌姫は下手だつて言つて合わせてくれないのさ」

「ふうん」

そう言つとエドワードは老人の元へと歩を進めた。

「あ、嬢ちゃん！」

そういうとエドワードはその老人の元に向かった。

「久しぶりだな、ゴーシュ」

「・・・?!エドか・・・お前さんもこっちにきていたのか。マグナスはどうした」

「・・・死んだよ、ずっと前に」

「?!・・・そうか」

「ゴーシュ、この霧に関して何か知ってるか？」

「お前さんも分かるだろ？魔族さ」

「本体の場所は分かるか？」

「一曲付き合ってくれたなら教えてやる」

「セイレーンに歌わせるのか？」

「あの小娘には歌を分からせるのにちょうど良い」

ゴージュはそういうと顎で給仕をしている女を指した。

「・・・了解、リクエストは？」

「Amazing Graceだ」

「手は抜くぞ」

「当たり前だ、危険極まりない」

A m a z i n g g r a c e

H o w s w e e t t h e s o u n d

t h a t s a v e d w r e t c h l i k e m e

I o n c e w a s l o s t

B u t , N o w I ' m f o u n d

w a s b l i n d , B u t n o w I s e e

T h r o u g h m a n y d a n g e r s

T o i l s a n d s n a r e s

I h a v e a l r e a d y c o m e

' t w a s g r a c e t h a t

b r o u g h t m e s a f e t h u s f a r

and grace will lead me home
When we've been there
tenthousand years
Bright shining as the sun
We've no less days
to sing God's praise
than when we'd first begun
Amazing grace, Amazing grace

「こんなものだろう」

「ああ、周りも聞き惚れている」

「余計な事を聞かれる前に消えさせてもらおう」

「そうだな。さっき行っていた魔族はどうやら町長の家に入りし
ていたぞ」

「そうか」

エドワードはそう言つと酒場を出た。

「?・・・あれは確か酒場にいた」

エドワードはぼやきながら宿を取ろうと歩いていると路地裏から少
女の怒声が聞こえてきた。

「ちよつと！いきなり何なのよ！」

「リナ！こんなところで暴れんな！」

エドワードが路地を覗き込むと明らかにまっとうな職についてなさ
そうな男達が旅人を襲っていた。

「あの動きは・・・こつちだ！」

エドワードは四人に叫んだ。

「ありがとう！」

エドワードはしばらく走り街の裏手にある森へ4人を連れて行った。

「はじめまして、アタシはリナⅡインバース。こっちはガウリイⅡガブリエフ」

「ゼルガディスⅡグレイワーズだ」

「アメリカⅡウィルⅡテスラⅡセイルーンです」

「改めましてはじめまして、エドワード・エルリックだ」

「あんだこの村の人じゃないわよね」

「ああ、俺はこの霧の調査の為に来た国家錬金術師だ」

「国家錬金術師？」

「まあ、軍人のエリート予備軍みたいなもんだと思っというて」

「で、なんで因縁つけられたんだ？」

「どうも、あたしが目当てらしいのよね」

「それは見てて分かった、俺が聞いているのはその原因」

「さあ？」

「………は？」

「いやね、全く心当たりないの」

「この前潰した盗賊の仕返しじゃないのか？」

「盗賊？」

「そうそう、いきなり仲間を解放しなければどうとかこつたら言っ

てる奴らが列車に乗って暴れ始めたから叩きのめしたのよ」

「そのあとアジトに案内させてアイツらの隠してた金をねこそぎ取

つたしな」

「……テロリストを退治してくれたのは感謝するけど、そうした

らすぐに憲兵に引き渡して欲しい」

「なんでよ、社会の悪が無くなって更に後ろ暗いお金が上手く世間

に回るんだから一石二鳥じゃない」

「一応そついうのは窃盗に入るしあんたらが倒したのは政治犯だか

らな」

「リナ、政治犯ってなんだ？」

「国のやり方に反対だつて主張する人達の事よ」

「この国はかなり強権的な軍事国家なんだ。まあ、結界の向こうか

ら来たアンタらじゃよく知らないのは当たり前か」

エドワードは納得したように言った。

「何故俺達が結界の向こうから来たと分かった」

ゼルガデイスが剣に手をかけた。

「降魔戦争の時、沢山の亡命者が出た。今でも生き残りや子孫がこの大陸のあちこちに隠れ住んでる」

「なるほどね」

「まあ、証拠はこれでどうだ？ファイアー・ボール 火炎球！」

エドワードは左手から炎の球を出し陰に隠れていたレッサーデーモンに当てた。

「あんた・・・セイレーンね」

「気付かれたか」

「目が蒼くなってるわ。それにあの酒場で歌ってるのを見てたから」

「周りの人間には伏せてあるから言わないでくれ」

「いいわよ。でもなんでまた人間の振りなんかしてんの？」

「いろいろあるんだ」

「そんなことよりもリナ、そろそろメシにしようぜ。オレ腹減ったし」

「そうね」

「なら俺の泊ってる宿なら食事が出るぜ」

「なら、そこにしましょ」

そう言っって一行はエドワードの泊まる宿に向かった。

壊れた壁 後編(前書き)

明けましておめでとうございませう！

壊れた壁 後編

「アンタその食事でエネルギー摂取できんの？」

一行が食事をしている時、唐突にリナが言った。

「効率は悪いけど出来ないわけじゃ無いし月光浴してる、それに俺アレ嫌いなんだ」

エドワードは心底嫌そうに言った。

「あんたホントに変わりモンね」

「まあな」

すると入口近くから怒声が聞こえた。

「ねえ、あの人誰？随分偉そうね」

「知らないのかい？」

側を通った宿の女将が言った。

「この前この村に来たばかりだから」

「あの人はこの街の長さ、そりや陰険でねえ。特にあの秘書が来てから、反対する奴らが次々死んでいったから余計に天狗になっちまってるんだよ」

「秘書？」

「ほら、斜め後ろに居る仮面を被った奴だよ」

「・・・すんごい不細工なのかしら」

「さあねえ、今まで見たって奴に会った事ないから。ところで嬢ちゃん達はどこに泊まるか決めたのかい？」

「ん、まだなんだけど」

「じゃあここに泊まりなよ」

「そうしようかしら、他に宿があるとは思えないし。いい？」

「ええ」「ああ」

その夜

「ガウリイ、気付いてる？」

「ああ、どうする？リナ」

「とりあえず外に出ましよう」

「わかった」

二人は窓から宿の部屋から出た。

「リナ！」

辺りを見回していた二人の目の前に剣を持ったエドワードが現れた。

「エド？！なんで此処に？」

「妙な気配を感じて、急いで来てみた」

「リナ！なんでコイツが？」

「魔族の気配に気付いて来たみたいだぜ」

「ゼル、アメリア、来るぞ！」

ゼルガデイスとアメリアが駆け付けた瞬間ガウリイが叫んだ。

「え？！」

「下級三匹に中級五匹だ。とつと倒すぞ」

エドワードは剣を抜刀の型で構えた。

魔族を全滅させた後エドワードは町長の近辺に魔族の影があることを話した。

「魔族・・・町長をたぶらかしていたのか」

「厄介ね」

「俺が引き離す」

「どうやって？」

「適当に嫌疑をでっちあげる」

「出来るのか？」

「一応俺も軍属なんでね、アイツより権限は上だ」

翌日、エドワードは銀時計を使って町長の元を訪れたい。

「すいませんが、貴方の秘書にお尋ねしたい事があります」

「聞きたい事、ですか？」

「ええ、貴方の秘書の事なんですが」

「・・・」

「少し話をしたいのですが大丈夫でしょうか？」

「・・・分かりました。ですが二時間後に用事が有りますからそれまでに」

「はい」

エドワードはそう言って立ち上がりドアに向かい、くるりと振り返った。

「何か？」

「いえ、昔聞いた東の国の諺を思い出しましたので」

「諺？」

「ええ、‘人を呪わば穴二つ’ってね」

「・・・」

「まあ、呪いというものが本当にあるかはわかりませんが」

一方エドワードを待っていたリナ達の元に件の男が訪れた。

「リナさん、インバースさんとガウリイさん、ガブリエフさんですね。少し

ご同行願えますか？」

「いいわよ」一行は町外れの荒れ地に向かった。

「さて・・・」

男は仮面を外した。仮面の下の顔は額を除いてとても整っていた、額に口がある以外は。

「魔族ね」

「そうですね」

「何であたし達を狙うのかしら？」

「かの有名なデモンスレイヤーズを殺せば俺の価値が上がる」

「ふん、命知らずねえ」

「そうかな？」

「とりあえず騒ぎになったら面倒になりそうだから、すぐにきめる

わ!

悪夢の王のひと欠片よ、天空の戒め解き放たれし、氷れる黒き虚無の刃よ、我が力、我が身となりて、ともに滅びの道を歩まん、神々の魂すらも打ち砕き！ラケナ・ブレイド神滅斬！！」

「っ甘い！」

「大丈夫か?!」

魔族は駆け付けたエドワードを掴んだ。

「っ純魔族か、何故此処にいる？」

「ほう、よく知ってるな。小僧」

「まあ、ね」

「なら、自分の命がここまでだという事もわかるだろう」

「馬鹿だな、ここまで近付いて俺が何か分からないなんて」

「何？」

「消える、餓鬼」

エドワードが軽く手で払うと魔族は一瞬で塵になった。

「結界が無くなったのはほんとうだったんだな」

そう呟いと途端にエドワードは少しふらついた。

「ちよっ！アンタ大丈夫なの?!」

「っ最近消耗が激しいから、ちよっとなりて飢餓状態になってるだけ」

「それ、かなりヤバイわよ！」

「それより、さっき使った術ロド・オブ・ナイトメア……混沌の王のだよな」

「よく分かったわね」

「それなりに生きてるからな」

エドワードは肩を竦めた。

「アンタいくつなの？」

「秘密だ。……今回の事は適当に誤魔化しとくから、目立つよ
うなことすんじゃねえぞ」

エドワードはそう言って立ち去った。

数日後、東方指令部の執務室でエドワードはロイに報告を行っていた。

「街の近くの池の温度が上がったのが原因だったみたいだぜ。取り敢えず池と霧の成分を調べて危険なモンは入ってなかった」

「ふむ」

「これにも書いてあるけど、地下のマグマの活動は沈静化しつつあるからあの霧ももうすぐ無くなると思う」

「そうか。ご苦労だったな、鋼の」

「労いは良いから文献寄越せ」

「やれやれ、せっかちなだね」

「どうとでも言え、俺達は早く元の体に戻りたいんだ」

「わかったよ・・・ほら、これだ」

「サンキュー。じゃあ俺は宿に帰る」

「今回はどれくらい居るんだい？」

「だいたい一週間ぐらいだ」

「そうか、何かあれば連絡しよう」

「ああ」

そう言ってエドワードは執務室から出て行った。

疵（前書き）

ここからしばらく事件モノです。

疵

エドワードは定期報告のため東方司令部を訪れた。

「中尉、大佐は？」

「ごめんなさいね、大佐、風邪を引いたらしくて今仮眠室で休んでるわ」

「普通は早退じゃないのか？」

「書類が溜まつてるから・・・帰るに帰れないのよ。しばらくしたらまた働いて貰わなくちゃならないの」

「自業自得じゃん」

「ちょうど上からラブコールがきちまつたんだよ」

「あゝ、大変だな」

「できれば少し様子を見てきてもらえないかしら？みんな手が空かないの」

「わかった」

エドワードが仮眠室に入るとベッドに寝ていたロイはうつすらと目を開けた。

「熱出したんだって？」

「・・・鋼の・・・か？」

「珍しい事もあるもんだな」

「報告書は、机の上にも置いて、くれ」

「・・・」

エドワードは動かずにじっとロイを見ていた。

「鋼の・・・？」

「あまりこういう事は好かないんだがな」

エドワードは溜息をつくとベッドの隅に腰掛けロイの額に手をあてた。

「寝ろ、目が覚めたら熱は下がってる筈だ」

手を下にずらしロイの目を隠した。

「……」

「寝たな」

エドワードはしばらくして手を外した。

「つ以外に高いみたいだな」

エドワードは少しふらついたがすぐにしっかりと立つと仮眠室を出た。

「エドワード君、大佐はどうだった」

「一回目を覚ましたけどすぐに寝ちまった。見たところ大分回復してた」

「そう」

「じゃ、これ報告書」

エドワードは報告書を机の上に置くと立ち去った。

翌日

「やあ、鋼の」

「大佐……その様子だと熱は下がったみたいだな」

「まあね」

「それじゃあなんか情報ある？」

「その前に、上からの命令だよ」

ロイは引出しから資料を出した。

「捜査に協力すればいいのか？」

「ああ、これが資料だ。門外不出だからここで読んでくれ」
「了解」

エドワードはパラパラと資料を捲った。

「妊婦ばかりを狙った殺人鬼か」

「そうだ、腹部を切り開かれて中の胎児が引きずり出されている」
「趣味悪い」

エドワードは目を細めた。

「全くだ」

数分後エドワードは資料を見終えた。

「何か気になる所はあるかい？」

「ああ」

丁度その時

「大佐！北部のスラムで例の事件です！」

部屋にホークアイが入って来た。

「分かった・・・これで三件目か」

ロイはため息をつくと席を立った。

「俺もいく」

「かなりグロいぞ」

「別に慣れてる、アルにさえ知らねければいい」

「そうか・・・来たまえ。中尉、行くぞ」

「Yes, sir」

数十分後

「・・・着きました」

「行こうか」

「ああ」

ホークアイはロイ達を先導し現場へと向かった。

「マスタング大佐！・・・その子供は」

「国家錬金術師エドワード・エルリック、専門は生体。今回はマスタング大佐の要請で来ている」

ロイが紹介する前にエドワードが銀時計を出して自己紹介した。

「・・・はッ！失礼しました」

「別に慣れているからかまわない」

エドワードは軽く首を振るとロイの方を向いた。

「大佐、行きましょう」

「あ、ああ」

ロイ達はロープをくぐって路地を進んだ。

「そういう話し方もできるんだな」

「TPOは弁えているつもりですが」
「なるほど」

「ここが現場です」

先導していたホークアイが立ち止り脇にどいて二人に現場を見せた。
「……被害者の名前は？」

エドワードはしゃがみこむと死体に掛けられていたシートを捲った。
「被害者はクリス・オークランド、年齢は27歳、住所は此处から3区画程離れた住宅街です」

死体の側にいた軍人が報告した。

「出血の様子からここで生きてままだ腹を切られてそれでショック死したみたいですね」

「錬成痕は？」

「……ありません、大型のナイフ切り裂かれたようです」

「そうか……」

エドワードの虚ろな目付きにロイは不安になり声を掛けた。

「鋼の？」

「……ッ！なんでもありません」

その声にエドワードは正気に返り慌ててロイの方を見た。

「大丈夫かい？」

「はい……早く犯人を見つけましょう」

「そうだな」

「次はどうしますか？」

憲兵が尋ねた。

「……鋼の予想が正しければ次の現場のたまかな場所が分かる。後で指示を出すからその地区の警備を強化してくれ。」

私はホークアイ中尉と鋼ののを連れて過去の現場に向かう、行くぞ
ロイは二人を引き連れ現場を立ち去った。

「ここは最初の現場だ」

「……」

エドワードは無言で歩き回りながらとどころ地面に手を当てていった。

「危ない！鋼のー！」

突如エドワードの後ろのマンホールから巨大な生物が襲い掛かって来た。しかしエドワードは場にそぐわない程ゆっくり振り返った。ドサー！

「大佐、何か言った？」

エドワードの右手に一瞬で錬成された槍がいつの間にか握られていた。

「鋼の……」

「こんなのが出てくるって事は当たりか」

エドワードは溜息をついて槍を戻すとロイの方へ向き直った。

「大佐、大丈夫か？」

「……ああ」

「……」

「鋼の、その指輪はどうしたんだい？」

ロイは堅くなった空気を誤魔化すようにエドワードに尋ねた。

「え？っ？！」

ロイに言われ慌てて自分の胸元を見ると先程動いた拍子にかいつもは服の下に掛けている指輪が出ていた。

「……貰い物だ」

エドワードはそう言って指輪を仕舞った。

「ほう……ウインリイ嬢か？」

「違う」

「じゃあ誰が？」

「死んだ知り合い」

「……すまない」

「別に……大分昔の事だしな」

「……そうか」

「次の現場に行こうぜ」

「そうだな」

三人は次々と現場を回って行った。

「どうやら、地図で確認する限り鋼のの読みは当りそうだな」
現場の見回りを終えた三人は司令部に戻って地図を見ていた。

「・・・だな」

「この五傍星に何の意味があるか知ってるか？」

「さあ・・・だけど五傍星は安定の崩壊を意味するってどっかの
文献で読んだ事がある」

「まるで呪いだな」

「呪いが存在するかは後回しだろ？」

「それもそうだが、今日はもう遅い。今日は帰りなさい」

「・・・了解。何かあつたらすぐに連絡してくれよな」

そう言つてエドワードは司令部を後にした。

しばらく宿に向かつて歩いていていたエドワードだが急に帰るためには
通る必要のない人通りの少ない道に向かった。

「出てきてもらおうか？」

物陰から5人の男達が出てきた。

「・・・気付いていたか」

「将を射んとすれば何とやら、俺を抑えればマスタング大佐を何と
かできるとか考えたんだろ？お前らの雇い主は」

「流石は天才と言つたところか、その通りだ」

「どこの三下も考える事は同じか・・・」

「何だと」

男達がエドワードに襲いかかった。

「アクア・クリエイト
浄結水」

「くくくくくあつ！！くくくく」

男達の上から大量の水が降って来た。

「水ってというのは重さをはかるのが簡単でな、立方センチメートル

×グラムで大まかな質量が出てくる」

路面にまき散らされた水が宙に浮き始めた。

「今俺はお前達の上から2,000,000立方センチメートルの水を降らせた。重さがいくらか分かるか？」

「ぐっ……」

「苦しくて話せないのか？」

エドワードは足でうつ伏せになった男達をひっくり返していく。

「正解は約2トン、それだけの負荷が一瞬とはいえ掛かったんだから喋れないのは当然か」

「ば、化け……物」

「化け物、ねえ、まあ、当たらずとも遠からずか」

宙に浮いた水はエドワードの周りに幾つもの拳大の水の玉を成していた。

「さて、アクア・レイザー水流閃」

水玉が変形し男達の肩や手を貫いた。

「今日はいささか機嫌が悪い。だが殺すと余計な面倒がありそうだから殺さないでやる。雇い主に伝えろ、鋼の錬金術師は正真正銘の化け物だね」

クスクスと笑いながらエドワードは去って行った。

昔馴染み 前編

翌日、アメトリス軍中央司令部の前に一人の若い女が立っていた。

「……よし、行きましようか」

女は一度深呼吸をすると建物の中に入って行った。

「すみません、エドワード・エルリックに会いに来たんですが」

「え？あ、はい。ではこちらの記帳にサインを」

「はい、分かりました」

女は言われたとおりにサインをした。

「ハルナ・M・オルト……さんですね。では、こちらにどうぞ
受付は側にいた軍人に女　ハルナを案内するように頼んだ。

「すみません、エドワード・エルリックはもう少ししたら来るとのことです」

「そう……じゃあ、どこか待てる場所を知りませんか？」

「それなんです……マスタング大佐があなたにお会いしたいと……」

「え？……分かりました」

「すみません、こちらです」

「マスタング大佐はこちらです。大佐、面会者が来ています」
案内をしていた軍人は執務室の前に立つとドアをノックした。

「わかった、入れ」

「失礼します。どうぞ」

軍人はマリアを中へ入れると敬礼をして去って行った。

「ッ初めまして、私はハルナ・M・オルトです」

マリアは一瞬驚愕の表情を浮かべるがすぐに笑顔を浮かべ挨拶をした。

「はじめまして、私はロイ・マスタング、この東方司令部の司令官代理をしています」

「そうですか・・・」
「素晴らしいながらハルナはロイの顔をじっと見つめた。
「・・・私の顔に何かついてますか？」
「いえ・・・死んだ兄にそっくりだったものですから」
ハルナは言葉を濁した。

その頃、街中では

「・・・あの男怪しくないか？」
憲兵が顎で示した先に黒づくめの青年が立っていた。

「そうだな、声を掛けるか・・・おい、そこのお前」

「へ？僕の事ですか？」

「ここで何をしている？」

「最近この辺りに負の感情が集まっているようなので食事を」

「訳の分からない事を言うな」

「貴様、名前は」

「ゼロスです」

「職業は？」

「謎の神官です」

「お前ふざけてるのか？」

「いえいえ、ふざけてなんかいませんよ」

「とりあえず捜査本部に来てもらう」

憲兵はゼロスの腕を掴むと引っ張って行った。

「ハボック少尉、怪しい人物を発見しましたので連れてまいりました」
「わかった」

ハボックはゼロスを見ると外見のあやしさから眉をしかめた。

「で？アンタは何者だ？」

「だからただの旅の神官ですって」

「ならなぜファミリーネームを言わねえんだ？」

「だって持ってませんもん」

「は？」

「えっと・・・僕は海の向こうの大陸から人を探しに来たんです」「ほう、ならファミリーネームが無いのは海の向こうの風習だとも？」

ハボックは半眼で睨んだ。

「まあ、正確には僕の一族と言うか種族の風習ですけど」

ゼロスは困ったように眉を八の字にした。

「ならば証拠は？」

「へ？」

「海の向こうから来たって言う証拠だよ。何かあるんじゃない？」

「えっと・・・ならこれでどうですか？」

そう言ったゼロスの周りに黒く小さい三角錐が現れた。

「手品か？それとも錬金術か？」

「違いますよ」

ゼロスが取り上げられたはずの杖を何も無い空中から取り出すと軽く振った。するとそれに合わせて三角錐がハボックに襲いかかった。「なっ？！」

あからさまに怪しいゼロスに対する警戒は怠ってはいなかったが予想以上に早い三角錐の動きにハボックは紙一重でかわすのが精いっぱいだった。

ドンッ！！

三角錐は壁を破壊しあたりに砂埃が立った。

「僕が探しているのはエドワードⅡⅡマグナスという金髪金目もしくは碧眼で小柄な女性です。見つけたら教えて下さいね、砂煙がはれると壁には大きな穴があきゼロスの姿は無かった。」

「何だ？！」

資料室のドアが開き中からエドワードが顔を出した。

「どうしたんだ？中尉」

「ああ、大将・・・怪しい奴を捕まえたんで尋問したらソイツが

壁をぶつ壊して逃げちまったんだ」

「……うわ、ゴホッ！すごいな、直そうか？」

「あゝ、現場保存掛けとくからいいぜ。おい、立ち入り禁止のロープ持ってこい」

ハボツクは近くに居た下士官に指示を出しエドワードに向き直った。

「あ、そっか……」

「そう言えば大将いつ来たんだ？」

「ん？ついさつき」

「お前さんに客が来てたぜ？」

「客？」

「ああ、すつげえ美人だったぜ。今は大佐の執務室にいるはずだ」

「ふうん、じゃあ会ってくるわ」

エドワードは興味無さげに呟くと執務室に向かった。

「俺に客って誰？……ハルナ?!」

「鋼の、「エド、久しぶり」……こんな美人な知り合いが居るなら紹介してくれてもよかったじゃないか」

「ハルナには旦那が居るんだぞ、手え出したら殺されるぜ？」

「ほう、幸運な男もいたものだな」

「……それは……置いて、どうしてここにいんだよ？それにアードは？」

「あの人は明日来るわ。今日来たのはちょっと手を貸してほしくてね」

「わざわざ軍に来んのかよ」

「念のためにここの損失物保管所ものぞきたかったの」

「捜し物ですか？」

「ええ。知人がこの近くで本を失くしたそうなので」

「なんの本を探してんだ？」

「ヒルコ偽典とナトコ写本よ」

「ヒルコ偽典なら心当たりがある。……ナトコ写本ならニック本

人が場所を知ってる」

「え？」

「知らなかったのか？アイツわざと本盗ませてんだぜ」

「・・・大将、わざと盗ませるってどういう事だ？」

「アイツはそういう曰く付きの本をわざと外に出回らせて騒ぎを起こすのが趣味だからな」

「曰く付き？」

「まあ、ぶつちやけると読むと発狂するとか死ぬとかする」

「知ってるなら止めさせてよ」

「あの快樂主義者に何を言っても無駄だ」

エドワードは肩を竦めた。

「無駄って・・・」

「アイツが何か知ってるだろ？」

「そうだけど・・・良心は痛まないわけ？」

「悪いけど俺も自分の欲望に忠実なたちでね」

「欲望って・・・そんなに卑下しなくても・・・」

「関わりとロクな事にならない上時間が掛かる、それに壊れるのはそいつに受け入れるキャパシティーがないからだ」

「・・・」

「はあ、とりあえず見つけたらアイツに突き返しとく」

エドワードはため息をつくとそういった。

「なんだかんだ言っときながら助けてくれるのね」

ハルナは笑った。

「ふん、面倒な事になる前に対処するだけだ」

「照れちゃって。まあ私の用は終わったわ。じゃあね、失礼しました」

ハルナは立ち上がり頭を下げ、出て行った。

「さて、俺は今日どうしたらいいんだ？」

ドアから出たハルナを見送ったエドワードは振り返った。

「・・・今日は南部の事件の詳細を書いた書類を見てもらいたい」

何も言いつつもりもないと感じたロイはそのまま書類の束を渡した。
「了解」

昔馴染み 後編

「・・・明日じゃなかったのか」

数時間書類とにらめっこした後、昼食を食べるためにレストランに入ったエドワードは見覚えのある人影に思わず呻いた。

「兄さん、どうかした？」

「あ、いや、何でもない」

店はなかなか繁盛しているようで席に座る為にしばらく待たなければならなかった。

「こちらがご注文の品です」

出てきた食事を食べていると突如男達の大きな怒鳴り声が聞こえた。

「テメエらがあっちの壁際に集まれ！」

仲間の一人が客達に銃を突き付けながら言い放った。

「・・・強盗か」

「みたいだね、どうする」

「ひい、ふう、みい・・・四人か、しばらく様子見するぞ」

「うん」

エドワードとアルフォンスは言われた通りに壁際に寄った、勿論他の客を庇えるように最前列に並んだ。

「兄ちゃん、さっき俺達が言った事聞こえなかったのか？」

軍の応援が来るまで静観を決め込んでいたエドワードだが犯人の言葉に思わず舌打ちをしそうになった。

「あ？なんか言ってたのか？悪いな、食べるのに夢中で全く聞いてなかった」

「なっ？！ふざけんじゃねえ！」

強盗犯の一人が男に銃を向けた。

「お？正当防衛成立だな」

男はニヤリと笑って銃を突き出していた腕を掴みそのまま勢いよく引き寄せ鳩尾に肘を叩き込んだ。

「ぐえっ」

強盗犯は蛙が潰れるような声を上げ崩れ落ちた。

「っテメエ！他の客がどうなってもいいのか?!」

仲間が倒されたのを見た強盗は近くにいたエドワードの首に腕を回し銃を頭に突き付けた。

「エドじゃねえか」

人質になったエドワードを見た男は驚いた声を上げた。

「アード、お前は……はあ、残り二人はレジだ、行け」

「おう！」

男は意気揚々と駆け出した。

「アル、お前もレジの方へ行ってくれ。俺もこっちをなんとかしたらすぐ行く」

「いいの？兄さん」

「ああ」

「じゃあ行ってくる」

そう言つてアルフォンスは駆けだした。

「テメエ、頭撃ち抜かれないのか！」

「戯れるな」

次の瞬間エドワードは男を投げ飛ばした。

「どわっ」

バチバチッ！

エドワードは素早く手を打ち床に触れると床から鉄の輪が現れ床に大の字になつている強盗の四肢と首を拘束した。

「っ後は」

エドワードは再び錬金術を使うと強盗が使つていた銃を鉄屑に変えた。

「早く銃を出して貰おうか？それとも叩きのめされたいか？」

エドワードは客の一人に手を出した。

「っく」

客に紛れ込んでいた強盗の仲間は悔し気に銃をだした。

「……」

エドワードは無言で強盗を拘束し銃を使えなくした。

「後は表か……申し訳ありませんがもうしばらくの御辛抱をお願いします」

エドワードはそう言って頭を下げた。

「おっ？あそこにいるのはアルじゃないか？」

レジの近くに居る強盗をのしている鎧を見つけたハボックが言った。

「なら大将も近くに……てあれ誰だ」

「……さあ、でもスゲエ強いな」

「っクソ！」

自棄になった強盗が男に向かって発砲した。

「遅いな」

男の姿が消え、次の瞬間には強盗の後ろにいた。

「終わりだ」

男は強盗の首を叩き気絶させた。

「よっ！アル、お疲れさん」

「ハボック少尉、ブレダ少尉、こんばんは」

「その兄ちゃん、こいつらの仲間がまだ中に居るんだ。引き取ってもらえねえか？」

「あ、今行きます」

「まあ、エドが何とかしてるから他の客には怪我はないはずだ」

「兄さんの知り合いですか？」

「兄さん？！……そういう設定にしてんのか……」

言葉の後半を口の中で言いながらアーノルドは眼を細めた。

するとそこにエドワードが錬成した手錠で拘束された強盗を連れてハボック達と共に出てきた。

「ったく、この考えなしが」

「相変わらずつれないなあ、女帝」エンプレス

「その呼び方をするな羽付きトカゲ。ハルナに言いつけるぞ」

「兄さん！失礼だよ！」

「はっはっはっ！いや、別にいいぜ坊主。こいつは昔からこうだしな」

アーノルドは豪快に笑うとアルフォンスの背をバシバシと叩いた。

「無愛想で合理主義、それなのに他人を必要以上に気を使うからタチ悪いよなあ」

アーノルドはエドワードをニヤニヤしながら見た。

「余計なお世話」

エドワードは目を細めた。

「なんかえらく機嫌が悪いな」

「別に、それより、明日じゃなかったのか？」

「あー、正確には今晚ここで野暮用を済まして、明日お前に会う予定だったんだがな」

「そうか……」

「大将、知り合いか？」

「……ハルナの旦那」

「ハルナって誰？」

「確か昼間来た人で……すっげー美人な人妻さん」

「そうなるな、はじめまして、アーノルド・オルトーだ」

「とりあえず事情徴収に来て欲しいんすけど」

「そうだな。アード、ちゃんとしろよ」

一行は現場を後にした。

禁書

エドワード達が指令部を訪れると中では慌ただしく人が駆け回っていた。

「なんかあつたのか？」

「先程、今夜私を狙ったテロを起こすという予告があつてね」

ロイがツカツカと向かってきた。

「ふうん、何処？」

「さあ、聞いたこともないようなところさ“ルビーアイ赤眼の魔王”と書かれていたよ」

「?!・・・」

エドワードは軽く眼を見開いた。

「心当たりがあるのかい？」

「・・・カルト教団だつてことぐらいだな」

「ほう、それにしては動揺しているみたいだけど？」

「信仰は一種の狂気になる、集まれば集まる程な」

アーノルドが突如言った。

「あなたは？」

「オレはアーノルド・オルトーだ」

「さつき起きた強盗の確保に協力してもらったんでその聴取に連れて来ました」

「オルトー、ということとは」

「ハルナの旦那」

「ほう・・・」

「なあ、エド、この兄ちゃん軍の中では高位にいるのか？」

突如アーノルドはエドワードに聞いた。

「純粋な戦闘力ではかなり上位、その上戦争の英雄」

「潰せば十分なアピールになるか」

エドワードはコクリとうなずいた。

「彼とはどういった知り合いなのですか？」

「ああ、アイツは俺とハルナの命の恩人だ」

「命の恩人？」

「まあ、そのあたりはおいおい話すとして……」

アーノルドは視線をエドワードのほうへ向けた。

「どうするんだ？」

エドワードは向けられた視線を無視しロイに質問をした。

「何がだい？」

「此処は街中だぜ？それにターゲットは場所じゃなく人間だ」

「やはり気付くか。君ならどうする？」

「テロリストにも分かるよう堂々と人気の無い場所へ移るね、もちろん保険として有能な奴を残して」

「……正解だよ」

降参とでも言うようにロイは両手を挙げた。

「で？配置は？」

「ブレダとヒュリーに残ってもらう、ホークアイ君は現場の様子がよく見える場所で援護を」

「俺は中尉のフォローに入った方が良いか？」

「頼めるかい？」

「おう、中尉、行ける？」

「ええ」

そう言うと二人は外へ出た。

「……なあ、俺も行っちゃダメか？」

エドワードを見送ったアーノルドが突如口を開いた。

「……一般人に来られるとこちらも困るのですが」

「悪いが、この二人には言ったんだが今夜しないといけなかった野暮用っていうのがな、そいつ等が手に入れちゃったやばい書物に関する事なんだよ」

「……ちなみに内容は？」

「まあ、ぶつちやけると一匹で街一つぶつ壊せる生物兵器の生産方

法だったりする」

「……一体何の仕事をしてんすか？」

ハボックが尋ねた。

「まあ、一種の何でも屋みたいなもんさ。非合法な事はしないがね」
「ほう」

「今回の書物は禁書だしな、あっちこっちに顔が利く上器用なエドに手を貸してもらおうと思って連絡をつけようと早めに来たら丁度会ったってとこさ」

「顔が利く？器用？」

ロイが困惑した声を上げた。

「悪いがそれ以上言つと怒られっちまうから勘弁な」

「……初耳です」

アルフォンスの暗い声が割って入った。

「ま、それだけ大事にされてるってことさ」

「え？」

「ま、いつか分かるさ」

アーノルドはニカリと笑った。

「……わかりました。ですが必ず我々の指示に従ってください」

「おう」

一行は町はずれの廃工場に向かった。

数十分後

「此処ツス」

車を運転していたハボックが声を出した。

「何だ?!」

一行が車を降りた直後、物陰から大量のレッサーデーモンが現れた。
「合成獣か！」

「いや、アレはレッサーデーモンつつーやつでな、ま、あれなら普通の攻撃も効くだろ。巻き添えを食らいたくないなら近づくなよ！

イクシスト
顕現せよ!!!」

アーノルドはそう言う中指につけていた指輪を巨大な斧に変え振りまわした。

「ツキりがない！」

「一体どこからわいてくるんだよ?!」

「その上いきなり焔を降らしてくるなんて」

「落ち着け！今エド達がこいつらを呼び込んでる奴をとつ捕まえに行ってる筈だ」

一行は次々と現れるレッサーデーモンに疲弊の色を見せ始めた。

「……なんなの？こいつら」

体の疲労がないアルフォンスですら終わりの見えない戦いに疲弊した声を上げた。

その頃、エドワードとホークアイは目的の広場の近くにある時計台にたどり着いていた。

「中尉、こつちに誰がいるぜ」

エドワードは塔の小部屋を指差した。

「おかしいわね、この辺りには避難命令が出てるから誰もいないはずよ」

「……なら単なる浮浪者が俺等と同じ理由か、だな」

「そうね」

「どつする？」

「とりあえず捕まえるしかないわ、どちらにしても危険なことには変わりないし」

「まあ、危険なのがどつちかっていうのは違いけどな」

俺たちがアチラさんか、とエドワードは肩をすくめた。

「んじゃ、とつとやりますか」

パンツ！とエドワードは手を打ち鳴らすと何やら本を見ながらブツブツと何かを唱えている男を素早く拘束した。

「……エドワード君、彼の首についているのは何？」

「ん？首輪だけど」

「なんでそんなものを付ける必要があつたのかしら？」

「あるっちゃある」

「え？」

「一応コレ、錬金術とか使えなくする効果付けてんだよね」

「そうなの？」

「そ、一応、念のためってとこだけど」

その頃アーノルド達のほうはレッサーデーモンの出現が止まった。

「どうやら本当に鋼の達がやってくれたみたいだな」

「おう、・・・そうだ！何でオレがエドに羽付きトカゲって呼ばれるか教えてやるよ」

アーノルドはそう言つて上を向いて雄叫びを上げた。

「なっ」

アーノルドの姿が揺らぎ次の瞬間には巨大な漆黒のドラゴンが現れた。

グアアアアア

竜の尾に付いた巨大な刃を一振りするとレッサーデーモンは一掃された。

「っあの馬鹿が！リザ・ホークアイ中尉！あのトカゲは撃つな！」

レッサーデーモンを呼び出していた魔術師を拘束し猿轡を咬ませた

エドワードはドラゴンの姿を見て思わず舌打ちし叫んだ。

エドワードが駆け付けた時には既にテロリスト達は全員拘束され、

レッサーデーモンは全て始末されていた。

「馬鹿か？お前は」

「エ、エド・・・」

エドワードは眼を眇めてアーノルドを見た。

「誰も本性でレッサーデーモン如きに暴れるなんて言つた覚えはない筈だが？」

「で、でもアーノルドさんがああやってくれたお陰ですぐにあの変な生き物を退治出来たんだから・・・」

アルフォンスが怯えながらフォローを入れようとした。

「アードなら人の姿でも同じように出来た」

しかしエドワードに一刀両断されてしまった。

「・・・え？」

「素手であの程度なら瞬殺出来る」

「マジか？」

「ああ」

エドワードは深く息を吐いた。

「・・・兄さん？」

「何でもない。とりあえず今は深夜でよかつたぜ」

「まあ、アレを見ても寝ぼけてたで済むもんな」

「ああ」

エドワードは頷くとアーノルドを睨んだ。

「お前が説明しろ、自分が撒いた種だ」

「・・・そうだな」

「余計な事は言つなよ？」

「善処する」

エドワード達はロイ達の視線を受けながらそう会話した。

「さて、どこから話したもんかな」

「あの、その前に場所移しません？」

アーノルドが話を始めようとした瞬間ハボックが中断させた。

「・・・そうだな。・・・とりあえず軍部に来て下さい、色々聞

かなければならない。ハボック、車を回してこい」

「っす」

そう言つてハボックは走り去り一行はそれを追って歩き始めた。

「ッ待て、まだいる！」

一番後ろにいたエドワードが立ち止りロイ達に聞こえないようアーノルドに言った。

「っな?!」

歪な人の姿をした生物が倉庫の屋根の上に現れていた。

「っもう出来てたのかよ!」

アーノルドが小声で毒づいた。

「胎児はこの為か」

エドワードの顔から表情が消えた。

「アード、手を出すな。俺一人で十分だ」

「ッ馬鹿言つな!アレ相手じゃ無理だ」

「この世ならざる存在^{もの}、歪みし哀れなる存在^{もの}、浄化の光りもて、世界と世界を結ぶ彼方に消え去らんことを 浄化炎^{×キド・フレア}」

次の瞬間歪な人は燃え上がり、灰も残さずに消えた。

「スゲエ威力だな」

「つまあ、な」

エドワードの体がふらついた。

「大丈夫か?」

「ああ、ちよつと体に合わないもん使つたから拒否反応が出てるだけだ」

「……例のヤツか」

二人のやり取りに気付かなかつたロイが言った。

「鋼の、顔色が悪いぞ」

「……別に、なれない事したせいで疲れただけ」

エドワードはぶつきらぼうに言った。

「大佐!」

そこにハボックと別の部下が車を回してきた。

「行くか」

一行は車に乗って司令部に戻った。

別の顔（前書き）

これでこの事件は終了です。

別の顔

一行は司令部に戻ると

「さつきも見せた通り俺は人間じゃない古代竜エンスンヘンテ・テ・リユウと呼ばれる生き物だ」

「ドラゴン……ですか」

「俺幾つに見える？」

「え？……30ぐらいじゃのいつすか？」

「残念……その50倍さ」

「50倍って……1500?!」

「じゃあ、ハルナさんも……」

「アイツは俺と結婚した時に俺と同じように年をとるようにしただけの人間だ……歳は1000ちょっとだな」

「信じられない……」

「だが、お前ら見ただる俺の本性を」

「しかし……」

「っそういえば、大将はどうやってアーノルドさん達と知り合ったんだ？」

「そうだな、アルは知らなかったみたいだし」

話題を変えるようにハボックとブレダが言った。

「あ……一人で行動してる時にな、追われてた二人を助けたんだよ」

「追われてた？」

「……異端狩りってヤツだ。正体がばれて化け物って呼ばれて武器を持って追いまわされた」

アーノルドがため息をつきながら言った。

「だから、さつきエドワード君がすごく怒ってたのね」

ホークアイが納得したように言った。

「大佐達を信用してなかったわけじゃないけど何処に人の目があるか分からなかったし……」

「いいのよ」

顔を伏せたエドワードにホークアイは言った。

「その時から時々連絡を取っててな。まあ、最近少し音信不通だったが」

「色々あつたんだよ」

「色々・・・ねえ」

アーノルドが目を細めた。

「・・・悪い、今は疲れてるから仮眠室で休んでくる」

エドワードはさらに息をつくと部屋を出た。

「待ちなさい！鋼の！」

「あゝあ、大将の奴行っちゃった」

「珍しいもんを見たな」

アーノルドが目を大きく開けて言った。

「珍しい・・・？」

「あゝ、あそこまでキレてんのは珍しいな」

「そうですね？兄さんっていつも熱血漢というか正義感が強いけど・・・」

「見かけはな、実際は何考えてんのかわかんねえぐらい冷静だ」

「まさか・・・」

「エドのことだ、どうせうまく猫被ってんだろ？」

「・・・」

「基本アイツが本気で隠し事する時には隠してる事すら悟られないようにするから気づかなくても気にしないほうがいいぜ？」

「ほう、そうですね」

「まあ、なんだかんだと言って情け深いから、結局は自分以外のために動いちまうんだけどな」

アーノルドは苦笑いを浮かべ唐突に言った。

「自分の利益で、アイツは殺さなくちゃならないんだ」

「どういう意味ですか？」

「アイツは強い、だがそれ以上に優し過ぎた。だから全てを自分の

責任にしちまうんだ」

「……………」

「まあ、なんだかんだ言ってるがエドはアンタの事を評価してるみたいだしな。ヤバくなったら助けてやってくれよ」

アーノルドは笑いながらロイのほうを向いた。

「そうですか？」

アーノルドは制止を無視し部屋を出た。

「話は終わったか？」

「おう」

「送る、道に迷ってまた騒ぎを起こされたら困る」

「ひでえな」

部屋の外で待っていたエドワードはアーノルドの前を歩き始めた。

エドワードは案内をするふりをしてアーノルドを司令部近くの路地裏に連れてきた。

「おいおい、何処に連れてく気だよ」

「アーノルド」

「何だ？」

「貴様殺し合いをしたいのか」

「………… お前実はかなりキレてんだろ」

「当たり前だ」

エドワードは目を細めた。

「前に“しばらく連絡が取れなくなる。干渉するな”と言ったな」

「え………… あ〜」

「言ったな？」

「………… ああ」

「つたく、しっかりしてくれ。その上余計なことをベラベラと」

「そういうところは変わらん」

「黙れ、アーノルド・オルトー。八つ裂きにされたいか？」

「っ！」

「敵に情けを掛けられる程優しくないぞ？」

「……………」

アーノルドは臆したように唾を飲み込んだ。

「はあ……………ほら、ヒルコ偽典だ」

エドワードは懐から一冊の本をだした。

「サンキュー……………ナトコ写本はまだ時間が掛かりそうだな」

「持ち主が行方を知ってるんだから別に構わないだろう」

「おいおい、ほっといたら街単位で人死に出るぜ？」

「そこまではしないだろう。せいぜい十数人が発狂死するぐらいだ。

アイツも玩具が全滅したら困るだろうからな」

「おいっ！」

「忘れるな、私やアイツにとって人間は餌や玩具に過ぎない」

エドワードはジロリとアーノルドを見た。

「……………」

「まあ、邪魔になるなら手は打つ」

「……………了解。しかし、鋼の錬金術師、ねえ。俺はてっき

り“剣”とか“刃”になると思っ

てたぜ」

冷たいクウキヲ払拭するようにアーノルドが言った。

「使っていない」

「へ？」

「使ったら相手を殺してしまうからな」

「……………」

「推んで周りの情操に悪影響を与えるつもりはないしな」

「なるほど、相変わらず優しいよな」

エドワードは一瞬で間合いを詰めアーノルドの首に手を掛け力を込めた。

「黙れ……………」

「グッ！へいへい」

「……はあ、昔の縁だ。アルフォンス達に余計な詮索されないよう手は回させてもらう」

エドワードはアーノルドの首から手を外した。

「やっぱ面倒見いいじえねえか」

「何か言ったか？」

エドワードがジロリと睨んだ。

「いや、なんでもねえ」

そういうとアーノルドは手を振り待ちの中へ消えていった。

「……あの身勝手小僧が」

エドワードは忌々しげに吐き捨てる大きく息を吸い高らかに歌いだした。

「こんなもんか」

数分後、街中の人間にアーノルドとハルナ、そしてそれに付随する事を思い出させづらくしたエドワードは指令部に帰って行った。

「兄さん、どこ行ってたの？」

「わりい、ちよつと外の空気吸ってきた」

「大將は人ごみに入っちゃうと流されちゃうんだがら気をつけるよ」

司令部に戻るとアルフォンスが心配したような声を上げ、それに付随するように周りがからかいの声を出す。

「だあれが人ごみ踏みつぶされるほど小さいだつて〜！」

エドワードは怒った顔を浮かべながら言い返した。

傷の男

「兄さん……」

「俺達はあんなつちやいけねえんだ」

「うん」

自分の娘を利用した国家錬金術師が軍人に連行されるのを見ながらエドワードは噛み締める様に言った。

「鋼の錬金術師殿でありますか?!」

そこへ血相を変えた軍人が走ってきた。

「そうだけど?どうかしたのか?」

「この近辺で国家錬金術師を狙った連続殺人犯の目撃情報がありました!」

「?!……俺は大佐んトコに行けばいいのか?」

「はい!こちらつくあ!」

二人を誘導しようとしていた軍人がいきなり血を吐いて倒れた。

「?!」

「貴様、国家錬金術師だな」

軍人の後ろにはサングラスを掛け褐色の肌をした男が立っていた。

「ツ?!アル!逃げるぞ!ここだと周りを巻き込んじゃう!」

「うん!」

二人はあわてて人のいない方へ走り出した。

「っ!しつげえな!コレならどうだ!」

路地裏に入ったエドワードは手を合わせ地面につくと即席の壁を練成した。

「ふう、これで何とか……ウソだろ?!」

一息つけると立ち止ったエドワード達の目の前で壁が破壊された。

「っアル!大佐達を呼んできてくれ!ここは俺が引き受ける」

時間稼ぎ用の二重壁

部分によって大幅に材料が異なる壁を

素早く錬成しエドワードは叫んだ。

「でも！」

「いいから早く！」

エドワードはアルフォンスを蹴飛ばし路地から出した。
バチバチッ！

その瞬間壁が崩れ男が姿を現した。

「錬金術を分解で止めてるらしいな」

エドワードは手のひら程の金属の輪 チャクラムを二つ錬成した。
た。

「変わった武器だな」

「最近覚えたんだ、結構便利だぜ？」

エドワードはチャクラムを一つ投げ、もう一つを壁に当てた。

「この程度っ何?!」

男がチャクラムを分解しようとした瞬間男の側の壁から刃が現れた。

「一応、それなりの細工はさせてもらっている」

刃をかわそうとした男に戻ってきたもう一つのチャクラムを掴んだ
エドワードが追撃した。

「っ！」

「甘い！」

数十分にもわたり一進一退の攻防が続いていった。

「なんで！国家、錬金術師を、狙う！復讐か！イシユヴァールの民
！」

「その通りだ！」

しかしエドワードの動きに機械鎧オートメイルがついてこれなくなり始めた。

「っ！しまった！」

バチバチッ！

「何?!」

とうとうエドワードは右腕を捕まれてしまった。しかし機械鎧オートメイルの事を知らなかった為に反応は上手くいかずエドワードは服の右袖を切

り捨て素早く距離をとった。

「オートメイル
機械鎧か」

「あーあ、故障しちゃったじゃねえか。どうしてくれんだよ」
ダラリと下がったままの右腕を一瞥してエドワードは言った。

「・・・・・・・・」

「鋼の！」「兄さん！」

そこにアルフォンスに連れられたロイ達が駆けつけた。

「ある意味ナイスタイミングだな」

そう言ったエドワードは下がろうとし、それを防ごうとした男の前に筋骨隆々の巨体が現れた。

「アームストロング小佐」

「大丈夫かな？鋼の錬金術師殿」

「ああ。気を付けるよ、コイツ錬金術を分解の段階で止めて何でも破壊しやがる」

そう言ったエドワードは左手に持っていたチャクラムを地面に当たった。

「っ！」

その瞬間大量の剣が男の足元から生えた。

「悪いけど、これ、一通りしか錬成出来ねえから殆どバックアップ出来ねえんだ」

エドワードはアームストロングにチャクラムを見せた。

「これ以上君にばかりイイ格好はさせんよ」

ロイはそう言いながら発火布の手袋を出し手に嵌めた。

「危ない！」

しかし前に出ようとしたロイをホークアイが足で転ばした。

「何をするんだ！」

「雨の日は無能なんですから下がって置いて下さい」

「あゝ、こつも湿つてちゃ火の粉は出ねえな」

ホークアイの言葉にハボックは納得の声を上げた。

「見よ！わがアームストロング家に代々伝わりし芸術的錬金法を！」

そう言った言い合いを周囲がしている間にも男とアームストロングの錬金術・格闘戦は激しさを増していった。

「こんな事してる場合じゃないわね」

ホークアイは銃を構え、一瞬間の間隙をついて男に向かって発砲した。

「当たったか?!」

「いえ、どうやらギリギリでかわされてしまった様です」

周りの声にホークアイは悔しげに答えた。

「あの目は……」

衝撃でサングラスが外れた男の目を見たロイは声に動揺を滲ませた。

「イシュヴァールの民か……傷の男! 貴様は完全に包囲されている! 大人しく投降しろ!」

いつの間にか路地の反対側にも多くの軍人が銃を構えていた。

「……」

傷の男は黙って地面に手をついた。

「……」

軍人達が慎重に距離を詰め始めた。

ピシッ!

「全員下がれ!!」

エドワードは地面から何かがひび割れる音が聞こえた瞬間叫んだ。

ビシッガラガラ

次の瞬間傷の男を中心に地面がひび割れ、崩れた。

「っしまった!」

誰かが叫ぶが傷の男は瓦礫に混じり姿が消えた。

「逃げられたか」

「みただいな」

「……ヒューズ、お前今まで何処にいた」

「あそこ」

いつの間にか現れたヒューズは近くの店の物らしい箱の影を指した。

「何隠れてるんだ!」

「俺は錬金術は使えねえんだ。あんな万国デタラメ人間のビツクリ

シヨーに巻き込んだじゃねえ」

思わず言ったロイにヒューズはシレッと答えた。

「デタラメ人間、ね」

エドワードは皮肉気な笑みを一瞬浮かべるが一瞬で消した。

「とりあえず、どっか屋根のあるトコ行こうぜ、風邪ひく奴が出る前に」

「そつだな」

一行は付近を立ち入り禁止に立ち去った。

翌日、エドワードとアルフォンスは壊れた機械鎧オートメイルを直すためアームストロングを護衛に旅立つ事になった。

「事後処理が面倒だから私の管轄内で死ぬ事は許さん、だとさ」

駅に見送りに来ていたヒューズが言った。

「了解。絶対でめーより先に死にませんクソ大佐」

「憎まれっ子世にはばかる。おめーもロイも長生きするぜ」

エドワードの答えにヒューズは笑いながら答え、互いに敬礼をし、別れた。

疑惑 前編

「危ない！炎の矢フレイムアロー！！」

「うわっ！」

ヒューズに銃を突き付けていたエンヴィーに細長い炎が襲い掛かる。

「ガウリイ！」

「おう！」

長身の金髪の男がエンヴィーに切り掛かる。

「ちっ」

エンヴィーは慌てて犬に姿を変え走り去った。

「っ逃がすか！」

「待って！ガウリイ、深追いはしないで！」

ガウリイとゼルガディスが慌てて後を追い掛けようとするが、リナが止めた。

「いいのか？」

「ええ、他にも仲間がいるがもしれないし辺りを警戒してて」

「ああ」

「アメリカ、この人の治療をお願い」

「はい！」

アメリカはヒューズに手を翳し傷を治療した。

「・・・すごい錬金術だな」

「？錬金術じゃなくて白魔術ですよ？」

「魔術だった？」

「アメリカ、エドからこっちには魔術は無いつて聞いたでしょ」

「あ、そうだった」

「あんたら何者だ？」

「アタシ達、海の向こうの大陸から来たの」

「海の向こうだったって？！そんな人がなんでこんな内陸の国に」

「一種の視察みたいなもんよ」

「ふうん」

「ところでさ、アタシ達の事お偉いさん達に黙っててくれない？」

「は？」

「一応さ、お忍びなのよね」

「助けた分はそれでチャラって事か？」

「ええ」

「……分かった、連中は俺一人で退けたって事にしとく」

「助かるわ」

そう言つてリナ達は立ち去った。

「親友に話すな、とは言われねえな」

ヒューズはニヤリと笑うとロイに連絡をとった。

数日後、少ない手掛かりからロイ達は^{ホームフックス}人造人間の一人　ラス

トを追い詰めた。

「でも、ある意味ラッキーだったわね。貴方が鋼の坊やの後見人になつたのは」

廃墟の一室に追い詰められたラストは笑みを浮かべ言った。

「何？」

「獲物は纏まつてくれていた方がいいわ」

「ほう、国家錬金術師を獲物と言うのか？」

「そうよ、折角母親を殺したのに鋼の坊やは全然乗ろうとしないって報告が上がってきてたから一時はどうなるかと思つていただけれどね」

「何の話だ？」

「あら、鋼の坊や達から聞いてないの？レイン・オスカーって男が自分達に人体錬成をそのかしたって」

「……！」

「あら、その様子じゃ聞いてないみたいね。信用されてないんじゃない？」

「ずいぶん言い様だな」

「これから死ぬ人間に何を言っても同じでしょ？」

「ほう、ならこれは知ってるか？水は水素と酸素で構成されているという事をな！ハボック！出るぞ！」

足元の水に錬成陣の書かれた手袋を浸けていたロイはハボックと素早く部屋を出ると

「ライターの火を投げ入れろ！早く！」

「はい！」

ハボックが命令通りライターを投げ入れた瞬間室内は爆発した。

「・・・そろそろ大丈夫だな、いくぞハボック」

「うっす」

二人は室内に戻り辺りを見渡した。

「いませんね、逃げたんじゃ？」

「いや、新しい焼死体があると油で唇がべたついて分かる」

「・・・いやな分かり方っすね、イシユヴァールの経験すか・・・

?!」

パキンッ！

ハボックの目の前のがれきの山からラストの爪が現れるが謎の蒼い壁に阻まれ折れた。

「な?!」

「ハボック!!」

「まだ生きてんのかよ?!」

素早くハボックはロイを庇うように近くまで下がった。

「貴方、錬金術師だったの?!」

「へ？違う違う！」

「じゃあ、その錬成陣は何なのよ!!」

ラストの視線の先　ハボックの足元　に謎の陣が現れていた。

「それは、こちらで調べる事だ。観念しろ、発火布はまだ予備があるんだからな」

ロイはポケットの中からビニール袋に入った手袋を出した。

「用意いいっすね」

「用心に越したことは無いという事だ」

ロイはそう言って指をパチリと鳴らした。

「つく！」

ラストは最後の足掻きと爪を伸ばすがそれが蒼い壁に阻まれ燃え尽きた。

「・・・これで終わりっすかね」

「おそろくな」

「大佐、この青い壁どうにかなんねえッすか？」

「・・・したいのはやまやまだが原理が分からん」

「へ？」

「これは錬成陣の体を成してない」

「どういうことっすか？」

「つまり何の意味もないという事だ」

「でも現にこの変な壁作ってますよね」

「ああ・・・ハボックこの陣に心辺りは無いか？」

「・・・あ！」

「あるのか？」

ハボックはごそごと懐を漁った。

「確か前に大将がくれたお守りに・・・大佐・・・なんか光つてんすけど」

「・・・見せてみる」

「これッス」

ハボックはひもの部分を掴みお守りを出した。

「・・・確かに光ってるな」

「何なんっすかね・・・あ!!」

お守りは出した後しばらくわずかの間光っていたがパキリと罅が入ったと思つた瞬間に割れて粉々になった。

「・・・割れちまいましたね」

「・・・欠片を集める、後で調べよう」

「はい」

「あとこの事は鋼には伏せておくように、お守りの事も含めてだ」

「いいんつか？」

「ああ、お前じゃ探りを入れた途端に鋼のに悟られる」

「・・・Yes, Sir」

ハボツクは15の子供にいともし簡単に悟られると思われているのかと肩を下ろして返事をした。

疑惑 後編

数日後

「鋼の、聞きたい事がある」

「なんだよ」

「レイン・オスカーという錬金術師に聞き覚えは？」

「……確か数年前に行方不明になった生体専門の国家錬金術師じゃなかったか？」

「そうだ、それをどこで？」

「一応目的が目的だからな、軍の資料で生体に詳しい錬金術師は出来る限り当ってみた」

「……面識はないんだな」

「当たり前だろ、レイン・オスカーはオレが国家錬金術師になる前から行方不明だったからな」

「ああ、そうだったな」

「で？何でいきなりそんな事を？」

「いや、妙な噂を聞いてな」

「噂？」

「君とレイン・オスカーが既知の仲だと」

「何言ってるの？ソイツが行方不明になったのはオレがアレをする何年も前だろ」

「それもそうだな」

「これで話は終わり？おれ明日の便でここを出るんだけど」

「……そう言えばハボックがこの前君にもらったお守りが壊れたと言っていたぞ、帰りに直してやれ」

「……」

「どうかしたのかい？」

「ちなみにその噂、誰から聞いたんだ？」

「言ったら君が殴りに行きそうだから言わないよ」

「誰がそんなガキっぽい事するか！」

「そうかい？」

「だあ！文献は明日取りに来るからな！」

そう言うとエドワードは背を向けドストドスと足を踏み鳴らし執務室を出た。

「人造人間とぶつかったか……」

エドワードは考え込みながら廊下を歩いていた。

「よ、大将」

「あ、ハボック少尉」

「わりい、この前もらったお守り壊れちゃった」

「ああ、大佐から聞いている。……えっと、ほら新しいお守り」

「え？直さないのか？」

「あれは構築式がちょっと複雑だから」

そう苦笑するとお守りをハボックに渡した。

「じゃ、俺は図書館行くから」

エドワードは司令部を後にした。

「あのお守りに使われていた物質は普通の水晶だったよ」

「じゃあ、やっぱりあの陣に意味が？」

「だろうね」

「一体大将はあんなご利益いっぱいのお守りをどこから仕入れてきたんスかね？」

「さあな、今度本人に聞くさ」

「そつすね」

「ま、アレが口を割るかはわからんが」

「どついうことつすか？」

「どつやら彼は我々が思っている以上の狸のようだからね」

その頃司令部を出たエドワードは思わぬ人間と顔を合わせた。

「あ！小さい錬金術師さん！」

「セリム殿下、なぜここに？」

「セリムでいいですよ、あと敬語もいりません。ちょっと父上の真似をしてみました」

「真似を……で脱走じゃん」

「そうとも言います」

「おいおい……まあいいや、脱走ついでにちょっと二人つきりで話さないか？」

「？わかりました。丁度いい場所を知っているのでそこにしましよ
う」

そう言うとセリムはエドワードの手を引っ張って繁みの蔭へ連れてきた。するとエドワードの声色が変わった。

「思惑が外れたか？セリム、いやプライド」

「何の事ですか？」

「人造人間の気配は独特だからすぐにわかる」

エドワードは口元に薄い笑みをのせた。

「僕が何故プライドだと？」

「嫉妬、色欲エンズワイ、強欲ラストときたら残りは限られる。お前の目は他者を見下す目、すぐに分かる」

「参りましたね」

セリム　　プライドは肩を竦めた。

「私は存外彼等が気に入っている。傷付けるなら……消す」

エドワードはプライドの背後に回り左手を首に這わせた。

「私はそっちが思っている程優しくはない」

「とんだ化け物ですね、あなたは」

「どうとでも、慣れている」

「何故彼等に手を貸すのですか？」

「さっきも言ったはずだ。気に入っていると。戦争がなんたるかを知って、それでもなお理想を捨てずに国のトップを目指すとは興味

深い」

「まるで戦争を体感したみたいない方がいい方ですね」

「あまり表面ばかり信用しない方がいい」

エドワードは喉を鳴らして笑った。

「真実は常に闇の中、だからこそ私は真理を求める」

エドワードはプライドの首にから手を離れた。

「所詮は造りモノ、脆弱だよ、お前等は」

「……」

プライドが苦々しげにエドワードを睨みつけた。

「セリム殿下〜!」

「呼ばれているぞ。早く行ってやれ」

そう言っつてエドワードはプライドに背を向け立ち去った。

「……背中を見せるのは余裕の表れですか」

プライドはそう呟くと、セリム殿下の仮面を被り自分を探している者たちのもとへ向かった。

平穩

エドワードはアルフォンスを宿に残し、数カ月ぶりにロイ達の元を訪れていた。

「鋼の？」

手伝う事もなく暇をもてあましソファーに座っているエドワードに仕事を一段落させたロイが声を掛けた。

「大将、寝ちまつてますよ」

「良く寝てるので起こすのが忍びなくて」

先に休憩をしていた些かハボツク達が申し訳なさそうに言った。

「鋼の、起きなさい。風邪をひくぞ」

ロイは腰を屈めエドワードに呼び掛けた。

「マ・・・グナス？ 珍しい、な・・・お前が、眉間に皺を寄せ
るなんて・・・」

エドワードはふわりと笑いながらロイの眉間に左手で触れた。

「っ鋼の、寝ぼけてるのか？」

「そういう顔をするのは私の役目だろ・・・っ」

パタリとエドワードの腕が落ち、再び寝息をたて始めた。

「・・・大将、寝ぼけてたみたいッスね」

予想外の行動にロイは目を見開き固まっていた。

「大佐？」

「あ、ああ」

「マグナスって言ってましたね」
ヒュリーが言った。

「あんな甘い顔をするんだから彼女かなんかッスかね？」
起きたらからかってやるっ、とブレダがニヤリと笑った。

「さあな、今度本人に聞けばいい」

ロイは眉間の皺を更に深くして答えた。

「大佐、何怒ってんスか？」

「別に怒ってなどいない」

「そうっすか？」

首を傾げるハボックを無視し、ロイはエドワードを揺すった。

「……っん」

「随分ぐっすり眠っていたね」

「……5分も経ってないけど？」

ロイの皮肉にエドワードは壁の時計を見ながら言った。

「大将、マグナスって誰？」

「っえ？」

ハボックの予想外の言葉にエドワードは目を見開いた。

「寝ぼけて大佐と間違っって呼び掛けたんですよ」

「マジかよ」

エドワードは頭に手をやって呻いた。

「で？ 彼女なのか？」

ハボックが興味津々に聞いた。

「彼女じゃねえよ！ 死んだ知り合いだ」

「え……スマン、大将」

「うっん、寝ぼけた俺が悪いんだし」

エドワードは笑って首を振った。

「そう言えば、大将」

暗くなった空気を誤魔化す様にブレダが言った。

「あ？」

「なんで時計二つ持ってんの？」

ハボックの指した先には銀と黒の二つの鎖があった。

「え？ああ、こっちは時計じゃないぜ」

エドワードは黒い鎖を引いて先についている時計のようなものを出した。

「時計じゃない？」

ハボックがソレを手を取った。

「開けていいぜ」

「んじや遠慮なく」

八ボツクが蓋を開けると中では沢山の異国語と色とりどりの点が少
しずつ動いていた。

「大将、これ何だ？」

大量の点に目をしばたかせた八ボツクが聞いた。

「ホロスコープ」

「ホロスコープ、別名チャートは占星術における各個人を占うため
の天体の配置図。惑星、黄道十二宮、十二室、角度の4つの要素で
構成される」

ファルマンが得意の蘊蓄を披露した。

「まあ、俺は占いじゃなくて方角とか調べるのに使ってるけど」

「へえ」

八ボツクはしげしげと手に持ったホロスコープを眺めた。

「そう言えば話は変わるけどさ、シン国の王族がお忍びでこの国に
来てるみたいだぜ」

八ボツクがしばらく離しそうにないのを感じたエドワードは時間潰
しのために言った。

「は？」

「なんでも不老不死が目的だそうだ」

「ずいぶんとファンタジーだな」

「王様の心象を良くしたいらしいぜ」

「そうか……」

ロイは考え込むように手をあごに当てた。

「ちなみに俺が会ったのはヤオ家のリン・ヤオとお供二人の一行と
チャン家のメイ・チャンとお供のミニパンダだけだけどまだいるか
もな」

「ふむ……不老不死となると、ホムンクルス 人造人間とぶつかる可能性
があるな」

「ああ」

エドワードは頷いた。

「んで、報告書のチェックは？」

「ああ、大丈夫、今回はそれほど問題を起こしていないようだからね」

「俺だって好きでやってるわけじゃねえ！　トラブルの方がやってくんだよ！」

エドワードは叫んだ。

「しかし、それに首を突っ込んでいるのは君だろう」

そう言いながらロイは笑った。

「やかましい！」

エドワードは真っ赤になって怒り、それを周りの軍人は笑った。

しかし、彼らは知らなかった、こうした和やかな時間がしばらく過ぎせなくなるのを。

北の女傑

大總統との対面の後、ロイ、エドワード、アルフォンスは軍部の廊下を話しながら歩いていった。

「ものの見事にバラバラだな」

そこでホークアイやハボック達の異動先を聞いていたエドワードは部屋を出ると呆れた声を上げた。

「ああ、モテる男は辛いよ」

ロイは肩を竦めおどけた様に言った。

「んな悠長なコト言ってる場合かよ」

「まだやらなければならぬことがあるからな、これ位じゃへこたれんさ」

「そうかよ。アル、行こうぜ」

エドワードはそう言うくとアルフォンスを促し歩き始めた。

「次は北部に行くから、ファルマン少尉に伝言は？」

「いや、特にはないよ」

ロイは二人についていきながら言った。

「あつそ」

話している内に三人は分かれ道に立った。

「ほら、アームストロン少佐から、紹介状だ」

ロイは懐から一枚の紙を出した。

「サンキュー」

エドワードは紙を受け取るとロイに背を向け歩きだした。

北部　ブリッグズ要塞、足を踏み入れた途端に不審者として攻撃されたエドワード達はロイから渡されたアームストロング少佐の紹介状を見せ、身元を証明して解放された。

「はあ、疲れた」

エドワードは伸びをしながら言った。

「悪いな」

ブリッグズ兵の一人が言った。

「良いつて、此処は国境、こついう態度は必要だし」

エドワードはそう言つて肩を竦めた。

「言つな、赤チビ」

オリヴィエ・ミラ・アームストロング少将

名字の通りアー

ムストロング少佐の姉であり、ブリッグズの北壁の異名をとる女傑、は言った。

「別に」

エドワードがそう言つてそつばを向いた瞬間、壁が何者かに突き破られ、巨大な男が現れた。

「人造人間……！！！」

男の右肩にあるウロボロスの紋章を見たエドワードが舌打ちしながら呟いた。

「ホムンクルス……？ 何者だ？ アイツは」

「大總統とセリム殿下の兄弟」

「は？」

「正確にはセリム殿下の弟で大總統の兄だ」

「何を言つて……」

「アイツ等、自分が人間だなんざ言つた事ねえしな」

エドワードの視線は人造人間ホムンクルスから離さず言った。

「アル、ウインリイを連れて即刻避難しろ」

「でも……」

「エド……」

エドワードの機械オートメイル鎧の調子を見に来ていたウインリイとアルフォンスを後ろに隠す様に動いた。

「全員、そのまま構えを解くなよ、解いたら「おー、エド」……え？」

アルフォンスがウインリイを連れ避難していくのを横目で見ながら、

人造人間ホムンクルスに向け武器を構えるブリッグズ兵達にエドワードが声をかけようとした。しかしその緊迫した空気をぶち壊すような声が響いた。

「アード?! なんでここに?」

声の持ち主 アーノルドにエドワードは思わず驚愕の声を上げた。

「はは、狩人に追われててな。ハルナと二手に別れて撒いたんだ」
「撒き切れてないだろうが! ったくこっちは人造人間ホムンクルスもいるつてのに」

エドワードはぼやいた。

「は? ホムンクルス?」

「赤チビ、こいつらは誰だ?!」

突然の乱入者にオリヴィエは警戒した面持ちでアーノルドと人造人間ホムンクルスを交互に見た。

「あつちは大總統の配下、という仲間。んでこっちは俺の知り合い、単細胞バカだから騙し打ちとかはできねえよ」

「いたぞ!! 戦車だ!!」
チャリオット

その声と共に場を埋め尽くす大量の人間が突如として現れた。ビシッ!

スロースに加え、後から現れた者達の重さに耐えきれず、床が崩れ落ちエドワード達は瓦礫によってバラバラにされてしまった。

「っアード!! アル! ウインリイ!」

うまく足で着地しエドワードは身近な者の名前を叫んだ。

「そのキンキン声、赤チビか」

「アームストロング少将・・・」

その声を聞きつけてオリヴィエがエドワードの前に現れた。

「何だあの連中は」

「アードの個人的な敵ってヤツだ」

エドワードは苦々しげに言い捨てた。

「自分の信じる神のためならどんなモノであつても滅するのが自分たちの役目だつて叫ぶ狂信者だよ」

エドワードの言葉に合わせるように二人の周りに大勢の狩人が現れた。

「おい！ 餓鬼、アレの知り合いらしいな」

「知り合いじゃなくて、アルカナ」の一人だと言つたら？」

エドワードは嘲るように言つた。

「何?! ならば貴様も火竜フレアロード王様のために死んでもらう!」

そう言つて狩人たちは飛びかかつてきた。

「つたく！ やりづらい！ 赤チビ！ お前が無駄に挑発したからだぞ!」

襲いかかってくる男たちを時にいなし、時に叩きのめしながらオリヴィエが叫んだ。

「下手に連携されるよりはマシだろうが」

「なんとかならんのか!」

のんびりと言い返すエドワードにオリヴィエは怒鳴る。

「あゝ大佐が嫌がりそうだからあまりしたくねえがあるぜ」

「マスタングのヤツが嫌がる?それはいい、ヤれ! 赤チビ」

エドワードの言葉にオリヴィエはニヤリと笑うとそう命令した。

「あの人にはには黙つてくれよ」

ため息をつくとエドワードの姿が消えた。

「ぎゃあああ!」

狩人達は悲鳴が上げ倒れ伏した。

「?!」

「……殲滅完了」

エドワードはいつの間にか出していた剣を仕舞うと消した。

「……それがマスタングの嫌がる事か?」

「あの人は私がこういう事をするのをして欲しくないみたいでな、それにアルフォンスの教育にも悪い」

エドワードは目を細めた。

「それが本性か？」

「・・・黙ってて貰いたいんだが」

「それはそつちの出方次第だな」

オリヴィエの口許に笑みが浮かんだ。

「図に乗るな、小娘」

エドワードは一瞬でオリヴィエの後ろに回り首に手を添えた。

「私はその気になれば部下ごと皆殺しにしてやれるぞ？」

「・・・・・・・・」

「沈黙は金、そう言うだろう？」

エドワードは手を離すと歩き始めた。

「兄さん！」

上にのこっていた狩人たちをブリッグズ兵と捕まえたらしいアルフォンスが天井の穴から身を乗り出し声をかけた。

「今、ロープを下ろすからそこでおとなしくしてて！」

しばらくすると上からロープが下ろされた。

「何やってんだ？ 早く行くぞ」

エドワードは振り返り言った。

「ああ・・・今行く」

オリヴィエもそれに続き、二人は上に上がった。

「アル、ホームクルス人造人間は？」

「うん、なんかメンドクセーって言いながらどっか行っちゃった」

「なんだよそれ・・・」

アルフォンスの言葉にエドワードはガクリと肩を落とし呻いた。

錬金術師VSセイレーン

血の惨劇による国土練成陣

陣上のすべての命を対価

に賢者の石を作り出す非道な錬金術、最後の一角となる北部にはドラクマの軍隊が現れた。

「女傑不在時を狙ったか」

軍人たちが迎え撃つ準備に動く中、壁にあげられた穴からエドワードとアードが覗き込んだ。

「おい、あそこにいるのってさつき会ったギンブリーつつう国家錬金術師じゃねえか？」

「兄さん……」

アーノルドの言葉にアルフォンスは不安げにエドワードを呼んだ。

「殺らなきゃ殺られる、まさに大量に血の流れるのに絶好の状況だな」

エドワードは唇に指を這わせながら言った。

「……マイルズ少佐！ 少し話がある」

エドワードは穴から離れるとマイルズ少佐　オリヴィエ不在時の現場指揮官に声をかけた。「何か用か？」

「もし、上層部がこの戦いで敵味方関係なく大量の死者が目的だとしたらアンタはどう動く？」

「?!」

「おいおい、もしもの話だぜ？」

エドワードは笑いながらそう言ったがその瞳は笑っていないかった。

「本当に、本当にもしそれが本当だったならば殺す数も殺される数も最小限にさせてもらう」

マイルズは断言した。

「よし、もしそうするならば、武器の破壊と足を集中的に狙うよう指示を出してくれ。上には事情聴取、及び、今後の交渉を有利に進めるための証人として生かしたとでも言えば通用する。賠償金をほ

「まったく足るだけじゃなくて、アッチでも責任のなすりつけ合いが早く終わらせられるからヘコヘコしながらこっちに有利な条約を結べるだろうってな。責任は俺がとる。これでも少佐相当官だ」

「そうか。なるほどな」

ニヤリと笑うエドワードにマイルズも笑った。

結果として小競り合いはブリッグズ軍の勝利であり、エドワードの指示通り死者は敵味方なしだった。

「よし、あっちで凍えてるドラクマの連中をしょっ引くぞ」

エドワードはそう言っただけで幾本ものロープと担架を練成した。

「……それは困りますねえ」

戦いの最中はどこかに隠れていたギンブリーが倒れ伏していたドラクマ軍の側に現れ手を合わせた。

「っしまった！ テメエら逃げる！」

エドワードが叫んだが主に足を負傷しているドラクマ軍人達が逃げられるはずもなく

ドンッ！

一瞬でギンブリーの錬金術で爆死させられた。

「ンの野郎……」

エドワードはギンブリーを睨みつけ呻いた。

「全員巻き込まれなくなかったらこっち側の窓を防いで全力で防衛状態を維持しろ！ アル！ 塞がらない部分は錬金術で塞いでやれ

！ アード！ ウインリイとアルフォンスを守れ！」

エドワードはそう指示を叫んで窓から飛び降りた。

「……君一人ですか？」

降りてきたエドワードにギンブリーは首をかしげた。

「錬金術師同士の殺し合いに普通の軍人は巻き込めねえし、アルフォンスは優しすぎる」

「ふむ、一理ありますが、貴方はどうなのですか？」

「俺は軍の狗だ。ハナから覚悟は決めてる。それにちょうどアルフオンスも大佐達も見えてないからな……」

エドワードは口だけで笑った。

「始めようか、殺し合いを」

エドワードは手を合わせる雪の上についた。
バチバチツ

ギンブリーの足元の雪が盛り上がり槍の様に体を突き抜こうとした。
「なっ?!……以外ですね殴り掛かると思っていましたか」

「悪いが体術はあまり得意じゃないんだ」
左手を振りナイフを飛ばした。

「今までの戦い方はブラフですか？」

「さあ、な！ 顕現せよ《イグジスト》！」

エドワードはどこからともなく刀を出した。

「君も賢者の石を持っているみたいですね」

「残念、外れだ！ 冥壊屍！」

エドワードの影が獣の形になり雪原を音も無く駆けた。
「な?!」

影の獣が影の左腕を食いちぎるとギンブリーの左腕が垂れ下がった。

「よそ見は厳禁、敵から目を離すな。習わなかったか？」

エドワードの刀が喉にかかった。

「人間離れしてますね、まるで化け物だ」

「いつ俺が自分は人間だと言った？」

「人造人間？」

「あんな紛い物と一緒にするな」

エドワードは喉にかけた刀をさらに近づけ、ギンブリーの喉からは一筋の血が流れた。

「じゃあな」

そう言ってエドワードが刀を引こうとした次の瞬間

「エド！ 鎧の坊主が！」

アーノルドの叫びにエドワードは飛びのいた。

「っち！ 命拾いしたな。とつとと消えろ」
そう言つてひととき強い殺気を浴びせるとエドワードは皆に駆け戻つた。

「アード！ ツアルフォンス?!」

エドワードの目の前には崩れ落ち、ガタガタと震えるアルフォンスの姿があつた。

「っち！ 拒絶反応か！ アルフォンス！ 聞こえてるか?!」
「……兄……さん」

「そのままゆっくり自分を認識していくんだ、出来るな？」
次第にアルフォンスの震えが治まつた。

「エド、あの男の人は？」

「徹底的に叩きのめしたらどっか行つた」

「じゃあ、これで一件落着か。アーノルドはカラカラと笑つた。」

「とりあえず、ここではな」

能天気なアーノルドの様子にエドワードはため息をついた。

真実の一端

自信の影を操るプライドを暗い密室に閉じ込め、見張りをアルフォンスに任せたエドワード達はセントラルにある安いアパートに潜伏していた。

「お前はなんで人造人間共と戦うんだ？」

ダリウス ギンブリーの元部下でありゴリラとの合成人間、
が窓から外を見ていたエドワードに問い掛けた。

「目障りだから、ただそれだけ」

「おいおい、そりやないだろ」

「・・・生き物は結局の所自利的にしか動けない、だから俺はあいつらの行動を非難する資格は無い」

エドワードは遠くを見ながら言った。

「??？」

「俺だって必要に迫られれば国を滅ぼすぐらいする」

「な?!」

「ようは手段の有無の差でしかないんだ。俺や人造人間にはそれが出来るだけの手札があるっただけ」

「・・・マジか？」

「冗談でこんな事を言える程おちゃらけてない」

エドワードは肩を竦めた。

その夜

スリーピング

「眠り」

エドワードは同行者達を眠らせると部屋に結界を張り軍人達に見つからないようにすると部屋を抜け出した。

「お偉方だけしか知らない機密事項だからな、中の警備が手薄過ぎる」

魔術で人のいない中央司令部の地下室に侵入したエドワードは辺りを見渡した。

「万が一でも情報を余所に持ってかれたり誰かが魔がさしたら厄介だからな。バックアップを先に始末させてもらおう」

エドワードはしばらくファイルを睨むがやがて懐に仕舞った。

「後はこの人形に共食い機能を組み込んでおくか」

エドワードは壁にぶら下がる白い人造人間ホムンクルスモドキに視線をやった。
パンツ

エドワードは手を合わせると錬金術をモドキに組み込んだ。

「そろそろ帰るか」

エドワードは燃やし残しと自分が来た証拠が無いかを確認して地下室を出た。

「まだ、寝てるな」

エドワードはアパートに戻ると懐に入れていたファイルを隠し、行く時に掛けた魔術を解いて横になった。

無意味な復讐

エドワード達は傷の男に襲われた国家錬金術師の振りをしたエドワードがすきをつけて門番を気絶させ、ロイ達のクーデターで要人が集まっている中央司令部に侵入した。

「とりあえず……地下だな、まず例の練成陣をキ口単位で塞いで錬金術発動を少しでも阻みたいし」

エドワードの提案に他の者も頷き、一行はまず地下に行くための道を探すことにした。

「……？ これじゃねえか？」

ジェルソ　　ガマガエルとの合成人間でありギンブリーの元部下である男、が奥の広間にある大きな扉を指した。

「……該当しそうなのはそれくらいだよな。俺が開けるからなんか出てきたら対処よろしく」

エドワードはそう言って扉に手をかけた。

ギー

「え？」

エドワードが扉を開けようと力を込めた丁度その瞬間中から扉が開かれ大量の白い人造人間もどきが大量に出てきた。

「っ何なんだよ?!」

「とりあえず味方じゃないのは確かだな」

傷の男は襲ってくるモドキを腕に刻まれた錬金陣で破壊しながら答えた。

「フリー！ 先に謝っとく!!」

エドワードはそう叫ぶと手を打ち錬金術で自分たちが入ってきた行き口を塞いだ。

「いや、お前がやらなかったら俺がやる所だった」

ダリウスが言った。

「さて、出口は塞いだし、なんか知らねえけど同士討ちもしてくれてるし、ちよつとグロいけど我慢しろよ!!」

同士打ちするよう仕組んだのは自分であるがエドワードはそう嘘をつき、再び錬金術を使うと地面から大量の刺を出しモドキ達を天井に打ち付けた。

「あとは・・・こうだ!」

エドワードは刺の上の部分をつなげ板のようにするとそのままモドキを押し潰した。

「・・・なかなかスゲエ事やるな」

ザンパノ ヤマアラシと猪との合成人間でギンブリーの元部下の男、が僅かに引いたように言った。

「傷つけても修復しちまうみたいだからな、なら行動不能にするしかねえだろ」

エドワードは顔をしかめながら言った。

「鋼の?」

そこにエドワードが塞いだドアを錬金術で直したロイが現れた。

「大佐、入れたんだな」

「うむ、そっちは・・・なかなか個性的な組み合わせだね」

ロイはエドワードの同行者を見て思わず言った。

「なりいきでこうなっちまったんだけどとりあえず味方だから安心してしろ」

言いながらエドワードはモドキ達の出てきた扉の奥を覗いた。

「罨とかはなさそうだし早く行こうぜ、時間が惜しい」

エドワードは扉を大きく開け中に入って行った。

「・・・もう少し警戒心を持つべきだな」

「同感だ」

傷の男スカの評価にロイは頷きながらエドワードの後を追った。

「エドワードさん!」

「メイ！　なんでここに?!」

地下を進む一行の前にブリッグズでエンヴィーの本体を持たせて別れたメイ・チャンが反対側からかけて来た。

「すいまセン、どうしても、気になっテ」

メイは息を乱しながらエドワードの問いに答えた。

「メイ、エンヴィーは?」

「ここに来る途中で、入れた瓶を割ってしまッテ」

「それでエンヴィー様復活ってこと」

悠然とした様子でエンヴィーが歩いて来た。

「モドキを吸収したのか」

「モドキ?」

エドワードの呟きにロイが訊ねた。

「アンタが来る前に何か白くて気味の悪い連中が来たんだよ。エドが錬金術で押し潰しちまっただけだな」

「なるほど、あの見覚えのない柱はそれだったわけか」

ロイは納得したように言った。

「大佐、コイツは俺が相手するから先行って」

エドワードは突然言った。

「どうするつもりだ」

「少し聞きたい事があるんだ」

「何を?」

ロイは当然の疑問を口に出した。

「秘密、言ったらアンタ等止めそうだし」

「止められるような事をするつもりか?」

エドワードの答えにロイは目を細めた。

「・・・さあ、アイツの返答次第だね」

エドワードは肩を竦めた。

「何の話をしてるんだよ!」

無視されたのを怒ったのかエンヴィーが手を伸ばしてきた。

「鋼の?!」

バチバチッ！

エドワードが錬成した岩の掌がエンヴィーを殴り飛ばし、エンヴィーがパイプにぶつかり中を流れていた水が辺りに吹き出した。

エドワードは振り向かずに行った。

「無能になりたくないならたつたと行け」

「いいだろう、そのかわり殺すな！これは上官命令だ！」

「了解」

「行くぞ、中尉、君たちも」

「・・・はい」

ロイ達はエンヴィーの横を通り過ぎようとした。

「人の話聞いている？行かせる筈ないじゃん」

それを阻もうと伸ばしたエンヴィーの腕をエドワードが地面から槍を出して縫い止めた。

「お前の話し相手は俺だよ」

エドワードは言った。

「・・・行つたな、さてエンヴィー質問だ。数年前にリゼンブルに来た人造人間ホムンクルスはお前か？」

ロイ達の姿が見えなくなったのを確認するとエドワードが問いかけた。

「リゼンブル？・・・ああ、あの田舎か」

「当たり前いだな」

「そうそう、なんか女に毒入りの酒を渡せって言われたんだった。

確か名前は・・・」

エンヴィーはわざとらしく眉間に皺を寄せた。

「トリシャ・エルリック」

「そう、そんな名前だったな」

「それだけ分かれば十分だ、氷の矢フリーズ・アロー」

エンヴィーの周りに青白い矢が現れ、突き刺さった。

「なっ！」

「大佐に殺すなと言われたからな・・・とりあえず死ぬより

も苦しめればいい。アクア・クリエイト 浄結水」

エドワードの声と共に大量の水がエンヴィーの頭上に降り注いだ。

アクアレザー
「水流閃」

エンヴィーを水が貫いた。それを見たエドワードは左手を上げ軽く振った。

「?! ガボツ!」

「溺死って意識があるとかかなり苦しいんだよな」

エンヴィーが水に包まれるのを見ながらエドワードは笑った。

「次はどうしようか・・・そうだな」

エドワードは再び左手を振り水を落とすとした。

ライプリム
「結波冷断」

エドワードは左手をかざすと、その手の前にあったエンヴィーの体が凍りついた。

数分後

「やり過ぎるとメイが連れていく時に困るからな。これぐらいにとくか」

エドワードは小瓶を錬成した。

「とりあえずあの小さい奴を引っ張り出すか」

「ひっ!来るな!」

度重なるエドワードの拷問じみた攻撃に怯えエンヴィーは座り込んだまま後退った。

「動くな」

エドワードは微笑みながら左手の手袋を外しエンヴィーの喉に指を這わせた。

「・・・ここか?」

しばらく這わせたエドワードはある一点で指を止めそのまま左手を埋め込んだ。

「ぐっ」

「見つけた」

エドワードが左手を引き抜くとその手にエンヴィーの本体がいた。

「ほらほら、暴れるな」

エドワードは素早くエンヴィーを瓶の中に入れ蓋を閉めた。

「さて、早く追い付かないとな」

エドワードは瓶を懐に仕舞うと歩き始めた。

乱入者

「何の用だ？アード」

先に行つたロイ達を追つてエドワードは地下通路を速足で歩いてい
が急に立ち止まり振り向いた。

「やっぱ誤魔化せねえな」

物陰からアーノルドが姿を現した。

「なんでアイツらの肩を持つんだ？」

「単なる気まぐれだ」

「嘘つけ」

「……」

即座に答えたアーノルドに思わずエドワードは口をつぐんだ。

「まあいい、お前がどんな思惑を持つのがこの際関係ない。ゴタゴ
タに干渉しようとしてる冥王將軍の方はこっちが引き受けてやるか
ら、お前はアイツらの方へ行け」

「一人で大丈夫だ」

「アイツらを助けながら連中の牽制か？ 無茶もいいところだ」

アーノルドは眉間に皺を寄せた。

「誰が牽制すると言った」

「じゃあ無視するのか？ 連中に漁夫の利を取られるぞ」

「牽制じゃなくて始末する」

「難易度上げてどうする！」

エドワードの返事にアーノルドは怒鳴った。

「五月蠅い小蠅は叩くに限る。お前は里の餓鬼共を押さえ込んでお
け、このままだとどさくさに紛れて面倒を起こすぞ」

「……」

アーノルドはそう言うのと去って行った。そしてアーノルドの姿が見
えなくなったのを確認しエドワードに背を向け再び歩き出した。

「それで、お前は何の用だ？ ニック」

エドワードは歩きながらじつと息をひそめていた気配に声をかけた。

「ねえ、女帝^{エンプレス}。一個頂戴？」

「ニック……」

陰から幼い子供の姿をした邪神が現れた。

「そうだなあ、あのちっちゃいのがいい」

「……勝手にしろ」

エドワードはため息と共に答えた。

「やった」

「しかし、何故だ？」

「だって、面白そうじゃん！人無しじゃ存在しえなくせに人間を見下す存在だよ？」

「他種の存在無しに生きられないモノはいない」

「それでも所詮は一番効率が良いだけじゃん、君や僕も他の種族を捕食して生きられる。ただ一番やりやすいのが人間だっただけで」

「……賢者の石は他の種族の魂でも生成出来る」

「でも、必要な血の惨劇は人間無しでは成り立たないね。戦争なんてしたがるのは人間だけだし」

「……」

「ね、正解でしょ？」

ニックはコテンと首を傾けた。

「……ああ」

「んじゃ、口約束とはいえ許可は取ったからね」

そう言うとニックは再び陰へ溶け込み姿を消した。

「……敵ながら同情する」

エドワードは思わず呟きながらも進む足を速めた。

エドワードがしばらく歩いていると前方に見覚えのある後ろ姿が見えた。

「ハボック少尉！」

エドワードは後ろ姿に声をかけた。

「大将！？ どうしてここに？」

声をかけられたハボツクのほうは驚きで肩を震わせたがすぐに平静に戻りエドワードのほうを向いた。

「エンヴィーの相手を引き受けて大佐達を先に進めさせたんだよ、少尉は？」

「あゝちよつと敵のトラップにハマつちまったらしくてな」

ハボツクはきまり悪げに頭を掻いた。

「トラップ？」

「………落とし穴だ」

「うっわゝオーソドックス」

「悪かつたな！」

「くくつ！ 取りあえず一本道だから大佐達に追いつこう」

エドワードはひとしきり笑うとハボツクを促した。

「ああ、話は移動しながらでもできるした」

二人は歩きだした。

「上ではどうなってる？」

「ん？ ああ、ヒューズ中佐を頭にラジオ局に立て籠もってる」

「ラジオ局？」

「ああ、ブラッドレイ大総統が乗ってる列車が事故にあつてな。それで出来た臨時政府が俺らと一緒に行動してる夫人を俺らごと射殺しようとしたんだよ。大佐以外は殺していいって言つて」

「ああ、それを言いふらすためにラジオ局にか」

ハボツクの説明にエドワードは納得の声を上げた。

「すいませんが、道をお尋ねしたい」

現状の報告をしていた二人の前に鎧を着た貴族風の男が現れた。

「……ハボツク少尉、俺が道を開けるから先に行つてて」

「え？」

自身を押し止めてまで立ち止まったエドワードの突然の言葉にハボツクは気の抜けた声を出した。

「ぶつちやけ人造人間ホームクルスよりタチ悪いぜ、アイツ」

「なっ?! 無茶だ」

エドワードの言葉にハボックは慌てて止めに入った。

「大丈夫、むしろ少尉がいた方が戦いにくい」

「……俺は足手まといか?」

「というか無差別広範囲攻撃になるから巻き込みそう」

「……」

「いったい何をするつもりだ、と問おうとするがエドワードの視線に制された。

「俺が合図したらすぐに走って」

「……わかった」

エドワードはハボックを連れながら上手く歩を進めた。

「……今だ! 行つて!」

エドワードはハボックを走らすと素早く手を打ち壁を錬成し男を自分ごと閉じ込めた。

「っ逃がすか!」

男が精神世界アトラスサイドに潜り後を追おうとするが不可視の壁に弾かれた。

「ツメが甘い」

そこには壁に手をつくエドワードの姿があった。そして壁だけではなく床、天井に大量の文字が隙間なく刻まれていた。

「後は」

エドワードは常に持ち歩いている海水の入った水筒のふたを開け地面に転がした。

「ここに何の用だ、冥王將軍」

「ほう……この国でも我の存在を知っている者がいるか」

エドワードの問いに男 冥王將軍は感心した声を出した。

「質問に答える……まあ、どうせこの国の血の匂いにひきつけられたといったところだろうが」

「ふむ、我らの性質にも造詣が深いか」

話しているうちに水筒からは海水が出続け、今では深さ5センチ程になっていた。

「クスクス、私を敵に回した事を後悔するがいい、冥王將軍」
そろそろ頃合いか、とエドワードは相手を挑発した。

「人間一人ごときに何が出来る」

「来い海龍」

エドワードがそう呟くと水中から巨大な龍が現れた。海龍とは海底に住み巨大な力を求め彷徨う魔獣であり、その貪欲さは魔獣の中でも随一である。

「さて冥王將軍、察しの通りここに満ちるは海水。言いたいことはわかるな？」

「貴様セイレーンか？ なぜ人間と共にいた？」

「知る必要はない」

エドワードはにべも無く答えた。

「悪いがこちらも引くわけにはいかない、セイレーン相手なら本気を出して支障はない」

「そうか、残念だ」

全く言葉とは違う表情をしながらエドワードは言った。

「さて始めようか化け物同士殺し合いを、顕現せよ」

エドワードは刀を出し言った。

「いいだろう、格の違いを思い知らせてくれるわ！」

辺りに殺気が吹き荒れた。

エドワードは唄いながら剣をふるう。セイレーンの唄は魔性の歌、相手の感覚を狂わせ集中力を根こそぎに奪っていった。

「小癪なあ！」

冥王將軍は一気にたたみかけようと力を蓄えるもそれを察知した海龍の巨大な顎が迫る。エドワードの唄は海龍の感覚をも狂わせ自身を襲われないようにしていた。

「つく！ こんなところで！」

叫びながら冥王將軍は海龍にのみこまれていった。

「鋼……の」

ロイ達が壁を壊し駆け込んで見たものは巨大な龍の死体と血塗れで肩で息をしているエドワードの姿だった。

「こつちの方が苦労した、なんてとんだお笑い草だな」

エドワードは苦笑しながらロイ達のほうへ向かった。

「大将、アイツは？」

「何とか追っ払った」

エドワードは疲れたといわんばかりに息をついた後錬金術で自身についた血を消した。

「とりあえず、行こうぜ。時間がねえ」

「………そうだな」

エドワードの催促にロイは頷き一行は奥に向かった。

最奥への鍵（前書き）

著者が単行本派なので、これ以降、原作から大幅にずれていきます。

最奥への鍵

「メイ、ほら、今度は落とすなよ」

そう言うとエドワードはエンヴィーの入った瓶をメイの方へ投げた。

「はい」

メイは頷くと瓶を大事に抱えた。

「メイ、もう、お前は帰れ。これ以上は危険だ」
傷の男スカが言った。

「え……でも……」

「とりあえず妙な気配からできるだけ離れるようにすりゃいいだろ？」

エドワードも賛同した。

「……分かりました」

メイは瓶をしつかり抱えるとパタパタと走り去った。

「大丈夫なのか？」

「ああ、メイは練丹術が使えるし、ホムンクルス人造人間の気配もわかるからうまく逃げられるはずだ」

ロイの問いにエドワードは答えた。

「そうか」

コツ、コツ

一行は暗い地下道を進んでいた。

「大佐、ドアがあるぜ、どうする？」

エドワードが指差した壁には黒い鉄のドアがあった。

「……見てみるしかなさそうだな」

「じゃあ、俺が開けるからさ」

エドワードはドアのノブに手をかけた。

「いくよ、せーの！」

エドワードは一気にドアを開けた。

「動くな！」

「おやおや、もうこんな所にギャラリーが来るとは……緊張してしまっうね」

ロイとホークアイを引き連れ中に乗り込んだ。しかし中にいたのは学者然とした眼鏡を掛けた老人だった。

「さあ、始めようか」

「誰だ？」

エドワードは緊張した面持ちで問い掛けた。

「私かね？ キング・ブラッドレイを作った男……ということころかな」

「という事は人造人間の協力者か」

ロイは練成陣の描かれた手袋を構えた。

「おっとつと、やっぱり、そうなるのかい。しょうがないね」

老人が片手を上げると物陰から屈強な男たちが剣を携えロイ達に襲いかかった。

「おまえ達、少し時間を稼ぎなさい」

「新手の人形兵か！」

「いや、人形兵とはあきらかに動きが違う！」

「違うよ、“キング・ブラッドレイ”になれなかった男達だよ」

ロイの言葉を傷^{スカー}の男と老人は否定した。

「生まれてすぐにここに集められ、大総統になるためにあらゆる訓練を耐えぬき生きのびたのに、あの実験で12人目にして“キング・ブラッドレイ”が出来上がってしまったので用無しになった、賢者の石を入れられる事の無かった、余り者だよ」

「な?!」

老人の言葉にエドワードは驚きの声を上げ、ロイはどこからか情報を仕入れていたのか納得した顔になった。

「言っておくがこの者達は60年間ただひたすらに戦闘訓練を積んできている。キング・ブラッドレイほどではないが……強いぞ」

「16号、17号、21号、23号、26号、おいで」

しばらく戦闘が続くが屈強な男たちに決定打を浴びせられずにいた。「なんだ?!」

呼ばれた男たちは忠実に老人の元に向かった。

「いくよ」

老人はエドワード達の気が逸れている間に描いたを発動させた。

「何をした?!」

「このセントラルに大總統府直轄の錬金術研究所がいくつあるか知っているかね?」

「いま、使われているのは市内に四ヶ所……いや、五つ」

何かに気付いたエドワードが目を見開いた。

「五つの……頂点を持つ錬成陣」

「まさか第三研究所のあのカーブした地下通路……研究所を繋ぐ正円を描いていたの?!」

エドワードの言葉にホークアイが叫んだ。

男たちが対価として分解され、エドワードの足元に巨大な眼が現れ、黒い触手が伸びてきた。

「っ戯れるなあ!」

エドワードの気迫に触手は吹き飛ばされ眼はかき消された。

「何?!」

予想外の状況に老人はうろたえた声を出した。

「っ今だ! 大佐!」

「ああ!」

ロイは焰で老人の動揺で動きの乱れた男たちを焼いた。

決戦

「さて、お前たちの頭がどこにいるのか教えて貰おうか」

ロイは老人の襟首を左手でつかみ上げると手袋を付けた右手を目の前に出して言った。

「っこの奥だ！ 頼むから殺さないでくれ！」

老人は部屋の奥にある扉を指した。

「コイツ、どうすんの？」

「このまま放っておく。どうせ一人では何もできん」

エドワードの問いにロイは老人から手を離れた。支えを失った老人はその場に崩れ落ちた。

「とうとうここまで来てしまいましたか」

老人の指した通路を進むと大量のパイプで壁を埋め尽くされた広い空間に出た。

エドワード達の目の前には幼い子供の姿をした人造人間ホームクルス

プライドとアルフォンスの父親に瓜二つな男が経っていた。

「プライドがここにいてことは……テメエ、アルをどうした?!」

アルフォンスが足止めしているはずのプライドがここにいるという事実にエドワードは叫んだ。

「彼なら今頃セントラルについたころだと思っよ？」

プライドは肩を竦めた。

「なんだと？」

「ギンブリーを倒した後僕を轢いて車で走って行ったからね」

「そうか」

とりあえずアルフォンスが無事であることを知ったエドワードは胸をなでおろした。

「なら、アルが来る前にとつと欲塗れの戦いは終わらせちまおうぜ」

「……………ピチャン

ゴォ！」

水滴が落ちた音を合図にロイが巨大な炎を錬成した。

「本気でいくぜ！」

エドワードは右腕を刃に錬成し切り掛かった。

それぞれの攻撃の余波を受け壁にはしるパイプに輝が入り水が溢れ出した。

「大佐！水気いつけるよ！」

エドワードは手を合わせ地面から飛び出させた刺でプライドを貫いた。

「っまだまだです！」

プライドは体を修復するとエドワードに向け影を伸ばした。
パンツパンツ

「俺達を忘れてもらっちゃ困るな」

ハボックが影をナイフで切り裂くとホークアイが本体を銃で撃ち抜いた。

「っ出来れば使いたくなかったんだがな！」

エドワードは苦々しげに呻くと、が地面に手を付いた。するとエドワードの前から地面が崩れた。

「っ来るな！」

崩落に巻き込まれ落ちて行ったプライドを追おうとしてロイ達が駆け出そうとするとエドワードが大声で止めた。

「溶ける所は見たくないだろ？」

エドワードは穴の壁に手を付き振り向かずになんと言った。

「……………何をした？」

「錬金術で足元に空洞を作ってその中にパイプから出た水を貯めた。

それでちょうどプライドだけが上に来た時に地面を崩して落とした」
「でもそれだけじゃ」

「……その後空洞を作る時に壁に刻んだ錬成陣を発動させてる」
「陣の内容は？」

「水の水素イオン濃度を極大にした」

「……成る程、その水は酸になるわけか」

「ちまちま攻撃してもキリが無いからな」

「大将……」

「……さて、後はお前一人だ」

エドワードは戦いを静観していた瓶の中の小人を睨み付けた。

「脆弱な人間に何ができる」

瓶の中の小人は表情を変えず言った。

「その人間に創られたお前はなんだ？」

エドワードは怒りを押し殺した声で言った。

「人間の存在無しに生きられない事が明らかなのは誰だ？」

エドワードは言いながら瓶の中の小人に向かって歩き出した。

「禁忌の錬金術も血の惨劇も人間無しには成り立たない、つまり人

間無しじゃ賢者の石は作れない」

「何が言いたい？」

「別に、見下してる存在無しに生きられないのはどんな気分だろう

など思っただけ」

エドワードは嘲笑を浮かべた。その左目がわずかに紅に染まっていたが金にまぎれ誰も気づいていなかった。

「戯言を」

瓶の中の小人は錬金術で地面に潜ろうとした。

「っさせるか！」

エドワードは地面に手を合わせ床に手をついた。

バチバチッ！

錬成光が床中に広がり床に潜りこもった瓶の中の小人は弾き出された。

「何?!」

「何って簡単な事だぜ? 床の元素構成を変えたんだ」

「なるほど、理解できてないものは分解も再構築も出来ないか」

ロイは納得の声をあげた。

「そーゆー事!」

エドワードはそう言いながら再び錬金術を発動させ瓶の中の小人を
ホムンクルス
金属の板で押し潰した。

「再生するだけの、空間の余裕が、無けりゃしたくても出来ねえ、
だろ。入れモンは俺オ리지ナルの、合金だ。ダイヤより、固えぜ?」

「鋼の、大丈夫か?」

精密な錬金術の瞬間的発動に気力を削られたのがエドワードの息が
上がり始めた。

「ああ。次で決めてやる」

エドワードはそう言うのと剣を錬成した。

「それでどうするつもりだ?」

「前にエンヴィーの賢者の石を使った時に石の中に材料にされたク
セルクルス人達の意識が残ってたのを見た。だからこの剣をアイツ
に刺して俺の意思をそいつらに伝えて中から自壊させる」

エドワードは両手の手袋を外すと剣の柄を右手で持つと左手を刃に
直接添えた。

「っつ今だ!」

ホムンクルス
瓶の中の小人が板を抉じ開け現れた瞬間、エドワードは駆け寄って
剣を刺した。

「滅びろ!」

バチバチツ ダラツ

強い錬成光が巻き起こり、刃に添えられた左手から血が流れた。

「つく!」

エドワードは瓶の中の小人の必死の抵抗に撥ね飛ばされそうになり
ながら必死で剣を握る手に込めた力を込めた。

「鋼の!」

ロイはエドワードの元に駆け寄り手袋を外すと剣の刃に両手を添えた。

「この国は国民全員のモノだ！ これ以上貴様の好きにはさせん！ロイの叫びと共に瓶ホムンクルスの中の小人は砂となり消滅した。

「……ヤったみたいだな」

エドワードはベタリと座り込んだ。

「ああ」

これがアメリクス国を建国から滅亡まで支配していたモノの最後だった。

父子の絆

「兄さん！ 大佐！」

「アル！」

外のゴタゴタを避けるため、地下を通り第五研究所から地上に出たエドワードにアルフォンスが駆け寄って来た。

「大丈夫？ 人造人間ホムンクルスは？」

「倒したぜ」

エドワードはニカリと笑って言った。

「本当?!」

「ああ、お前らの方は大丈夫だったみたいだな」

エドワードとアルフォンスが笑顔で話すなか傷スカーの男はエドワード達に背を向け歩き出した。

「スカー、何処へ行く？」

それに気付いたロイが問い掛けた。

「同胞の元へ」

傷スカーの男は一度立ち止まるがそう言って再び歩き始めた。

「止めないのでですか？」

ホークアイが訊ねた。

「ああ、今引き止めたところで逮捕できるとは思えん」

ロイはそう答えるとエドワード達を見た。

「アルフォンス！」

喜びを分かち合うエドワードとアルフォンスに一人の男が声をかけた。

「父さん！」

「.....」

アルフォンスは男の元に駆け寄ると抱きついた。

「うお！ 苦しいよ、アルフォンス」

抱きつかれた男

ホーエンハイムはよろめきながらもア

ルフォンスを受け止めた。

「傷スカーの男は？」

エドワードははしゃぐ父子を横目にロイの元に歩いて来た。

「立ち去ったよ。それよりも君は父親と話さなくても良いのか？」

「折角の父子団欒に水を注したくないからな」

エドワードは目を細めながらアルフォンス達を見た。

「君も加わつるべきだと思うが……」

「まあ、色々、な」

エドワードは肩を竦めた。

「エドワード、アルフォンス」

ホーエンハイムはエドワードとアルフォンスの顔を見た。

「俺の中にある賢者の石で体を取り戻しなさい」

「え？」

「んな事したら何が起こるかわかんねえぞ?!」

エドワードは叫んだ。

「鋼の」

なんだかんだ言いながら父親を大事にしているようだな、と取り乱したエドワードを見ながらロイは思った。

「すでに一賢者の石の元になった魂達《皆》には了解をとつてある。俺の体から賢者の石が無くなるだけだ」

「……」

「人造人間ホームクルス達が消えた混乱が収まらない内に済ませた方が良いだろう？」

考え込むエドワードにホーエンハイムは言った。

「大佐達とアームストロング少将、グラマン少将の手腕から見て混乱は精々一週間……細かい実験を出来るだけ省略してもギリギリだな」

エドワードは唇に指を這わせた。

「今すぐするぞ」

「へ？」

ホーエンハイムの言葉にエドワードは呆気にとられた顔をした。

「ちょうど人気のない研究所だ」

「っ突然すぎる！」

エドワードはキレたように叫んだ。

「いや、彼の言う事も一理ある」

「大佐！」

ロイがエドワードを宥めた。

「混乱が大きい内に済ませた方が軍に感付かれる確率も減る」

「・・・分かった」

エドワードは渋々納得した。

「エドワードはこっちに、貴方達は離れてくれ」

ホーエンハイムはロイ達に言うつと深呼吸をした。

「じゃあ、いくぞ」

ホーエンハイムがエドワードとアルフォンスに触れると辺りに強い光が溢れた。

エドワードが目を開くと目の前には巨大な門があった。

「今回は早い再会だな」

「ああ」

エドワードは門の前に立つ白い人影を見た。

「腕と足を返して貰おうか」

「とつとと持ってけ。対価は右腕だけだ」

番人は腕と足を出した。

「何？」

「弟は偽りを戻してきたからな」

「っ！」

「ほら、早く帰らないと隠し事がバレるぞ」

「っ次に会った時にはそれ相応の礼はさせてもらうっ！」

エドワードは腕と足を掴むと急いで戻って行った。

「っアルフォンス！」

門から戻ったエドワードは辺りを見渡し裸で横たわるアルフォンスに左足を引き摺りながら駆け寄った。

「兄さん、ごめん、ごめんなさい」

痩せ細った体で涙を流しながら謝り続けるアルフォンスの顔を両手で挟むと目を覗き込んだ。

「あれは気付けなかった俺の咎だ。忘れろ」

蒼く変わったエドワードの瞳にアルフォンスは一瞬目を見開いたがすぐに気絶した。

パチンッ！

エドワードはコートを脱いで錬金術で服に変えるとアルフォンスに着せた。

「大佐！ アルを病院に！ このままじゃ衰弱死する！」

「分かった」

ロイは先程のやり取りの意味を聞こうとしたが痩せ細ったアルフォンスの姿に優先順位を変えた。

「私が背負おう。君も腕と足が回復してないだろう」

ロイはアルフォンスを背負うと近くの診療所に向かって走り出した。

医者の努力のいかにもありアルフォンスとエドワードは一月もすると日常生活を行うのに支障は無いほど回復した。

新たな鎖

ホームクルス
人造人間が滅びて一カ月ほど経った頃、エドワードとアルフォンスそしてマスターグ組の軍人たちはロイの家に集まっていた。

「では、エドとアルの宿願達成を祝って乾杯！」

「……乾杯！」

ヒューズの音頭でエドワード達はグラスを掲げた。

「いや、よかったな！ 後遺症もないんだろ？」

ハボックはアルフォンスの肩に手をかけた。

「はい。まあ、リハビリに時間がかかっちゃって祝ってもらうのが一カ月してからになっちゃいましたけど」
アルフォンスは苦笑した。

「今日は無礼講だ！ ムチヤクチャ飲むぞ！」

「ただ自分達が飲みたいだけかよ」

ブレダの叫びにエドワードは白い目を向けた。

「そういうなって、ほら飲めよ」

ハボックがエドワードの持っていたコップにビールを注いだ。

「俺、未成年なんだけど」

エドワードはジト目でハボックを見た。

「いいじゃねえか、一杯くらい飲んだって成長に支障はねえだろ」

「誰が飲み込めそうなほどチビだ！」

エドワードは叫んだ。

「諦める、鋼の。酔っ払いに何を言っても無駄だ」

ロイがツマミをのせた盆を持ってキッチンから出てきた。

「もう酔ってんのかよ！」

始まってまもないのにも拘らず酔っ払っている男衆にエドワードは顔を歪めた。

「弱えな」

「中尉と私を除いた全員が下戸だからな」

「そんなんでよく軍人が務まるな」

エドワードは呆れたように絡んでくるハボックとブレダをひきはがした。

「任務が関わってくると酔わないから平気だ」

便利な体質だ、とロイは肩を竦めた。

「確かに」

エドワードは喉を鳴らして笑うと持ってきた荷物から一つの酒瓶を出した。

「なんだね？ それは」

「宿のおばちゃんが持たせてくれたんだ。“困った時にはこれを飲ませて沈める”って言って」

「……スピリタスじゃないか！ 下手したら急性アルコール中毒で死んでしまうぞ！」

ロイはエドワードが手にした瓶を見て思わず叫んだ。

「へ？ そんなに強い酒なのか？」

エドワードは首をかしげながらしげしげと見た。

「96度もあるんだぞ」

ロイはエドワードの手から瓶を取った。

「これはいつかアームストロング大将に回そう」

人造人間の事件でロイ達は階級を二つずつ上げていた。
ホムンクルス

「……了解」

実はその宿を訪れるたびにもらっており旅先で原酒で飲んでいたとは言えずエドワードは素直に瓶を渡した。

宴が佳境に入ると参加していた者の大半が酔っ払って騒いでいた。

「……」

エドワードは左目に鈍い痛みを感じそつとテラスへ出た。

「少将、ジュースもらったぜ」

「酔ったかい？」

冷蔵庫からジュースを取りだしていたエドワードに先にテラスにい

たロイは言った。

「別に、ただアレに加わるのはなあ？」

エドワードはリビングの乱痴気騒ぎに苦笑を浮かべた。

「……俺、軍人になる事にした」

策に凭れながらそれぞれグラスの飲み物を飲んでいるとエドワードが突然言った。

「なぜだ？ 軍人は嫌いだろう」

「まあな」

エドワードは肩を竦めた。

「俺だけ抜けるなんて立つ瀬ないしな」

「そんな事気にする必要はないだろう」

「というか、今更抜けれる筈ないしな」

「え？」

エドワードの言葉にロイは振り向いた。

「上にそういうニュアンスの言葉を言われた」

「……やはりか」

ロイは眉間に皺を寄せ、グラスを持つ手に力を込めた。

「仕方ないんじゃない？ 俺優秀だし」

エドワードはニシシと笑いながら言った。

「多分引き離されそうだな」

「だろうな」

「ま、アンタの足引つ張らない程度に適当にやるさ」

エドワードは肩を竦めるとグラスに残っていたジュースを飲み干し

部屋に戻った。

「……少なくとも足を引つ張りたくないと思えるぐらいには慕われているのかな？」

ロイは先程のエドワードの言葉に苦笑を洩らすと既に中身を飲みきったグラスを持ち、散らかりまくっているであろうリビングの片付けをするために部屋に戻った。

紛れ潜むもの

宴会から数日後、予想通りエドワードに正式に軍に入るよう命令が来た。その日、届けられた軍服を着たエドワードはロイの執務室にいた。

「『鋼の錬金術師をアメトリス国軍中佐に任命する』だそうだよ」
ロイはそう言いながら手に持っていた任命書をエドワードに渡した。
「せめて直属な部下ぐらいは自分で選ばせてくれるよな？」

エドワードは任命書を見ながら訊ねた。

「アテがあるのか？」

「何人か目星は付けてる」

怪訝そうな顔をしたロイにエドワードはそっけなく答えた。

「それにしても、いきなりの中佐スタートか」

「たったと潰したいってのが丸分かりだな」

エドワードは任命書をしまいながら肩を竦めた。

「一応、人造人間ホームクルスを倒した英雄の一人だからな」

「その足元に何があるか知らない癖に大層な事をする」

ロイの言葉にエドワードは溜息をついた。

任命書を受け取った数日後、上から与えられたエドワードの執務室に若い軍人が数名いた。

「はじめまして、私はエドワード・エルリック、地位は中佐だ」

「自分はシェイド・マーカー少尉です」

「サヤカ・リードマン准尉です」

「ルーク・フォン曹長です」

「アシユレイ・フォン、地位は曹長です」

「サトリ、ペーパーマスター、そして創造と消滅を司る聖霊の双子」

「……？」「……」

エドワードの言葉に軍人たちは眼を見開いた。

「こんなナリでも一応私はセイレーンだからな、多少麒麟の血が流れてはいるが」

「……」

肩を竦めるエドワードに軍人たちは複雑そうな顔をした。

「私は此処をそういうモノ達の受け入れにしたい」

「初めは俺達、ですか」

アシュレイが訊ねた。

「そうだ、出来れば一年以内に部下の入れ換えを終わらせる、声を掛けておけ」

「……Yes, ma'am」

シエイド達は一斉に敬礼した。

「sirにしてくれ、戸籍上は男だ」

「え?」

エドワードの前に並んだ軍人たちはそろって怪訝な顔をした。

「色々あつてな」

エドワードは苦笑した。

「とりあえず私が退役する前に最低でも一人は佐官になって貰う」

「え?」

「佐官になればある程度部下を選べる。そうすれば余程の事が無い限りは守れる」

エドワードは言った。

「私の寿命はおそらくあと五年。並大抵のことではないがやってもらうぞ」

「……Yes, sir!!」

シエイド達は一斉に敬礼した。

その夜、軍に支給された一軒家に銀色の毛並みをした犬が現れ、窓を叩いた。

「久しぶりだね」

「……シルバー」

エドワードは狗の姿に軽く目を見張ったが窓を開け、中に入るよう無言で促した。

「まさか君が軍人をやってるなんて思わなかったよ」

家の中に入りながら犬　　シルバーは言った。

「……ちよつと目的があつてな、利用させてもらつてる」

「……目的？」

「結界が壊れたのは知ってるな？」

「ああ」

シルバーはそう言いながら人の姿を取り、エドワードは飲み物を入れたコップを差し出した。

「隣国でエーウェ教が広まっている」

「っ?!」

「この国はまだ安定していない」

「……あの時と同じだな。気づかれないうちに国一つ掌握して、情勢が不安定な国に戦争を仕掛ける」

シルバーはポツリとつぶやいた。

「だが、今回は気付いた。今、里を使って警告を広めている、手を貸してくれ」

「ああ、カオルが傷つくような事はオレも避けたい」

自分の飼い主の名をあげシルバーは頷いた。

「助かる」

エドワードは礼を言うと二人は互いに近情を報告し合った。

「また、何か分かったら連絡するよ」

シルバーはそう言うと犬の姿を取り入ってきた窓に足をかけた。

「ああ、こつちも連絡する」

「じゃあ……そうだ、忘れるところだった。エド、一つ頼みがある」

窓から出ようとしたシルバーは動きを止め、見送るために近くにいたエドワードのほうを向いた。

「なんだ？ 珍しいな」

「同胞の中に人間に育てられて自分を人間だと思いこもつとしてい
る奴がいてな」

シルバーは器用に苦笑を浮かべた。

「彼を育てたのが軍の高官でな。自分が後をつぐんだって軍に入っ
ているんだ」

「要するにそいつを部下にしてやればいいんだな」

「話が早くて助かる」

「ソイツの名前は？」

「ドギー・ミユート、地位は確か……准尉だったはずだ」

「わかった」

エドワードは頷いた。

「恩に着るよ。じゃあ、俺はそろそろ帰らないとカオルが心配する
から」

そう言ってシルバーは帰って行った。

「後で、ソイツについて調べないとな」

エドワードは呟くと自室に戻った。

海の蒼へシー・ブルー」

エドワードが軍に入って数カ月後。

「早速だがこれを見てくれ」

エドワードはビニール袋に入ったネックレスを見せた。

「これは・・・海の蒼シーブルーですか？」

袋を手に取ったシェイドが訊ねた。

「ああ、どうも向こうから密輸されたらしい」

「ですが、何を対価に？」

「重火器や小型の機械類だ」

「あつちじゃ魔術で大概の事は出来ますからね。機械とかはあまり発達してないんですね」

「ああ。商品は定期的に行われる闇オークションで扱われているらしい。そのオークションは招待状が無ければ入れない、しかも上層部の連中が居る」

面倒事ばかり起こす、とエドワードがため息をついた。

「こつこつというって給料泥棒っていうんだよね？」

「ああ」

「まったくです」

「とにかく！オークションにコネのある人物と接触して手に入れましょう」

ルークとアシユレイの会話で話がそれそうになったのをシェイドが引きもどした。

「フォンは二人で商品の流れを追ってくれ。マークはオークションにかかわっているらしい上層部の連中を探れ。リードマンは情報工事を、誰にも感づかれないな」

「Yes, Sir!」

一同は敬礼した。

調査は初めて数日後

「中佐、招待状の入手方法が分かりました。あと、これは現在分かっている関係者のリストです」

シエイドは小さな紙の束をエドワードの机の上に乗せた。

「招待状の入手方法は？」

エドワードは紙を見ながらシエイドに訊ねた。

「どうやら前もって出品される品物の情報を交換する場あるらしく、そこで参加者から推薦状をもらうみたいです。自称知識人の集まりですから招待状は必要ありません」

「いつだ？」

「毎月第三土曜日にセントラルにあるバーの地下です」

「なら………。困か……」

エドワードは考え込むように手をあごに持ってきた。

「中佐！！ 中佐が変装しましょう！」

話を聞いていたリードマンが意気込んで言った。

「は？」

「調査だつて出席する軍人の方々気付かれずにしたいんでしょう？」

「あ、ああ」

「なら中佐が女の人として出席すれば良いんですよ！！ 中佐、なれるでしょう！ 私達も手伝いますから」

「………分かった」

リードマンの気迫に負けてエドワードは折れた。

潜入任務当日

「うわっ！完全に別人ですね！」

変装したエドワードを見てリードマンが感嘆の声をあげた。

「そうか？ 体型と目の色を変えただけだが？」

エドワードは自分の姿を見た。

「はい、これなら中佐だとは気付かれないでしょう」

「私が若い富豪の寡婦、マーカーがその執事。フォンは二人で出

入り口の見張りを。リードマンは無線で中継を。絶対に知られるな。そのためこの人数だ」

「……Yes, Sir!!!!」

一同はそろって敬礼した。

エドワードがバーの地下に入るとさっそく小太りの男が入ってきた。

「ここに来るのは初めてですか？」

「ええ、沢山の人がいるのでどうしようかと困っていて」

「なら、我々のグループに来れば良い。歓迎しよう！特技はなんだい？」

「錬金術と混沌言語を少々、後は」

「ほう、それは凄い」

「いえ、どちらも簡単な事しか出来ませんから」

「それでも十分だ！レディ、お名前は？」

「エルですわ。後、レディではなくマダムと呼んでください」

エドワードは左手を上げた。

「おや、もう伴侶をお持ちで」

持ちあげた手の薬指には黒い指輪が輝いていた。

「随分前に亡くなりましたが、一緒に私の心まで持って行ったので」

「一途な方だ」

「残ったのは強欲な器だけですの」

エドワードは口の端を吊り上げた。

「ではコレにも興味はおありですか？」

男は懐から指輪を出した。

「これは……」

エドワードは指輪についた宝石を見て、驚いたふりをした。

「幻の宝石、海の蒼ですよ」

「綺麗……一体どうされたの？」

「知り合いに貰ったんだよ」

「会って見たいわ」

エドワードは媚る様に体を寄せた。

「ねえ、どんな方なの？」

「たいしたことのない奴さ」

「お名前は？」

エドワードは上目遣いで男を見た。

「確か、グロス・ハマオンと言ってたな・・・色黒の大男さ」

「ふうん、恐そうな方ね」

「ああ！目付きが気味の悪かったよ、まるで爬虫類みたいだった」

「爬虫類？」

「そう、奴の黄色い目がまるで飛び出している様にみえたよ」

男はふざけて体を震わせた。

「ふうん」

「今度のオークションにもソイツが何か出品するらしいよ」

「オークション？」

「この宝石みたいに珍しい物が沢山出るから見に来てご覧、これが招待状だよ」

「ありがとうございます」

「奥様、お迎えに上がりました」

そこにシエイドがタキシードを着て現れた。

「あら、もうそんな時間？」

「はい、これ以上居ては後の予定に差し支えます」

「ありがとうございます、フットマン」

「夢の時間はおしまいたいだね」

「ええ」

「また会えるかな？」

「それは運命ザ・フェイトの女神次第ですわ、ではごきげんよう」

エドワードはオスカーに連れられ店を出た。

「収穫はありましたか？」

「ええ、後でゆっくり話してあげる」

二人は連れ立ってホテルの中に入った。

「・・・違法な代物が大量に取引されているらしい」

「それで、どうしますかあ？」

リードマンが尋ねた。

「徴発するにも頭を逃せば黽ごつこだからな。一網打尽にするしかない」

「ですが、どうやって？」

「・・・これは暗号だ」

男に渡された紙をエドワードは見せた。

「単なる詩に見えますが」

「暗号としての程度は低い。単なる資格審査のようなものだ。明日までに解いて来る。リードマンとフォンはバイヤーを探ってくれ。」

グロス・ハマオンという色黒の大男だ

「Yes, Sir!」

「私はどうするんですかあ？」

「リードマンは今までに分かっている買い手の見張りを頼む」

「Yes, Sir!」

そして、翌日。宣言通りにエドワードは暗号を解いて執務室に現れた。

「出来ましたか？」

「ああ、次のオークションは今日からちょうど二週間後だ」

「・・・間に合いますか？」

「間に合わせる」

エドワードは言い切った。

「これからしばらくかなり忙しくなるぞ、覚悟しておけ」

「Yes, Sir!」

闇オークションの日時が分かって一週間後、エドワードはマークに問い掛けた。

「バイヤーは分かったか？」

「はい」

「……糸をつけるぞ、買い手も捕まえる。リードマン、式で見張ってくれ」

「はあい」

リードマンは間延びした返事をする、すぐに式を作り始めた。

「無茶は厳禁ですよ」

「善処する」

マーカーが釘を刺すとエドワードは頷いた。

そして、当日。オークションが始まる一時間前にエドワード達は会場近くのホテルで最終打ち合わせをしていた。

「リードマンの班は捕らえられている者達の保護とブローカーの縛を」

「はあい」

「ルークの班は負傷者の治療を、恐らく拷問されている者もいる。人型をしたものは違法キメラだと説明しろ」

「はい」

「マーカーの班は混乱に乗じて逃げようとする関係者を出入口で捕まえてくれ。アシュレイの班と私が乗り込む」

「ああ」

次々とエドワードは指示を出していった。

打ち合わせから二時間後、オークションは佳境に入り、舞台ではアメリクスでは禁止されている薬物が競売に賭けられていた。

「……今だ、行くぞ」

「はい」

「動くな！」

エドワードとアシュレイは同時に会場に入り込むと各々いつでも戦える姿勢をとった。そして、エドワードは手を打ち鳴らし他の部下達にホールの出入口を塞いだ。

「さて、舞台上の上に居るのは何か、納得のいく説明をして貰おうか？」

警戒を解かずエドワードはしっかりとした足取りで舞台に近付いた。

「・・・違法薬物だな」

エドワードは舞台上の台に置かれた粉を見て言った。

「違法薬物売買の罪で現行犯逮捕させてもらう」

エドワードのその言葉に出入口から数十人の軍人が入り、顧客や舞台裏にいて、リードマン達に取り押さえられたブローカー達を連行して行った。

前もって打ち合わせしていたように、セイレーンなどの異種族は人を使った違法なカメラの一種として説明された。

最終的に逮捕者は百名近くに上り、その大半が上流階級にいる者達だったため大きなニュースとなり、軍人としてのエドワードを一躍有名にした。

新たな出会い

昼休み、気分転換も兼ねて散歩をしていたエドワードは建物の裏でうずくまる軍服の青年に声をかけた。

「ワーウルフだな」

「っ！」

青年はビクツと体を震わせ、顔を上げてエドワードの顔を見た。

「ウチの部署にくるか？種類は違えど似たような連中が多いぞ」

「いいんですか？」

「ああ、ウチはデスクワーク派が多くてな、戦力が欲しい」

「異動届け出します、エルリック中佐」

「楽しみにしている、ドギー・ミュート准尉」

エドワードは青年に笑い掛けるとその場を立ち去った。

新しい部下を勧誘した数日後、久方ぶりの休日になりエドワードは散歩をしている途中で古い教会を見つけた。

「ほう……」

教会に入ったエドワードはステンドグラスを見て感嘆の息をついた。
「見事だな」

エドワードは辺りを見渡し人が居ないことを確認して高らかに唄いだした。

パチパチパチパチ

一曲唄い終わり、エドワードが軽く息をついたその時、背後から拍手が聞こえてきた。

「何という歌ですか？」

「『久遠の祈り』というんです……すみません、下手な歌を」

「とんでもない！！ 凄いです！」

「どちら様ですか？」

「すみません、余りに見事なステンドグラスでしたので。この教会の方ですか？」

「いえ、僕はアルバイトのライブです」

「アルバイト、ですか？」

「はい、この教会では子供達に無料で勉強を教えているんです。ライブは領いた。」

「へえ……見学しても良いですか？」

「え？」

「子供、好きなんです」

「そうですね、なら御自由にどうぞ。授業は毎日二時から五時までやっています」

二人がしばらく話していると子供達がやって来た。

「今日はえーっと」

「エド、です。名乗るのを忘れてました」

エドワードは苦笑しながら言った。

「エド先生がお手伝いしてくれる」

「よろしく」

「はい」

「そんなだから売れないんだろ？先生」

生徒の一人が揶揄するように言った。

「こら！子供がそんな事言わなくてもいい！」

「売れない？」

エドワードは首を傾げた。

「先生は画家なんだよ」

「へえ」

「エド先生って女の人だよ」

「違うよ、男だよ」

「さあ、どっちだろうな？」

エドワードはイタズラっぽく笑った。

「はいはい、エド先生に話をするのは後にして、今日は算数の授業だよ」

ライブは手をパンパンと打ち鳴らした。

「……はい」「」

子供達は元気良く返事すると席につき、勉強を始めた。

「エド先生は左から、僕は右から子供達の様子を見ていきましょう。悩んでいれば少しだけヒントをあげてください」

「わかりました」

エドワードは頷くと子供の様子を見始めた。

「ほら、こつちとこつちの式が似てるだろ？ ならどうしたらいいと思う？」

それからしばらくエドワードは席の間を歩きながら、動きが止まっている子供に勉強を教えていた。

「今日はここまでにしよう」

時計を見たライブが子供達に言った。

「やった！」

子供達は喜びながら勉強道具を片付け始めた。

「ねえ、エド先生。明日も来るの？」

片付けを終わらした子供の一人がエドワードに問い掛けた。

「悪いな、明日は仕事があるんだ」

エドワードは苦笑しながら子供の頭を撫でた。

「じゃあ、次はいつになるの？」

「いつかな？ なんせ忙しい仕事だからな」

エドワードは考え込んだ。

「何のお仕事をなさっているんですか？」

「頑張つて月に一度は来れるようにしよう」

ライブが尋ねるのを聞こえない振りをしてエドワードは言った。

「えー」

子供達は不満そうな顔をした。

「私も生活があるからな」

エドワードは曖昧な笑みを浮かべた。

「ほら、早く帰らないとお母さん達が心配するぞ」

ライブがエドワードに群がる子供達に言った。

「じゃあね、ライブ先生、エド先生」

「バイバイ！」

それに促され子供達はバタバタと帰っていった。

「すみません、私もこれで」

エドワードは時計を見て言った。

「そうですね。また来てください」

ライブはそう言って頭を下げた。

「はい」

エドワードは笑って帰っていった。

罪の在り処

「マーカー、何人だ？」

エドワードは人気のない倉庫の裏でマーカーに訊ねた。

「声」は七人です」

「場所は」

「部屋の真ん中に二人、これは人質ですね。後は出入り口の側に二人、左右についてますね」

「後の三人は？」

「部屋の隅に二人、後は上に居ます」

「上？・・・ここか？」

エドワードは懐から出した図面を指した。

「はい」

倉庫には室内にテラスのようなものがありそこから下一面が見下ろせていた。

「・・・アシュレイ、ドギーは上から、ルイ、リードマン、私は下から、マーカーはここで奴らの動向を、いいな」

「イクジストYes, sir」

「顕現せよ」

エドワードが呟くと身の丈近くまである刀が現れた。

「行くぞ、各自持ち場につけ」

「イクジストはい！！」

全員は小声ながらしっかりと返事をし持ち場についた。

数分後

「制圧完了」

「犯人はどうします？」

「私がしよう」

エドワードは手を合わせると近くの手摺りを使って縛り上げた。

「アシュレイ、連れていけ」

「はい」

エドワードの指示によりテロリストたちは軍に連行された。

エドワードが軍部に戻るとロイが声をかけた。

「大活躍だったそうじゃないか」

「こんなん旅をしたところからしょっちゅうだったじゃねえか」

「確かにね」

「だろ？」

エドワードは肩を竦めた。

エドワードが軍人になって一年程たったある日、ロイの元にリゼンブルで暮らしていたアルフォンスからの電話がかかった。

『少将、お願いがあるんです』

「何だい？」

『僕、国家錬金術師になります。後見人になって貰えませんか？』

「っ?!……本気かい？」

『はい』

ロイは息をのみ訊ねると電話の向こうでアルフォンスがうなずく音がした。

「理由は？」

『僕の罪は僕が償うべきですから』

「一体どういう意味だい？」

『それはそっちに行ったら話します』

「……いいだろう。来月の15日にこちらに来なさい。詳しい話はそこで聞こう」

『ありがとうございます。……この話は兄さんには黙ってても
らえませんか？ きっと反対する』

「……わかった。だがこちらに来る事だけは知らせておきなさい」

『はい』

その後二人はしばらく近状報告をし合った後電話を切った。

そして約束の日、エドワードはロイの執務室にいた。

「兄さん、僕も国家錬金術師になる」

「何考えてんだ?! 師匠に言い付けるぞ!」

突然の発言にエドワードはアルフォンスの肩を掴むと睨み付けた。

「お前には医者になるって夢があるだろう?」

エドワードが穏やかに言った次の瞬間アルフォンスがエドワードを放り投げた。

「同じ手は食わないよ」

「アル?!」

いきなりの行動に周りが慌てて声を上げた。

「ある意味盲点だよ。おおざっぱな兄さんが暗示なんて繊細な事出来るなんて」

「……なんの事だよ」

「僕の記憶弄ったんでしょ? あの時錬成したのは僕と……レイ
ン・オスカーって人だったっけ」

「っ?!」

アルフォンスの言葉にエドワードを含めた全員が息をのんだ。

「右腕は僕の魂、左足は嘘の記憶の対価でしょ?」

「……」

「沈黙は肯定ととるよ」

「……知ってどうするんだ?」

エドワードは声を絞り出すようにアルフォンスに訊ねた。

「僕も軍に入るよ、もともとは僕のせいなんだし」

「止めるっ! あれは気付けなかった俺の責だ!」

アル意味予想していた言葉にエドワードは叫んだ。

「実行したのは僕だよ」

「違う！ あの男の目的を見誤ったせいであらう！」

エドワードは目を見開くと口をつぐんだ。

「目的って何？」

「……知らなくて良い、もう全部終わったんだから」

エドワードは首を振った。

「アル、俺の事を思うなら頼むから軍に関わるうとしないでくれ」

「兄さん……」

「中佐、よかった。休憩中すいません、例の件について報告があります」

「分かった……悪い、俺行くな」

マーカーがノックの後執務室に入って来て言うとエドワードはそれを追って部屋を出た。

「どういう事が説明してくれるかい？」

兄弟の口論に呆然としていたロイが声をかけた。

「聞いた通りです」

「聞いた通りって」

「では鋼のは」

「僕を助けただけで何もしてません」

「……」

「そんな……」

ロイ達は信じられないといった表情をした。

「本来なら僕が軍に入るべきだったんです」

「……」

アルフォンスの言葉に辺りは沈黙に満ちた。

数日後の昼休み、エドワードは近くに生えていた木の根元に座り込んでいた。

「つつ、上から触って脈が分かるのは流石に……」

エドワードは左目を押さえながら苦笑した。

「ある意味予想通り、だな」

エドワードは左目を押さえたまま右手だけで懐から出した薬瓶の蓋を開けた。

「なんの薬だい？」

頭上からかけられた声にエドワードは右目を見開き振り仰いだ。

「少将」

そこにはアルフォンスと共にあって以来忙しいと言って避けていたロイの姿があった。

「やあ」

ロイの顔は笑っているが目は冷たい光を宿していた。

「・・・単なる栄養剤だ」

「栄養剤？」

「あんだだけ食べてるのに太らないなんて羨ましい」ってよく言われてるみたいだけどさ、どうも俺は元々栄養摂取に問題があるみたいだから」

エドワードは小さく笑って肩を竦めた。

「その薬で補ってるって？じゃあその押さえたままの左目はなんだ？」

「単なるめばちこだ。一週間もしない内に治る。昔もあつたしな」

「・・・鋼の」

「んで・・・アルにどこまで聞いた？」

「君がアレに関わっていないとだけ」

「って全部じゃん」

エドワードはおどけたよう言った。

「違うだろう」

ロイは冷たい笑みを崩さないまま疑問形ながら断言した。

「は？」

エドワードは口を開けたままロイのほうを見た。

「背後に軍がいた、違うかい？」

「なんでそう思うんだよ」

ロイの言葉にエドワードは眉間に皺を寄せた。

「レイン・オスカーは国家錬金術師だった。その彼がなんの理由も無く君達に禁忌を持ち掛けるかい？」

「こつ見えてもあの辺りじゃ有名だったんだぜ？ 錬金術師のエルリック兄弟って。それを聞いて目を付けたんじゃね、助手にっつて」

「彼はセントラルを拠点にしていたんだよ」

「たまたま通り掛かったって可能性だつてあるはずだけど？」

「しぶといね、ならこつ言おうか？ 資格剥奪が確実だろうと言われていた学者畑の国家錬金術師がいきなりリゼンブル行きの手ケツトを買ったなんて、軍令以外に理由があるかい？」

「さあ、俺はたまたま旅行中に俺達の事を耳にしたつて聞いたからな」

エドワードは肩を竦めた。

「鋼の」

「だつて俺はそう言うしかないし」

エドワードはそう言いながら立ち上がった。

「それにもしあなたの言った事が真実だったとして、何があんの？」

「別に・・・ただ真実が知りたいだけさ」

「ふうん、真実ねえ」

エドワードは目を細めた。

「あなたが今知ってるのが真実だよ。じゃ、俺は仕事があるんで。」

少将がここにいる事はホークアイ准佐に伝えとくから」

そう言つてエドワードは建物の中に入って行つた。

「・・・もう少し探るか」

ロイはそう言つて木から下りるとホークアイに見つかる前にその場を立ち去つた。

立ち位置 前編

「中佐、誰からの手紙ですか？」

「ドラクマの知人だ」

マーカーが書類を持って来た時、エドワードは執務室の机に座りながら手紙を見ていた。

「っ少尉、根回しを急ぐぞ」

エドワードは手紙から顔を上げ言った。

「何かありましたか？」

「ドラクマは完全にとられた」

「……それは……」

エドワードの言葉にマーカー達は言葉を濁した

「事実だ。向こうの準備だ整うのに長くて約半年だな」

「半年……」

エドワードの言葉にマーカーは顔をしかめた。

「‘里’には私から連絡を入れる。少尉は選別を急いでくれ、使う札は問わない」

「Yes, sir」

マーカーは敬礼し部屋を出た。

「どうか……間に合ってくれ」

エドワードは肘を机に突くと祈るように手を組み目を閉じた。

翌日、エドワードはマーカーたちを執務室に呼び寄せた。

「シンは国柄から言ってまだ異端に寛容だが、この国がどうかは分からない。いざとなれば……」

「その時は我々も」

頃と場を濁すエドワードにマーカー達はわずかに前に踏み出した。

「駄目だ」

「中佐！」

「国墮としての汚名は私一人で十分だ」

「私も老いた、古木の役目は新たな芽の糧になる事さ」

「中佐、そんな事言わないで下さい」

「まさか私が置いて逝く側になろうとはな」

エドワードは可笑しそうに喉を鳴らした。

「中佐」

「私の体はあと五年程しかもたん。それまでに連中を潰すぞ、いいな」

「Yes, sir!」

その夜、エドワードは自宅で酒を飲んでいるとポツリとつぶやいた。

「……シルバー……」

「どうかしたのか？」

窓から銀色の毛並みをした犬が入ってきた

「私は間違っていると思うか？」

「……」

エドワードの言葉にシルバーは口をつぐんだ。

「今でも、時々考える『他にも方法が有ったんじゃないか』と」

「……オレはああするしかなかったと思うぞ」

しばらく黙った後シルバーは口を開いた。

「あの国はどちらにせよいずれは滅びていた、君が手を下したか否かの違いだけだ」

「……」

「君は後悔しているのか」

「……いや、同じ状況になればまた同じ事をするだろうな、私は」

エドワードは目を伏せ自嘲の嗤みを浮かべた。

「……そうか」

エドワードのその言葉にシルバーは目を細めた。

「オレはお前よりはるかに若いがどうしようもない事とそうでないことの区別ぐらいいはつくつもりだ。俺は明らかにどうしようもない事だった」

エドワードはシルバーの言葉に苦笑した。

「悪かったな、こんな話をして。今日は呑もう」

「付き合おうよ」

二人は日付が変わるまで飲み明かした。

一月後

「事件の概要は頭に入ったか？」

エドワードは十数枚からなる書類の束を覗む部下に言った。

「……はい」「……はいですう」

マーカー達は頷いた。

「今回はマスタング少将、アームストロング大将達との合同捜査になる」

「合同捜査ですか?!」

「……」「……」「……」

ドギーは出世頭として有名なロイとオリヴィエとの合同捜査の知らせに目を輝かせ、他の者は困ったように互いに顔を見合わせた。

「そんなに暗くなるな。大丈夫だと保証出来る訳じゃないが、彼等に隠し通せれば他も大丈夫だろう」

「随分高く買ってますね」

「単なる事実だ」

アシユレイの言葉にエドワードは肩を竦めた。

「それにしても……邪魔者を一掃したいって魂胆が丸見えだよな」

「だね」

アシユレイがぼやくとルークも頷いた。

「文句を言っても仕方がない。一時間後にマスタング少将の所に行くぞ。準備しておけ」

「Yes, Sir」

マーカー達は敬礼をして準備に取り掛かった。

そして一時間後、エドワード達は軍部の会議室の前に来ていた。

「久しぶりだね」

「・・・ああ、というかアンタのとばっちりだろ、これは」

扉の前で笑って声をかけるロイにエドワードはげんなりした声を出した。

「そう言ってくれるな」

「・・・はあ、出来るだけ早く終わらせようぜ」

「そうだね。じゃあ入ろう」

エドワード達は会議室に入って行った。そこには既にオリヴィエや彼女の部下がそろっていた。

「合同調査を命じられたエドワード・エルリック、地位は中佐です」

「自分はシェイド・マーカー少尉です」

「ドギー・ミュラー少尉です」

「サヤカ・リードマン准尉です」

「ルーク・フォン曹長です」

「アシュレイ・フォン、地位は曹長です」

「今回の総指揮をとることになったオリヴィエ・アームストロング、地位は大將だ」

「・・・よろしくお願いします」

エドワード達は一斉に敬礼をした。

全員が席に着き、書類の準備ができるとオリヴィエが口を開いた。

「ではさっそく事件の確認に入ろう。マーカー少尉、頼めるか？」

「はい」

名指して呼ばれたマーカーは立ち上がり書類を読み始めた。

「最初の事件は三か月前のオリーブ一家殺人事件です。65歳、63歳の父方の両親、6歳の子供を含めた家族5人全員が何者かに殺害され、体の一部が持ち去られています。次はその一週間後……計12件の事件が起こっています」

「マーカーは淡々とした口調で書類を読み上げた。」

「進展状況はどうなっている？」

「現在の所、犯人の遺留品、被害者の共通点は見つかっていません。分かっているの犯行が今のところ水曜日に限定されていることです。オリヴィエの問いにマーカーは書類を見ずに答えた。」

「ふん、今までの連中の無能ぶりが手に取るようにわかるな」

オリヴィエは不機嫌そうに鼻を鳴らした。

「もうエルリックたちは一度被害者の共通点を洗い出せ。マスターグのところは妙な動きをしている連中がいなか調べろ。今日はこれで解散だ。報告は各自こちらに持ってこい」

「……Yes, Mam!!!」「」「」

エドワードやロイ達は一斉に敬礼をした後、会議室を後にした。

立ち位置 中編

合同捜査を初めて数日経った頃、ルークとアシュレイはホークアイ、ハボックと共に執務室で過去に似たような事件が起きていないかを調べるため資料室に来ていた。

「自分の力を過信するな。人を当てにせず与えられた役割を果たせ。周りの経験から出た言葉を見無視するな。指示は鵜呑みにしないで自分の頭で考える」

「何だソレ」

資料を見ながら突如ルークが言った言葉にハボックは首を傾げた。

「中佐から新人に言う心得です」

「矛盾だらけだな」

「でしょう？」

「まあ、間違っちゃいないがな」

同意するルークにハボックはそう付け足した。

「……中佐が貴方に敬意を払う理由が分かりました」

側にいたアシュレイが納得したように呟いた。

「敬意……信頼や信用じゃなく？」

アシュレイの言葉を聞いたホークアイは目を細めながら訊ねた。

「はい」

アシュレイは頷いた。

一方外ではドギーとブレダが現場周辺の聞き込みをしていた。

「つきゃあああ！ ひったくりよ！」

現場近くでよく散歩しているという老人に事件当日、怪しい人間がいなかったかを聞いてみると若い女性の悲鳴が聞こえ、三人の背後をフードで顔を隠した男が走って行った。

「追っぞ！」

「はい！ お時間を取らせてすみませんでした」

男を追ってブレダが駆け出した後ドギーは老人に頭を下げ、後を追った。

数分も走るも男の距離は変わらず、ブレダは息切れを起こし始めた。「っ黙ってないと舌噛みますよ!」

それに見かねたドギーはブレダを肩に担ぐとさらにスピードをあげた。

「嘘だろ?!」

自分の後を追っていた時よりも速いスピードにブレダは目を剥いた。

「こっ見えても運動は得意なんです!」

ドギーはぐんぐんと男との距離を詰めながら叫んだ。

「っ捕まえた!」

「ぐあ!」

ドギーはブレダを支えている方と反対の手で男の服を掴み引き倒した。

「っと、大丈夫ですか」

走っていた勢いで若干ふらつきながらドギーはブレダを下ろした。

「あ、ああ。だが今度からは置いて行ってくれ」

ブレダは蒼い顔をしながら言った。

「あ、はい。すいませんでした」

ドギーは男の服を掴んだままブレダに頭を下げた。

ドギーとブレダはひつたくりを捕まえたその足で軍部に帰り、しかるべき場所に放り込み執務室に戻って行った。

「・・・しかしある意味かなりシユールだよな。あの細いドギー准尉がブレダを俵担ぎしてすごいスピードで走ってんだから」

「・・・確かに」

話を聞いて絶句したハボックにエドワードは苦笑した。

「しかしなんで俵担ぎなんですか?」

「中佐が男を持ち上げる時はそうしろって」

ヒュリーの問いかけにドギーはエドワードの方を見た。

「男の姫抱きなんざ目に悪い」

「あ……あゝ確かに」

ハボックは頭を掻きながら言った。

「んじゃ、俺はアームストロング中將に呼ばれてるから」

そう言つてエドワードは立ち去つた。

コンコン

オリヴィエの執務室の前に来たエドワードはドアをノックした。

「誰だ？」

「エドワード・エルリックです」

「入れ」

「失礼します」

中から聞こえたオリヴィエの言葉にエドワードはドアを開けた。

「ご用件は何でしょうか？」

「人払いはしてあるから言葉使いを戻せ、気持ち悪い」

執務室に一人いたオリヴィエは顔をしかめた。

「………わかつた」

オリヴィエの言葉にエドワードは呆れたように言った。

「それで何の用だ？」

暗にくだらない事だつたら許さないと言わんばかりの表情でエドワ

ードは問いかけた。

「お前の部下についてだ」

「？ アイツ等がどうかしたのか？」

エドワードは考え込むように眉間に皺を寄せた。

「彼らはお前の元にくるまで手を抜いていたのか？」

「は？」

予想外の問いにエドワードはポカンと口を開けた。

「お前の元にくる前と後で働きがだいぶ違う。前は毒にも薬にもならんような奴らばかりだ」

「ああ、それか」

エドワードはようやく納得したというような声をあげた。

「心当たりがあるか」

「あれは前の上司じゃ採用されなかった証拠を俺が採用してるからだ」

「どういう事だ？」

「実際見た方が早い」

そう言うとエドワードは軽く手を振り、その姿が一瞬霧に包まれ、霧が晴れるとそこには金髪蒼眼の女がいた。

「エルリック、か？」

「ああ」

茫然としたオリヴィエの言葉にエドワードは頷いた。

「その姿は何だ？」

「私の正体と言ったところだ」

「どういう仕掛けだ？身長まで変わるなんてありえない」

エドワードの身長は十センチほど伸びていた。

「ありえないなんてありえない、そもそも私が人間だといった？」

「ならばお前の弟も」

「アルフォンスとは血の繋がりはない」

エドワードは首を横に振った。

「なに？」

「私が暗示で無理矢理入り込んだだけだ」

「貴様！」

オリヴィエはガタリと椅子を倒しながら立ち上がった。

「そうだ、お前は私を警戒し続ける」

エドワード啼いながら漆黒の小刀を投げ言った。

「何だコレは？」

「私を殺せる唯一の道具だと言っておこう。持っている。まあ、お前の実力では傷一つ付けられないだろうがな」

「……何が目的だ？」

「私が話すと思うか？」

「………思わん」

「それでいい、ちなみに話を戻すが彼らも人ならざる力を持つてる。その力を使う事を私が認めているからだ」

「なるほど、確かにそれは頭の固い爺共には知らせられんな」

オリヴィエは疲れたようにため息をついた。

「話は終わりか？」

前の姿に戻ったエドワードが訊ねた。

「ああ、今回はそれだけだ」

「そうですか。では失礼します」

エドワードは口調を公のものに戻し退室した。

「………何がしたいのか全く読めんな」

オリヴィエはエドワードが出て行った扉を見ながら眉間に皺を寄せた。

立ち位置 後編

「愛こそがすべて、か」

エドワードは提出された書類に目を通し呟いた。

「確かにそういう感性は必要かもしれないねえけどなあ」

「生きてこそのもんだと思う」

書類を作成したルークとアシュレイがそっくりな顔に眉間に皺を寄せた。

「永遠に共にいれるようにするために殺すなんて理解できません」

ミユラーは首を左右に振りながら目を閉じた。

「ホームクルス人造人間の件が落ち着いたとはいえまだ安定したとは言い切れない。その不安につけ入ったんだろう」

エドワードは書類を纏めると立ち上がった。

「とりあえず提出に行く。お前らは新しい情報が来ても大丈夫なように待機してろ」

「Yes, Sir!!」

部屋を出るエドワードにメーカー達は敬礼をした。

「……随分とタチの悪い宗教集団だな」

「キューピットにでもなったつもりでしょうか？」

書類を見せられたオリヴィエとロイはそろって不快な顔をした。

「中には殺したと偽って人身売買をした連中もいるようです」

上司がいる時仕様の話し方をするエドワードも不快感を隠さない顔つきになった。

「とりあえず証拠は固めたな。エルリックは宗教団体そのものを、マスタングは人身売買をしてる連中を、私は軍の濃み出しをする」

「Yes, Sir!!」

二人は敬礼をして執務室を出た。

「私達は犯行を実行している宗教団体を相手にする事が決まった」
「マスタング少将達は裏で甘い蜜を吸ってる連中の相手ですか？」
ドギーの問いにエドワードは頷いた。

「作戦は明後日の集会時に一網打尽にする。配置に関しては今から指示を出す、まあいつも通りと思って大丈夫だろう」

エドワードは本山の地図を机の上に広げた。

「出入り口は此処と此処、後は書かれていないが隠し通路がある」
そい言いながらエドワードは地図に線を書き足していった。

「敷地は下士官で包囲。敷地外にある隠し通路の出口はアシュレイとリードマンで押さえてくれ」

「はい」

「いつも通りリードマンは一人出れないよう封鎖を、アシュレイは万が一に備えておけ。緊急時にはルークを通して私に」

エドワードはそう言うと二人はしっかり頷いた。

「マーカーは敷地外から敷地内の様子を探って無線で連絡を、ルークとドギーは私と一緒に乗り込んでくれ。特にルークはアシュレイからの連絡に注意してくれ」

「はい」「はい！」

マーカーは静かに、ルークは元気よく返事をした。

「作戦実行まで各自準備をしておくように」

「Yes, Sir!!」

エドワードの締め括りに一同は敬礼した。

そして作戦当日

突入三十分前、アシュレイとリードマンは宗教団体の敷地の外にある。隠し通路の出口の前にいた。

「とりあえず封鎖しちゃいませよ」

そののんびりとした口調で言ったリードマンはベタベタと出口の扉を紙テープで塞いだ。

「しゅくりょくでえす。アシユレイさぁん、連絡よろしくお願ひしますう」

「ああ」

リードマンの言葉に頷いたアシユレイは目を閉じた。

『ルーク、聞こえるか？』

『うん、聞こえるよ』

声を出さずに呼び掛けるアシユレイの頭の中にルークの声が響いた。

『こっちの封鎖は終わった。いつでも大丈夫だと中佐に伝えてくれ』

『わかった』

ブツリ

糸が切れるような音がした後ルークの声は消えた。

「伝えたぞ」

「後は見張るだけですねぇ」

「ああ」

そう言うと二人は出口からは見えない場所に隠れた。

その頃、エドワード達は乗り込む屋敷の近くに立てたらテントにいた。

「中佐、アシユレイから隠し通路の封鎖が終わったと」

「わかった」

エドワードは頷くと周りに立っていた部下達を見た。

「マーカー、声は？」

「約二百人です。主要人物は奥の方に居るようです」

「わかった。これから二十分後に作戦を開始する、各自持ち場につけ。くれぐれも気付かれるな」

「Yes, Sir!!」

エドワードの言葉下士官達は一斉に敬礼し、中にいる者達に気付かないよう屋敷を包囲した。

そして二十分後

「突入！」

エドワードの声に突入部隊が一斉に屋敷に乗り込んだ。

「きゃあああ！」

信者らしき人々を次々と拘束していった。

「マーカー！ ルーク！ 私達は奥に行くぞ！」

エドワード達は教祖や幹部が集まっている部屋に向かった。

「中佐、彼等は隠し出口に向かっています！」

「つちよこまかと」

マーカーが言うとエドワードは舌打ちしながらスピードを上げた。
バンツ

エドワードが奥の部屋の扉を開けると人一人おらずガラんとした空間が広がっていた。

カツカツ

エドワードは迷わず部屋の奥に備え付けられている暖炉に向かうと奥の壁を蹴飛ばした。

ズンツ

重いものが落ちた時と同じような音がして壁は倒れた。

「行くぞ」

「はい」

三人はそのまま奥に入ってしまった。

「くそつ！ なんで空かないんだ！」

エドワード達が奥に進んでいくと男達の怒声が響いてきた。

「悪いが出口は既に封鎖させてもらっている」

エドワードは錬金術を使い男達を拘束した。

「これで全員確保したな。リードマン！ 開けてくれ！」

「はいです」

エドワードは外にいる部下に指示を出すとベリベリとテープを剥がす音がした後扉が外から開けられた。

「軍部に連れていくぞ。車の手配は？」

「既に出ています」

エドワードの問い掛けにアシュレイは即答した。

「助かる。アシュレイ、ルーク、リードマンはコイツ等を軍部に連れていけ。ドギーは私と一緒に屋敷の方にいる連中を」

「……はい」「」

エドワードの指示の元、二手に別れて動き出した。

一時間後

「ずいぶん遅かったね」

関係者を全員軍部に連行したエドワード達をロイとオリヴィエ達が迎えた。

「予想以上にいましたから」

ロイの軽い嫌みを受け流しオリヴィエに向かい直ると敬礼した。

「ハートレス教団関係者全員連行いたしました」

「わかった。後は書類だけだな。マスタング逃げるなよ」

「……Yes, Sir」

オリヴィエに釘を刺され冷や汗をかきながら敬礼するロイをエドワードやロイの直属の部下達は笑った。

募る不信

ある日、エドワードが執務をしているとマーカーが部屋に入ってきた。

「マスタング少将の昇進の話が出ますよ」

「ほう」

マーカーの言葉にエドワードは机の上で手を組み目を細めた。

「それに伴って中佐も昇進、直属の幕僚に、だそうです」

「それは少将を、読んで、か？」

「はい」

「……」

エドワードは組んだ手の上に額を乗せ考え込んだ。

「他の奴らも呼んで来てくれ」

「わかりました」

マーカーはエドワードの言葉にうなずくとエドワードの他の直属の部下たちを呼びに行った。

数分後、エドワードの執務室にはマーカー達、エドワードの直属の部下が集まった。

「今日集まったのは私たちに昇格の話が持ち上がっているという話をマーカーが掴んだ」

「どうするんですか？」

「何もしない」

アシユレイの問いにエドワードは即答した。

「いいんですかあ？ 動きにくくなりますよ？」

「ああ、掃除は粗方終わったからな」

エドワードは机の中に隠していた

「昇進に見合う手柄は立ててるしね」

「僕達はどうなりますか？」

「着いて来るかどうかは個人に任せる」

「そうじゃなくて、昇進するかどうかです！」

エドワードの言葉にミュラーが叫んだ。

「着いて行くのは当たり前ですう」

「・・・そうか」

リードマンの言葉にエドワードは頷いた。

「で、昇進はどうなります？」

「お前達全員一階級上がるはずだ」

「やった！」

ドギーは喜びの声を上げた。

「二人で居られる時間が」「無くなるかも」

双子は眉を下げ互いを見た。

そして一週間後

「本日付けで配属になりました、エドワード・エルリック大佐です」

「活躍は聞いている。よろしく頼むよ」

「中将がサボらないようお目付け役お願いね」

「もちろん！」

ホークアイの言葉にエドワードは笑って答えた。

そしてエドワードが配属になって数カ月程経ったある日

「すいません、中将。お願いがあります」

「君は確か鋼ののところの」

「シェイド・マーカー中尉です」

「それをお願いとは？」

「上司命令でウチのワーカホリック上司を休ませて貰えませんか？」

「鋼のがどうかしたのか？」

「ここ数カ月全く休んでないんです」

「何？」

マーカーの言葉にロイは眉間に皺を寄せた。

「不穏な動きのせいでいつもよりナーバスになっていて」

「不穏な動きだと？」

「・・・これを知っているのは軍内では大佐と大佐直属だけです。

だから大佐には知っても黙っていて欲しいんですけど」

マーカーは視線をしばらくさ迷わせ言った。

「分かった」

マーカーの言葉にロイは戸惑いもなく頷いた。

「ドラクマである宗教が国教になる勢いで広がっています。恐らく

国教になった際には教義をタテに宣戦布告を行う可能性があります」

「そんな、たかが宗教だろ？」

「信仰は狂気に変わりやすい、宗教戦争が良い例です」

「成る程」

ロイはイシユヴァールの経験を思い出し苦い顔をした。

「中佐はその宗教がアメトリス内で広まってないか、信仰しそうな者が上層部にいないかの二点を調べています」

「信仰は個人の自由だろう」

「中佐曰くあの宗教は異端狩りを行うと・・・既にドラクマとの国境近く居るオレの知り合いも襲われています。死者は出ていませんが知り合いはそれは狩られる側が上手く隠れていたり既に亡命しているからだとも言っていました」

「っ?!」

「大将の奴、何でんな大事を黙って」

「・・・すいません、これ以上は」

マーカーは申し訳なさそうに頭を垂れた。

「ただ、私に言えるのは異端の中に錬金術師が入る可能性があるかどうかです」

「・・・わかった。鋼のには私から有休を消費するよう命令を出しておく。溜めてばかりでは問題になるとも言えば納得するだろう」

「ありがとうございます」
「マーカーは頭を下げ礼を言った。」
「また、話せることは話して欲しい」
「はい。では、失礼しても？」
「ああ」
「中将、本当にありがとうございます。では失礼します」
「マーカーは再び礼を言った後部屋を出ていった。」

「なかなか、尻尾を出さんな」
「大将っすか？」
「ああ、アレが私達を頼らない理由はなんだ？」
「と言うよりも軍に知られないようにしているみたいだぜ？」
「ヒューズがドアから入るなり言った。」
「何？」

「探ってみたがドラクマに新興宗教が広まっているのは本当らしいが・
・軍には全く情報が無い」
「どづいう事だ？」
「どづやらエドの奴が意図的に情報を操作してるらしい」
「馬鹿な、そんな事をどづやって」
「さあな、でも状況から見ればそうだ」
「・・・」
「エドは直属を自分で選んでたろ？」
「あ、ああ」

唐突な話題の変化にロイは戸惑った様に返事をした。

「そいつらの履歴を洗ったが評価は全員普通、もしくは職務態度に
問題あり、と書かれていた」
「だが」

「ああ、今じゃかなり優秀な働きをしている」
「鋼のの元に来るまで手を抜いていたのか」

「もしくはエドの使い方が上手いか、だな」

「そうか・・・」

ロイは考え込むように腕を組んだ。

「どちらにせよ、本人たちに聞かなければわからなさそうだな。・・・

・もっとも口を割るかはわからんが」

「そうだな」

それから一時間以上執務室には沈黙が満ちていた。

セイルーン(前書き)

久々ですいません。

セイルーン

ある日の休日、

「じゃあね、兄さん」

「ああ、ウインリイやばっちゃんによろしくな」

半年近くに及ぶ説得の末国家錬金術師になることを諦めたアルフォンスを見送りにエドワードは駅のホームに来ていた。

「うん」

ポーツ！

客室の窓越しに話していると汽笛が鳴り響き汽車が動き出した。

「じゃあな、また遊びに來いよ。今度はウインリイも一緒に」

エドワードが言つとアルフォンスは頷き片手を振つた。

「またね！」

エドワード遠ざかるアルフォンスに手を振り返しながら見送つた。

その日の午後、エドワードはいつものように教会に来ていた。

またか

そう思いながらエドワードは窓の外から自分を睨み付ける少女を横目で見た。

「……何か？」

エドワードは窓の外でじつと自分を見つめる少女に問い掛けた。

「歌、教えて頂戴」

「は？」

「だから、あんたの歌を教えなさいって言ってるの！」
少女は怒鳴つた。

「……我流なんだが」

「それでもいいわ」

「仕事があるから滅多に來れない」

「会えた時だけでいいの」

「・・・事情を聞こう」

少女曰く自分はセントラル音楽大学の声楽部に通っているのだが、ここ最近行き詰まっていて、気分転換の散歩でたまたまこの近くを通った時にエドワードの歌を聞いたらしい。

「あんな歌い方が今まで見たことが無かったの。一目でピンときたの、この歌い方だって」

熱心に少女は言った。

「・・・分かった」

「ありがとう！アタシはジャネット・クルーニーよ」

「エドと呼んでくれ」

その頃、ロイはヒューズが密かに手に入れた情報に眉を潜めた。

「セイルーン？」

「そ、どうも隣の大陸から来たみたいだぜ。今はシンに居るってさ」

「・・・怪しいな」

「大丈夫だろ、どうやらお忍びで来た時に俺が会った事があってな」

「信用出来そうか？」

「ああ」

「そうか」

頷くヒューズにロイは目を細めた。

「もう少し詳しくその情報を集めてくれ」

「りょーかい。じゃあな」

ヒューズはふざけたように敬礼すると部屋を出ていった。

そして、その数カ月後セイルーンからの使者がやって来た。

「はじめまして、私はアメリカン・ウィル・テスラ・セイルーンと申します」

大總統府前、使者としてやって来たセイルーンの第二王女アメリカがそう言いながらお辞儀をした。

「遠路遙々ご苦労様です」

大總統　　グラマンがそう言いながら片手を出すとアメリカはその手を両手で握った。

「いえ、丁寧な出迎え誠にありがとうございます」

「さて、立ち話も何だからの。中に入るう。マスタング中将、エスコート頼むよ」

「はい」

ロイは敬礼した後、アメリカを貴賓室へ案内した。

「セイルーンと国交を結んで頂きたいのです」

貴賓室、しばらく互いに自国について他愛もない会話をした後アメリカが言った。

「文化、技術の交流は互いに有益だと思えますけど」

「確かに……どう思うかねマスタング少将」

グラマンは自分の後ろに立っていたロイに尋ねた。

「渡りに船では？　いずれはしなければならぬでしょうから」

「そうか」

「国使には……アームストロング大佐が宜しいかと」

「確かにアメリカ嬢と一番波長が合っていたな」

「……」

談笑中の二人をを思い出し乾いた笑いを浮かべた。

「セイルーンの使者、か」

その頃、エドワードはアメリカ達のいる建物の警備の指揮をとっていた。

「大佐はセイルーンの事をご存知なんですか？」

ミラーが尋ねた。

「そういえばお前達は全員こっち生まれだったな」

「はい」

「私が知っているのは千年前の、だがな。良いところだった。王族がプライベートではフランク過ぎてはいたが」

エドワードは肩を竦めた。

「異端狩りから逃れるためにこちらへ？」

「違う。私がこっちに来たのは別の事情があったからな。まあ、間接的に異端狩りの影響でもあるんだがな」

「そうですか」

「とりあえず、無駄口はここまでだ。最終確認を」

「Yes, Sir!」

ミラーは敬礼をすると走り去った。

「出来れば私のような者が二度と生まれたい事を願うぞ」

エドワードはアメリカ達のいる建物を遠くを見るようにして見た。

「それで、アームストロング大佐がセイルーンへ？」

「ああ、あと何人が交換留学という形で彼方へ行く」

謁見が終わり、エドワードはロイの執務室へ呼ばれた。

「んで、俺に何を頼みたいんだ？」

「交換留学生に混じってアメリカ嬢の友人が三人こちらに来るらしい」

「友人？」

エドワードは首を傾げた。

「うち二人はアチラでも有名な魔道士、あちら独特の技術の使い手らしい」

「後の一人は？」

「よく分からん。何でも『クラゲ頭ですけど剣士としては一流』ら

しい」

「剣士って事は武者修行か何かか？」

「ああ、そこで君にその三人の護衛を勤めて欲しい」

「それって家に泊めてやれって事か」

エドワードは嫌そうな顔をした。

「アンタは」

目の前で驚きの表情を浮かべる三人にエドワードは苦笑を浮かべた。

「久しぶり。改めて自己紹介させてもらうぜ。アメトリス国軍大佐兼国家錬金術師、エドワード・エルリック、ちなみに国家錬金術師としての銘は鋼だ」

「軍に入ったんだ」

「まあね」

「鋼の、知り合いだったのか？」

「旅してた頃に会ったんだ。お忍びだって言われたし大した事も無かったから報告はしなかったけど」

「そうか・・・アメトリス滞在中は彼の家にホームステイしてもらう事になりますがかまいませんか？」

「ええ。エドなら安心だわ」

ロイの問い掛けにリナは頷いた。

「んじゃ、まず家の案内をするぜ」

エドワードの家についたリナ、ガウリイ、ゼルガデイスは中に招かれた。

「ここはリビング。奥にキッチンがあるから使いたかったら使ってくれ」

エドワードは入ってすぐにある大きな部屋に案内した。

「へえ・・・結構本格的なのね」

キッチンを覗いたリナが言った。

「とりあえず客間に荷物を運ぶか」

エドワードに言われ一行は二階に向かった。

「ここは俺の部屋、隣の三部屋が客間だ。この前慌てて掃除したから少し埃っぽいかもしれねえけど。一人一部屋だから」

「わかったわ。ゼル、ガウリイ、部屋どうする？」

三人はしばらく話した後部屋を決めた。

「二階には俺の部屋と客間しかないから次は、その二人が喜びそうなトコに行くか」

エドワードはリナとゼルガディスを見ながらそう言って階段を降りた。

「何処に行くの？」

「行つてからのお楽しみに」

エドワードは一階に降りると入り口から一番離れた部屋のドアを上げた。

「うわあ?!」

部屋の中を見たりナは歓声を上げた。

「なんだ？ 本が一杯だな」

「俺の書庫だよ」

「凄いな・・・」

「此所の本読みたいなら読んでいいぜ。まあ全部上級者向けだからまず基礎が出来たら、だけどな」

「ん？ 料理の本もあるぜ？ 間違つて入れたのか？」

「錬金術の本は錬金術師が自分の研究を人に盗られないように暗号化してるヤツが多いんだ」

ガウリイの問い掛けにエドワードは答えた。

「よし、家の中は大体教えたい後は・・・周りが」

エドワードは一人で納得したようにうなずいた後、リナ達の方を向いた。

「今から外、出れるか？ 店の場所とか教えたいんだけど」

「ええ、構わないわよ。こう見えても旅暮らしだったから体力には自信があるの」

「そうか、なら行くうぜ」

エドワード達は街へ出た。

「・・・アンタ達がいる間は出来るだけ定時で上がれるよう上も考慮してくれるだろうけど、どうしようも無いときがあるからな」

エドワードはスーパー、喫茶店、レストランなど生活に関わる店を教えていった。

「ガウリイ、大丈夫・・・じゃなさそうね」

リナが横を歩くガウリイの方を向くと頭から湯気を出すガウリイの姿があった。

「後で地図を書く」

「ありがとうね」

苦笑しながら言ったエドワードにリナは礼を言った。

「あとは・・・此処だ」

エドワードは古びた雑貨屋に入って行った。

「いらっしゃ・・・なんだエドかい」

カウンターに座っていた老婆はエドワードの姿を見た瞬間愛想笑いを止めた。

「なんだとはなんだ。折角新しい客連れてきたのに」

「エド、ここは？」

「セントラルで唯一魔導具を売ってる店だ」

「え?!」

エドワードの言葉にリナは驚きの声を上げ、ゼルガディスも声を出さなかったが目を見開いた。

「千年前の異端狩りで多くの者がコチラの大陸に流れてきた。エキドナもその内の一人だ」

「異端狩りですって？」

「知らないのか？ あの戦争の始まりはエーウェ教という宗教を信者が自分達の神を信じない者達を迫害した事だ」

驚きを露にしたりナにエドワードは首をかしげた。

「つまり、赤眼の魔王ルビアーアイは異端狩りで器になったレイ＝マグナスが死にかけてせいで復活したって事？」

「・・・違う」

「じゃあ、何なの？」

「自分の子供とそれを宿していた者を殺された怒りで封印を解いてしまったんだ」

「ルークとミリーナみたいだな・・・」

「そうね・・・」

ガウリイがポツリと呟いた。

大事な者を失い赤眼の魔王と一体化したルークを思い出しリナとガウリイは暗い顔をした。

「随分と詳しいんだな」

壁にもたれ掛かっていたゼルガデイスがエドワードに言った。

「当事者だからな」

「・・・どういう事だ？」

「アイツは私を甦らせたんだよ。子供は間に合わなかったがな」

「え？ だがどう見ても・・・」

「セイレーンは長命種よ。しかも姿を変幻自在に変えられるわ」

ガウリイの言いたい事に気付いたリナが言った。

「その後、私は水竜王アクアロードと協力してアイツをカタート山脈に封印したんだ」

エドワードはそう言った後右目を撫でた。

「あの時、私は結界で弱った水竜王アクアロードと赤眼の魔王ルビアーアイの差を埋めるために赤眼の魔王ルビアーアイの力の一部を右目に封じた」

「・・・?!」

エドワードの言葉を理解したりナとゼルガデイスは驚愕を浮かべた。
「・・・私は殺すつもりだったんだが・・・世界のバランスが崩れるのを恐れた水竜王アクアロードがカタート山脈に封印して、今すぐにも殺し

に行きそうな私を此方の大陸に飛ばした。それが私の知っている真実だ」

「・・・なるほど、で？　なんで私達にそれを話したの？」

「“母なる混沌”の力を操るすべを知ってるだろう？　それを教えて欲しい」

エドワードはリナに向かっていった。

「結界が解けて、ソチラの話は私にも届いているんだ。魔を滅する者達」
デモンズレイヤーズ

エドワードはリナとガウリイを見据えた。

「“コレ”は長い年月を掛けて“私”を削っている」

エドワードは紅く染まった自分の右目を指した

「だから対抗手段が欲しいって？」

「ああ。対価は三千年分の私の知識でどうだ？」

「なあ、右目を一回潰して治しても無くならないのか？」

「ああ、この右目は単なる魂が結び付いてる影響だからな。潰しても何の意味もない」

ガウリイの問い掛けにエドワードは苦笑しながら答えた。

「・・・わかったわ」

考え込んでいたリナが言った。

「助かる」

エドワードは口元に笑みを浮かべ答えた。

「とりあえず必要な場所は全部伝えたと思うが、知りたい場所はあるか？」

エキドナの店を出るとエドワードは尋ねた。

「緊急の時、アンタのトコに報せに走らなきゃなんないでしょうか
ら場所教えて」

「・・・ああ、電話がないのか」

リナの言葉にエドワードは一瞬考え込んだ後言った。

「デンワ？」

「遠くの場所にいる人間と会話する道具だ。帰ったら使い方を教える」

キョトンとした顔をしたガウリイにエドワードは説明した。

「知識を仕入れるのに最適な場所は？」

「それなら図書館だが・・・文字は分かるよな」

エドワードの問い掛けにリナとゼルガデイスは頷いた。

「俺はずっとリナに通訳してもらってたから」

ガウリイは視線をさ迷わせながら頬を掻いた。

「そうか・・・まあいい、とりあえず貸し出しカードだけでも作るか」

エドワードはそう言って歩き出した。

「ここが図書館だ」

十数分後、一行は巨大な建物の前に立っていた。

「一部を除いては一般人にも公開されているから、まずは中を案内する」

エドワードに促され、三人は図書館に足を踏み入れた。

「まずはカードを作らないとな。受付はコツチだ。貸し出し手続きは此処です。後本の場所が分からなかったら此処で聞けばいい」

エドワードは受付に座る女性に声をかけた。

「すみません、貸し出しカードを作りたいんですけど？」

「エルリック中佐が、ですか？」

「じゃなくてこつちだよ」

首を傾げる受付にエドワードは後ろにいたリナ達を指差した。

「外国の知り合いですか。俺が後見に立てば作れたよな？」

「ああ、はい。少々お待ちください」

受付はそう言って立ち上がると奥の部屋に入ってしまった。

「ずいぶんキャラが違うのね」

「処世術だ」

リナの言葉にエドワードは肩を竦めた。

「ただでさえこの容姿は若く見えるからな。素で話すと目立って仕方がない」

「なるほどね」

そこへ受付が戻ってきた。

「こちらの書類に必要事項をお書きください」

受付は三人分の書類を台に並べた。

「あ、俺はいいぜ。どうせ本読まねえし」

「アンタはいい加減こっちの文字覚えなさい！」

リナはドコからか出したスリッパでガウリーの頭を叩いた。

「つたいな。つてかドコから出した、ソレ」

「乙女のたしなみよ、これくらい。今回はアタシが代筆するから」

そう言いながらリナは自分とガウリーの分、ゼルガデイスは自分の書類に必要事項を書き込んだ。

「・・・はい。後はエルリック中佐が後見人欄に名前を書けば完成です」

「わかった」

エドワード頷きながら三人分の名前を書いた。

「はい、これで手続きは終わりです」

受付は書類を確認した後笑顔で言った。

「早速何か借りますか？」

「そうですね・・・構わない？」

「ああ。どうせ今日は丸一日空いてる」

リナがエドワードを窺うとエドワードは頷いて答えた。

「ありがとう。じゃ行くわよ、ガウリー、ゼル」

リナは男二人を率いて本棚の奥へ消えた。

「エルリック中佐、もしかして、あの人達って噂のセイローンの？」

受付の女が興味津々でエドワードに問い掛けた。

「ああ、そうだ」

「へえ。言葉通じるんですね」

「特殊な翻訳機を使っているらしい」

驚いた様な女にエドワードは伝えた。

数分後

「借りてきたわよ」

ガウリイに十冊以上の本を持たせたリナが戻ってきた。

「借りるときには本の背表紙に書かれた数字とアルファベットを貸し出しカードに書き込んで下さい」

「わかったわ。ガウリイ、そこに本を置いて」

リナは受け付けが差し出したペンを受け取ると近くの机に本を置かせた。

「ほら、こっちはアンタの分なんだから自分で書きなさいよ」

リナは上の方に積まれた幼児向けの絵本を差し出した。

「絵がついてたらいくら脳みそクラゲのアンタでも分かるでしょ！」

「・・・そうだな」

ガウリイは諦め気味に本を手にとった。

十分後、一行は図書館を後にし帰路についていた。

「今度、本を入れる鞆が何かを作るか買うかしらよ」

本の山を持ち、前すら見えないガウリイを横目で見ながらエドワードが呆れ気味に言った。

「・・・そうね、本が痛むし」

リナはガウリイの方をチラリと見た。

「本の心配かよ」

ガウリイは半眼でリナを睨んだ。

「ま、とりあえず必要な場所を全て教えたから後は適当に探検でもしてくれ」

エドワードはそう言ってセントラル案内を終えた。

歌姫

「中佐、昇進が確定したみたいですよ」

ある日、マーカーがエドワードに言った。

「そうか、辞令はいつだ？」

「恐らく来週には」

「そうか・・・他の四人にも知らせておけ。あと荷物の整理もやっ
とくように」

「はい」

マーカーは敬礼をすると去っていった。

「本日より配属されました、エドワード・エルリック大佐です」

「エルリック大佐直屬、シエイド・マーカー中尉です」

「サヤカ・リードマン小尉です」

「ルーク・フォン少尉です」

「アシユレイ・フォン、地位は少尉です」

「ドギー・ミュラー中尉です」

6人は一斉に敬礼した。

「ふむ、よろしく頼むよ」

机に座っていたロイは頷いた。

「鋼の、彼等はどうしている？」

エドワード達がロイの元について二週間程経った頃、ロイが隣の机
で書類を処理していたエドワードに訊ねた。

「ガウリイさんは文字の習得中です。後の二人は錬金術の方に興味
を持ってますね」

「そうか・・・それにしても君の敬語は慣れんな」

ロイは苦笑しながら言った。

「壁に耳あり、ですから」

「ふむ」

暗に盗聴機の存在を告げるエドワードの言葉にロイはわざとらしく顎に手を当てた。

「この前部屋の近くでネズミが出てね。近々殺鼠剤を撒かなければならないのだよ。どこが一番効果があると思う？」

「セオリー通りに本棚の後ろや机の下、後、かじられたら大変ですから電気周りもですね」

エドワードは書類に目を向けたまま答えた。

「なら、出来るだけ早く駆除させてもらおうとするかな」

「その方が良いかと」

トンツと書類を揃えたエドワードは立ち上がった。

「後は少将のサイン待ちです」

エドワードは書類をロイの机に置くと、机にある書類の山に手を伸ばした。

「・・・この辺りの書類は私の方でも処理しても大丈夫そうですが、した方が良いですか？」

「いや、それよりもお昼を買ってきて貰えないか？ 腹が減ってきた」

「そうですね。もう一時ですし」

エドワードは壁に立て掛けられた時計を見た。

「あと、三時にここに集まるようにと皆に連絡を」

「わかりました」

エドワードは頷くと部屋を出ていった。

そして、約二時間後

「少将、新しい任務つかか？」

エドワード達がロイの執務室に集まると八ボックが口を開いた。

「ああ。昨日、テロの予告状が出された」

ロイは頷くと紙の入ったビニール袋を出した。

「【今月末行われるセントラル音楽大学学生発表の会場を爆破する。

生徒の命が惜しければ一億用意しろ】」

エドワードが紙を覗き込み内容を読んだ。

「最近静かになってきてたのに……」

「だからこそだろう」

哀しげに顔を伏せるルークの頭をアシュレイが撫でた。

「しかしなんでこんな場所で？」

「特別公演としてこの学校のOGが歌う。ユリア・ジュエ、名前くらいは知っているだろう？」

首を傾げるドギーにエドワードが言った。

「ああ、“女神の歌声”って言われてる……」

「そうだ。彼女の歌目当てにかなりの客が集まる事が予測される。……どうした？」

ロイは青白い顔をしたルークに問い掛けた。

「あ……いや、なんでも「昔、学校が一緒だったんだが、その時ルークを虐めていた首謀者の一人だ」……アシュレイ」

ルークの言葉を遮ってアシュレイが言った。

「ふむ……少尉達は彼女に会わせない方が良いかな？」

「できるなら」

ロイの提案にアシュレイは頷いた。

「なら、二人は外の警備にまわそう」

「ありがとうございます」

アシュレイとルークは頭を下げた。

「しかし……フェンデの、か」

思わずエドワードは顔をしかめた。

「フェンデ？ 何だね、それは」

「通り名、と言うか……なんというか」

エドワードは言葉を濁した。

「え？ ルークとアシュレイはオールドランド出身なんだ」

その時ドギーがルークとアシュレイに尋ねた。

「ああ、よく分かったな」

アシユレイが驚いたような顔をした。

「最も早く衰退した隠れ里とその六大派閥位は知ってるよ」

「隠れ里？」

「あー、前に、昔、隣の大陸から異端狩りを避ける為に移住して来た奴等いるって話、覚えてるか？」

エドワードはしばらく視線をさ迷わせた後、口を開いた。

「隠れ里ってのはそういう連中が作った集落でさ。コイツ等も実は隠れ里出身者」

エドワードは言った。

「隠れ里の連中は変わった力を持つてる奴が多いから、軍で浮きやすい。出来るだけ俺の下に引き込むようにアードからも頼まれてたんだ」

エドワードは言った。

「……彼等の成績の変化はそれか」

「何の力が明かすかはコイツ等の自由意思に任せてるから、その辺はソツチで」

エドワードは肩を竦めた。

「そうか……」

「それよりたい、じゃなくてエルリック中佐。ユリア・ジユエって人に何か問題があるのか？」

ハボックが問い掛けた。

「……オールドランド出身の奴は人格に問題有りってよく言われるんですよ」

ドギーが言いにくそうなエドワードの代わりに口を開いた。

「元々、隣の大陸……この前王女様が来てましたよね、の国の王族や貴族が亡命した集落らしくて」

「何年経つてもその感覚が全然抜けてないんです」

ドギーの言葉をアシユレイが引き継いだ。

「特に今の代は特に酷い。西方司令部のグランツ兄妹、知ってますか？」

「聞いた事があります」

アシュレイの問い掛けにファルマンが片手を上げた。

「兄のヴァン・グランツの准将は剣の腕がたつそうですが、身内鼻肩がひどく妹のティア・グランツに危険な任務を負わせないようにしたりと私情で任務を振り分け、また、他人を見下すトコロもあるそうです。妹のティア・グランツに至っては階級を無視する言動が多く、自分の考えが世界の常識だと考えて、反論する相手には上官であろうと馬鹿にする振る舞いをとるそうです」

「ふむ、彼等の事は私も聞いた事がある」

「ユリア・ジユエはティア・グランツの双子の姉です」

ファルマンの言葉に頷いたロイにルークは付け足した。

「性格は姉妹でそっくりですからね……」

「うっわ……」

ハボックが最悪と言わんばかりの表情を浮かべた。

「彼女の相手は私が受け持とう」

「さっすが女誑し。女性の扱いはお手のものっスね」

「誰が女誑しだ」

ブレダの茶々にロイは半目で睨んだ。

「まあいい……他の者は会場の警備の指揮を頼む」

「……Yes sir!」

一瞬にしてはりつめた雰囲気になったロイの言葉に全員が敬礼をした。

そして、コンサート当日

「鋼の、出演者達に挨拶に行くぞ。一応君はこの場で私の次の責任者なんだからな」

ロイは警備の配置の指示を出すエドワードに声を掛けた。

「わかりました」

下士官の目もありエドワードは敬語で返し、会場に向かうロイの後

に続いた。

『やっぱり止めましょう』

『嫌よ！ せっかく来てくれた人に失礼だわ！』

エドワード達がコンサートに関わる人が集められた控え室の前に来ると中から壮年の男と若い女の口論が響いてきた。

『沢山の人がこのコンサートを楽しみにしてくれているのよ。テロリストなんか屈しちゃダメよ！』

若い女の声が響いた。

「ドコの左翼の政治家だ」

エドワードは呆れた様子で溜め息をついた。

「我々としてはファンの安全を第一にと言って貰いたかったな」

「大方テロリストに狙われる可哀想なヒロインの自分に酔ってるんだろ」

若干失望したようなロイにエドワード吐き捨てた。

「ずいぶん辛口だな」

「旅をした頃にグランツ兄弟の評判は結構耳に入ってたからな」

「そうか」

「好評価を下すのが同郷の奴らだけだったので充分問題だろ」

「確かにな」

「無駄話はこちらまでにして入ろうぜ。ご機嫌取りは任せた」

エドワードはそう言ってドアをノックした。

『どうぞ』

「失礼します」

エドワードはドアを開けるとロイの付き従い中に入って行った。

「誰？」

中で喚いていたらしい女が不機嫌な顔を隠しもせず言った。

「今回の警備の責任者を勤めさせていただくロイ・マスタングです。こちらは副責任者の」

「エドワード・エルリックです」

エドワードは敬礼した。

「焔の錬金術師と鋼の錬金術師……」

女のマネージャーらしき男が驚愕に目を見開いた。

「セントラル音楽学校学長のジョージ・カーターです」

女の前にいた初老の男が慌てて頭を下げた。

「ふうん、貴方達が」

ユリアはジロジロとロイとエドワードを眺め回した。

「よろしくお願ひします」

ロイは外向けの笑顔で言った。

「まあ、貴方達なら舞台に立つても釣り合いそうね」

ユリアの言葉に周りにいた者達が目を見開いた。

「ジユエさん、どういう」

「どういうってエスコートしてくれるんでしょう？」

ユリアが当たり前の様な調子で言った。

「私を狙っているならそうしたら確実に守れるでしょう？」

「……申し訳ありませんが我々は指揮をしなければなりませんから」

「んから」

ロイはしばらく絶句した後言った。

「我々の代わりに部下をつけます」

「駄目よ！ 信用ならないわ！」

ロイの提案にユリアが叫んだ。

シン……

ユリアの言葉に辺りは静まり返った。

「それは……どういう意味でしょうか？」

エドワードは笑顔を崩さず、しかし僅かに強ばった表情で訊ねた。

「そ、それは……」

ユリアは視線をさ迷わせた。

「鋼の」

「……私は他の出演者の方へ行きます。護衛に来ている部下では心許ないようですから……では」

エドワードは敬礼をし部屋を出ていった。

「全く、絢爛の愚者も見る目がない上愚かすぎる」

エドワードは廊下を歩きながら呟いた。

「……ここか」

エドワードは学生達の控え室の扉をノックした。

『どうぞ』

「失礼します」

中からの許可が出され、エドワードは中へ入っていった。

「初めまして、今回の副指揮を任せられましたエドワード・エルリックです」

「エドお?!」

エドワードがドアを閉め、敬礼するとすつとんきような少女の音が響いた。

「なんでここにいるのよ?!」

驚きながらエドワードを指差していたのはジャネット・クルーニーだった。

「なんでつてさっきも言った通りだけどつと。すいません、騒がせてしまって」

エドワードは慌てて教員らしき人物に頭を下げた。

「いえ、こちらこそウチの学生が騒いで……あの、エドワード・エルリック、というと」

「鋼の錬金術師、のほうが有名ですね」

エドワードは苦笑混じりに銀時計を出した。

「うそぉ……」

ジャネットが呆然とエドワードと銀時計を交互に見比べた。

「クルーニー！」

担当らしい教師が焦ったように叫んだ。

「いえ、良いんですよ。彼女に渾名しか教えなかったこちらにも非がありますし」

エドワードは苦笑しながら首を横に振った。

「ジャネット、鋼の錬金術師さんとどういう知り合いなの?!」
隣にいた女子学生がキラキラした目でジャネットが問い掛けた。

「近くの教会で歌を教えて貰ってたのよ」

ジャネットは呆然と答えた。

「休みが決まっていって言ってたからってつきり本職の歌姫だとばかり……」

「軍の仕事も休みは不定期ですよ」

エドワードはジャネットに答えた。

「はあ……そういえばそうね。大きめの服のせいで体型がわからなかったわ」

クルーニーは深く息を吐きながら言った。

「では、改めて。今回の警備の副指揮を担当します、エドワード・エルリック大佐です。指揮を勤めるロイ・マスタング少将は所用により遅れるとの事なので私が先にご挨拶を」

エドワードは笑顔で答えた。

「ねえ、所用って……」

「きつとあの“歌姫様”の我が儘ね」

学生達はコソコソと顔を見合わせた。

「皆さん、エルリック中佐の前ですよ。しゃんとしなさい!」

「……はい!」

教員の叱責に学生達は一斉に背を伸ばした。

やっぱ、評判は最悪か……

エドワードは溜め息を吐いた。

「えっと、警備なのですが控室の前にも警備の者が来る事になります」

「わかりました」

教員は頷いた。

コソコン

ノック音が部屋に響いた。

「どうぞ」

「遅れて申し訳ありません」

ロイが扉を開け中に入ってきた。

「少将、どうでしたか？」

「マーカー中尉にエスコートしてもらった事で妥協してもらったよ」

「そうか……」

マーカーもエドワードやロイには多少劣るが充分鑑賞に値する見目である。

終わったらボーナスを出そう。

サトリであり長時間ユリアの本音の声を聞かされ続けるであろうマーカーにエドワードは心底同情した。

「舞台袖に何人が護衛が控えます。どんな見た目であれ所有者かはつきりしない物を見つけた際には触れずにお知らせください」

「はい」

エドワードの説明に教員は頷いた。

「後は、ジュエ氏のエスコートとして軍の者が一名つきます。舞台上で何かあれば彼の指示に従ってください」

「わかりました」

「こちらからは以上ですが質問はありますか？」

「いえ」

「エドは出ないの？ 紛れても違和感無いじゃない」

ジャネットが言った。

「クルーニー！ いい加減にきなさい！」

「だって、軍人としての実力は確かだし、歌だって私より上手いんですよ。いても違和感無いじゃないですか」

ジャネットが怒鳴る教師に言った。

「ほう……それは初耳だね、鋼の」

「人前で唄うのは嫌いなんだよ。って無駄口を叩いてる暇は無いでしょう」

エドワードはギロリとロイを睨み付けた。

「すいませんが、私は外の現場指揮がありますから中にはいれませ
ん」

エドワードは頭を下げた。

「いえ！　こちらこそ生徒が突拍子も無いことを言ってしまったす
いません」

教員が慌てて手を振りながら答えた。

「ジャネット、そんなに上手いの？」

側にいた学生がジャネットに問い掛けた。

「私が時々でも教わる位にね」

「じゃあ最近歌い方が変わったのってエルリック中佐に教わったか
ら？」

「ええ」

ジャネットははつきりと頷いた。

「少将！　中佐！」

その時、一人の軍人が血相を変えて飛び込んできた。

「犯人からのメッセージが届きました！」

「？！」

二人は顔を見合わせた。

「……すいません。我々はこれで失礼させていただきます」

「いえ、どうかよろしくお願いいたします」

二人は早足で部屋を出ていった。

バタンツ

「少将！　大佐！」

会場のホールの一室を借り受けた本部に入るとブレダが声を掛けた。

「犯人からメッセージが入ったそうだな」

「はい。と言っても我々には理解不能ですが」

ホークアイが二人に紙を差し出した。

「何々…… A - B H / D - A J / B B - D ……」 『順番だよ。』

「一ヶ所でも間違えればBANG!」か。同じ形式のアルファベット羅列か。この形は恐らく座席番号だと思うんだが……どう思う？ 鋼の」

「恐らくそうでしょう。……アルファベットがAからJまでしか使われていないという事はこれがあれば0から9までの数字に当てはまるのではないかと……」

ロイに尋ねられエドワードが紙を見ながら答えた。

「しかも一ヶ所でも間違えた場所を探せば爆発させるという事は恐らく、どこか中から監視している可能性があるな」

「それとなく客席を見渡せる場所の巡回を強化しましょうか」

「そうだな、何人がホールのスタッフに変装させるか」

エドワードの提案にロイは頷いた。

「後はこの暗号の順番がどのようなものか、だな」

「0 1 2 3 4 5 6 7 8 9、1 2 3 4 5 6 7 8 9 0、0 9 8 7 6 5 4 3 2 1、9 8 7 6 5 4 3 2 1 0……単純に考えればこの四通りですね」

「ああ、数字が十個だから固定したものもない。それとなく探らせるかしかなさそうだな」

「そうですね。……私はそろそろ外に戻らなければならないのですが」

エドワードは頷いたあと言った。

「ああ、そうか。なら外は頼む。暗号に関しても何か気付いたら連絡を」

「Yes, sir!」

エドワードは敬礼をして立ち去った。

「遅くなって済まない」

エドワードは外部警備の簡易指令所に着くなり謝った。

「いえ、暗号の件はこちらにも届いてますから」

ドギーが言った。

「それよりマーカー少尉、災難ですね」

「ああ、護衛の件も届いているか」

「はい」

「マーカーには終わったらボーナスを出す」

「一応胃薬は用意しました」

「……そうか。後で渡してやれ」

エドワードは一瞬黙り、言った。

「はい」

「ちよっと！ 離してちょうだい！」

そこに外から金切り声が響いた。「何事だ？」

エドワードは近くを通り掛かった軍人に問い掛けた。

「すみません。警備に自分達を入れると言っている連中が来てい

……」

困惑したように軍人が言った。

「……軍属か？」

エドワードは尋ねた。

「それはまだ……ですがその中にユリア・ジュエに瓜二つの者が居まして。その者がユリア・ジュエは自分の姉だと言っておりまして」

「確かに、ユリア・ジュエの双子の妹は軍に居るが……護衛に身内が入るのは軍規禁止されている」

「でしたらどうしますか？」

「マスタング少将に経緯を伝えて、ユリア・ジュエの身内と知人の面会として扱って中に入れて良いか聞いてきてくれ。恐らく跳ね除ければ騒ぎを起こされるか強行突破されるとも」

「はっ」

軍人は敬礼をして走り去った。

「中佐、許可が出ました！」

しばらくして聞きに行った者が戻ってきた。

「そうか、なら“丁重に”案内しろ。“一般人”の“客人”だ」
「Yes, sir!」

男は敬礼し去っていった。

「全く、あの一族はろくな事をしない」

エドワードは深く溜め息をついた。

「全くですう」

リードマンが頷きながらエドワードの前に来た。

「リードマン、“人形”の設置は終わったのか？」

「はい。……それにしても腹が立ちますよう。『上司の許可がなければ何も出来ないのね。まるでお人形ね』って言ったんですよ」

リードマンは顔をしかめた。

「軍で階級は国民に害がない限りは絶対だ。それすら知らないなんてな」

エドワードは呆れた様に溜め息をついた。

「ですよねえ」

自信満々に言うもんだからこっちが間違ってるんじゃないかと思いましたが、とリードマンは続けた。

「主従交換の風習で騎士の家系の筈なんだがな」

「そうなんですか？」

「ああ、聖女の血筋だと知られて権力者に利用されないようにする為だったらしいが……」

「あんなんじやすぐにバレちゃいますよねえ。不敬罪で捕まって命乞いしないといけなくなってる」

「リードマン、言い過ぎだ」

笑うリードマンをエドワードは諷めた。

「すいませえん」

リードマンは舌を出して謝った。

「とりあえず民間人としての扱いだから警備には参加できない筈だ。口出しすれば公務執行妨害で捕縛できる」

「それはありがたいですね」

リードマンは笑顔で言った。

「さて、後一時間もすれば観客が来始める。ドギー、準備はどうなっている?」

エドワードは尋ねた。

「はい、現在会場の周りを周回し不審者がいないか確認を始めています」

「……フォン准尉兄弟は?」

「アシユレイが“彼等”に気付いてルークを隠しましたから無事ですよ」

「そうか……」

エドワードは安堵の溜め息をついた。

「今の所は不審者は“彼等”だけですから、大丈夫だと思います」

「さて、忙しくなるのはこれからだいけるな?」

「Yes, sir!」

エドワードの言葉に二人は敬礼をした。

一時間後

「客足は?」

「えっと……会場十分前位から人が並びだしてるのもう百人程入ってると思いますけど……」

エドワードの問い掛けに報告に来ていたルークは言葉を濁した。

「どうした?」

「なんかメディア関係者が多いような気がするんです」

「大方軍へ通報する前に騒いで漏れたんだろ」

「やっぱりそうですね」

ルークは俯いた。

「まあ、盛れたものは仕方無い。身体検査はキチンとやれてるな?」

「あ、それは大丈夫です」

ルークは頷いた。

「なら良い」

エドワードは頷いた。

「それにしても何でユリアを狙ったんでしょうね」

ルークはポツリと呟いた。

「話題性ならもつと良いものもあったし。確か来月にはセイルーンに行った使節団が帰って来るんでしょう？ そっちの方が話題性もあるでしょう？ ついでに場所によれば交通機関も麻痺できる」

「確かに“未知の国からの帰還者”だからな」

エドワードは頷いた。

「ユリアは性格的に恨みを買いやすいから……」

「ユリア・ジユエへの怨恨か。調べる価値はありそうだな。ルーク、関係者にそれとなく聞きけるか中将へ聞いてきてくれ」

「わかりました」

ルークは敬礼して中へ入っていった。

「大佐、“人形”が爆弾を見つけました」

突如リードマンが言った。

「そうか。どのパターンだ？」

「0からのパターンでした」

「わかった。至急、中へ連絡してくれ。“人形”の実演したら信じ
るだろう」

「はい！」

リードマンは頷くと駆け足で中へ入っていった。

「さて……念の為に中がパニックになった時の為に備えて
おけ。後、不審者の警戒を強化しろ。犯人が“見物”に来るかもし
れない」

「Yes, sir！」

エドワードは近くにいた軍人達に指示を出し始めた。

「まさかあんな事が出来るなんて思わなかったよ」

ロイは呆れたような顔でエドワードを見た。

「アードから頼まれてたからな」

沈黙の理由の一部を告げながらエドワードは回収された爆弾を調べた。

「……………結構単純な造りだな」

エドワードは怪訝な顔をした。

「どうした？」

「構造が単純すぎる」

エドワードは顔を上げた。

「あんなふざけた脅迫状を書くんだ。普通もつと複雑なヤツを造るだろ。こんなん少し頭が柔らかかったら火薬と工学の本を見ればできるぜ」

エドワードは言った。

「暗号だつてかなり単純だったし」

「つまり相手は頭に自信のある愉快犯を装った人間だと？」

エドワードの言葉にロイは目を細めた。

「あくまで可能性の一つ。もしそうなら犯人の狙いは不特定多数の観客じゃなくて特定の個人になる。まあ自分の頭を過信した馬鹿の可能性もあるぜ」

エドワードは肩を竦めた。

「一応ユリア・ジユエの周りの怨恨は探ってるけどあまり当てにしない方が良くもな。恨みを買いきりすぎてるだろうし」

「……………だろうね」

ユリアの振る舞いを思い立ちロイは渋い顔をした。

「取り敢えず見つかった爆弾は処理したから。リードマンに書かれてないヤツがないか探させる」

「頼む」

エドワードの言葉にロイは頷いた。

数時間後

「そろそろクライマックス、だな」

エドワードは時計を見上げた。

「今のところ何も起きてませんね」

ドギーはチラリと会場を見て呟いた。

「大佐！」

そこヘルークがやって来た。

「言われた条件に当てはまる人、見つかりました！」

「そうか」

「ジョン・シエリダン、セントラルで機械工をしている男です」

ルークは書類を見せた。

「セントラル音楽大学に通っていた娘が自殺……か」

「はい」

「あの性格に賛同する者が出るなんてな」

「身内に軍の佐官がいましたから」

「なるほど……」

エドワードは溜め息をついた。

「大佐！ 会場で銃撃です！」

一人の軍人が駆け込んできた。

「っ状況は？」

「犯人は五人！ それぞれ拳銃を所持しています！ マーカー少尉

が銃弾が掠り軽傷を負いましたが後は負傷者はいません」

「そうか。中将の命は？」

「犯人の要求はユリア・ジュエー一人の様子、うまく説得し他の観客

を外に出すので誘導と仲間が居ないかを調べるようにと」

「分かった」

エドワードは頷くと指示を飛ばしだした。

「拳銃ですか……」

ドギーは何かを考える様に呟いた。

「入手ルートの特定はどうします？」

「今はいい、それよりも今は包囲網を」

「Yes, sir」

ドギーは敬礼をして去った。

数十分後

出て来た観客は怯えよりも別の感情を顔に出していた。

「何か、変じゃないですか？」

ドギーはヒソヒソと問い掛けた。

「さて、な」

「話、聞いてみますか？」

「そうだな。聞けそうな……アッチの報道陣に聞いてみてくれ。情報規制はしなくていい」

「良いんですか？」

「ああ」

「では、行ってきます」

ドギーは走っていった。

「……化けの皮が剥がれでもしたか」

エドワードは呟くと指示を出していった。

「大佐！」

聞き込みを終えたドギーが戻ってきた。

「どうだった？」

「中で犯人が動機を暴露したらしいです」

「ユリア・ジュエの悪評が世間へ出回るな」

「でしょうね。これだけの人数に知れ渡ったんですから。箝口令も無駄でしょう」

「ある意味アチラの目標は達成されたな」

「え？」

ドギーは首を傾げた。

「真実を含んだ噂は容易には消えない。ユリア・ジュエも歌手生命

を絶たれたも同然だ」

「……そうですね」

「とりあえず保護した人質に説明に行くぞ」

エドワードはそう言って歩き出した。

素人の集まりと歴戦の軍人の連携、勝敗は明らかであり人質が解放されて一時間も経たない内に犯人達は降伏した。

「……どうだった？」

エドワードはロイに中の様子を尋ねた。

「まだ、話せば分かる人達だったよ。こちらの説得にも簡単に応じてくれたからね」

「それは目的を達したからだろ」

ロイの言葉にエドワードは呆れたように突っ込んだ。

「まあ、それもあるね。人質に自分達の話したことを広めると言っていたから」

「箝口令出した方が良かったか？」

「いや、無理に押さえれば歪みが出る」

「そうだな」

エドワードは頷いた。

「さあ、我々は後始末だ」

「書類、逃げるなよ」

エドワードがジト目でロイを睨むとロイは顔をひきつらせながら顔を反らせた。

翌日、ユリア・ジュエのスクヤンダルが新聞をの一面を飾った。

「やっぱりか……」

新聞に目を通したエドワードが呟いた。

「一度崩すとアチコチから色々出てきたみたいですよ」

「ああ」

「で、当の本人が兄妹やら仲間やらと一緒に今軍部に乗り込んでき

てるそうです」

ドギーは呆れた顔で言った。

「中将がうまくいなすだろ。騒ぎを起こせば只では済まないしな」
エドワードの言葉通りユリア達は取り押さえられ一部は降格、また
は公務執行妨害で逮捕された。

覚醒

ユリア・ジュエのスキヤンダルから数ヶ月後、カタート山脈の万年雪に閉ざされた洞窟の中、複数の男女がランプを翳しながら中を進んでいた。

「兄さん、本当に此方で合っているの？」

マロンペーストの髪をした女が同じ色の髪をした男に問い掛けた。

「ああ、モース殿が確かな情報だと断言していたからな」

「モース大将の言葉なら確かな筈よ」

先に口を開いた女と瓜二つの女が言った。

「まあ、モース大将が騙されてなければ、の話ですがね」

「はうあ！ そんな事になったら無駄足になっちゃいますよう！」

「旦那、不吉な事言わないでくれよ」

「大丈夫ですわ。モース大将も確認なさっているでしょうし」

茶髪を肩まで伸ばし眼鏡を掛けた男にツインテールの少女と金髪の男女が言った。

「……行き止まりか」

一行の前に氷の壁があった。

「大佐あ、やつぱり嘘だったんですか？」

「待て、氷の中に誰がいる」

ツインテールの少女の言葉に先頭にいた男がランプを掲げながら言った。

「氷の中に人が……」

金髪の女が口に手をやりながら言った。

「兄さん、もしかしてコレが」

「ああ、恐らくな」

氷の中の人影は分厚い氷で人の形をしているとしか解らなかった。

「兄さん、早く封印を解きましょう」

「そうだな」

男は氷の前に手を掲げた。

業火よ、焰ほむらの檻にて焼き尽くせ、イグニートプリズン！

火柱が立ち上がり氷が壊れた。

ガラガラと氷が崩れ、細かい粒となった氷が舞った。

「やれやれ……まさかこんなに早く封印が解かれるとは思わなかったよ」

カツカツと氷煙の中から一人の男が姿を現した。

「貴様は?!」

その姿を見た一行は目を見開いた。

「ロイ・マスタング……?!」

それもその筈、現れた男の姿は自分達がわざわざこんな辺境に来なければならなかった原因に瓜二つだったからだ。

「誰だい？ それは」

男はキョトンとした顔で首を傾げた。

「ふざけ「待ちなさい、ユリア」」

いきり立つユリアを先頭にいた男が諫めた。

「貴殿の名前は？」

「もっ知っているとっ思うけどね。……レイ＝マグナス、赤眼ルビーアイの魔王とも呼ぶ者もいるがね」

男は肩を竦めながら言った。

「さて、此処から出してくれた君達には礼をしなければね」
服についた氷の粉を叩いた赤眼ルビーアイの魔王は言った。

「ならお願いがあるの!」

ユリアが意気込んで言った。

「私達、ある男のせいで濡れ衣を着せられたの!」

「その男に私のルークも騙されて」

「アシュレイも……変わってしまったわ」

一行は口々に続けた。

「……何か勘違いしているみたいだね」

赤眼の魔王はルビアーアイ呟くと指を鳴らした。

ドンッ

赤眼の魔王をルビアーアイを中心に巨大な爆発が起きた。

氷だけではなく、その下の岩壁の破片すら辺りを舞い、その爆発の激しさを物語っていた。

「っ?！」

ユリアが目を開けると大きな岩に押し潰された、手だけが出ている誰かの姿があった。

「まだ生きてるなんて、しぶといな」

「どういうつもり?! 恩を仇で返すなんてっ」

ユリアは目の前に立つ赤眼の魔王をルビアーアイ睨み付けた。

「俺はこのまま眠っていたかったんだよ。“デモンスレイヤーズ”なんて物騒な人間もいるし」

赤眼の魔王はルビアーアイ言うと顔を歪めた。

「ひぐっ……」

「それに、起きたらエドを傷付けなければならぬ……もう死んでるのか」

ユリアは赤眼の魔王のルビアーアイ覇気に耐えきれず自ら舌を噛み切っていた。

「さて、まずは何をしようか……」

「お久しぶりでございます。赤眼の魔王様ルビアーアイ」

金髪をショートカットにした長身の女と長い黒髪の女がどこからともなく現れ膝をついた。

「久し振りだね、ゼラス、ダルフィン。立って良いよ」

赤眼の魔王にルビアーアイ促され、グレート・ピースト獣王ゼラスデーブシーメタリウムと海王ダルフィンは

立ち上がった。

「まずはあの忌々しいセイレーンに封じられた力をつぐう」

ゼラスは提案しようとした途端、赤眼の魔王からルビアーアイ発せられた重圧に

膝をついた。

「Mrs・マグナス、だよ。ゼラス」

「っはい」

ゼラスがぎこちなく頷くと赤眼の魔王は重圧を解いた。ルビアーイ

「まあ、確かに力を取り戻すのは最重要課題だね。ダルフィン」

「はい」

「エドは今何処に居るの？」

「現在、あ、Mrs・マグナスはエドワード・エルリックと名乗りアメリリスという国で国軍大佐をしているようです」

「大佐？ エドにしては低い地位だね」

「あちらでは魔族や亜人の類いは想像の産物とされており人間の能力範囲で立ち回っているのです」

「そうか、ならアメリリスへ行こうか」

赤眼の魔王ルビアーイがそう言った次の瞬間、三体の姿はなくなっていた。

光があれば闇があるように、アメリリスの首都、セントラルでも変わりはない。

「ここなら大丈夫、だな」

レイ・ウイング
翔封界で若干息を切らしたエドワードはセントラル郊外の空き地に着いた。

「居るんだろう。出てこい」

「ふふ、腕は相変わらず落ちていないようだね」

一陣の風が通り過ぎると一人の男が目の前に立っていた。

「赤眼の魔王ルビアーイ……」

「レイと呼んでくれないのかい？」

エドワードは低く呻いくと男は悲しげな顔をした。

「当たり前だ、お前はレイじゃない。アクア・クリエイト 浄結水」

エドワードを中心に大量の水が産み出された。

「シーブラスト 水竜破！」

エドワードが水浸しになった地面に手を突くと水が一瞬にして引

いた。

「Go！」

エドワードが叫んだ直後、二人を中心にした水の壁が現れ中心へ向かって崩れ落ちた。

「そうか」

パチンツ！

赤眼の魔王ルビータアイが指を鳴らすと水は一瞬で蒸発した。

「っ 顕現せよ『イグジスト』！」

刀を持ったエドワードが疾走し肉薄した。

「おっと、危ないな」

紙一重で刃をかわした赤眼の魔王ルビータアイはまるで愛玩する猫を見るような目でエドワードを見た。

「これ以上レイの体は使わせない！」

一閃、二閃、三閃、煌めきと共に刃が舞うが赤眼の魔王ルビータアイは全てをか
わした。

「っち！」

舌打ちしたエドワードの姿が一瞬ぼやけた。

斬ツ

エドワードの刀が赤眼の魔王ルビータアイの胸元に傷をつけた。

「へえ、前はこんな事しなかったのに。巧い考えだね」

赤眼の魔王ルビータアイは目の前に立つ、本性を晒したエドワードを見た。

エドワードは瞬時に体格を変える事で間合いを伸ばしたのだった。

アクアレイザー
「水流閃！」

水が赤眼の魔王ルビータアイへ向かった。

> b < 闇よりもなお昏きもの 夜よりもなお深きもの 混沌の海よ
たゆたいし存在 金色なりし闇の王 その一欠片の泡沫を 舞い
て漂い 其が身に触れるものを滅せ ナイトダンシング
闇球舞！ > / b <

エドワードの周りに漆黒の球が幾つも現れた。

「跳ねろ」

エドワードの声と共に全ての球が赤眼の魔王^{ルビータアイ}へ向かった。

「何?!」

赤眼の魔王^{ルビータアイ}が初めて驚愕の表情を浮かべた。

黒い玉はそれに構わず地面を跳ねながら赤眼の魔王^{ルビータアイ}へ殺到した。

「つち!」

赤眼の魔王^{ルビータアイ}の周りに半透明の紅い壁が現れ黒い玉を弾いた。

「跳ねろ!」

弾かれた黒い玉は透明な壁にぶつかったスーパーボールのように向きを変えた。

ガガガガッ

黒い玉は空気抵抗を無視し徐々にスピードを上げ、何度も紅い壁にぶつかっていった。

「はぁ・・・はぁ・・・」

肩で息をしながらも油断無く刀を構え、エドワードはそれを見つめた。

ピシリ

ガラスに罫が入る音が響いた。

エドワードは息を詰め、更に意識を集中した。

ミシ・・・ピシ・・・

そして、ガラスの割れる高い音が響いた。

「つはぁ!」

黒い玉が赤眼の魔王^{ルビータアイ}へ迫り、それに続いてエドワードも肉薄した。

ザシユッ!

「・・・見事だね」

鮮血が刃を伝った。服をボロボロにした赤眼の魔王^{ルビータアイ}の左手が刃を握っていた。

「つち!」

「逃げちゃダメだよ」

距離を取ろうとするエドワードの腕を赤眼の魔王^{ルビータアイ}は掴んだ。

「放せ！」

エドワードは拘束を解こうと体を擦った。

「ダメ、放したら逃げるだろ？」

赤眼の魔王はエドワードの腕を引き、体を密着させるように近づけた。

「驚いたよ。まさか金色の魔王ロード・オブ・ナイトメアの術を使えるようになっていたなんて」

「っ人間に使えて、セイレーンが使えないなんてあり得ないだろう」

「まあ、確かにそうだね」

赤眼の魔王の言葉にエドワードは一瞬悲しげに目を伏せた後、睨み付けた。

「まあ、とりあえず君に封印された力、取り返させて貰うよ」

赤眼の魔王はエドワードを掴む手と反対の手をエドワードの左目の前に掲げた。

「あ、あああア！」

赤眼の魔王ルビーアイの手から紅い電光がエドワードの左目に伸びた。
「っ」と

光が消えるとエドワードは膝から崩れ落ちた。

「っく……」

「大丈夫かい？」

赤眼の魔王ルビーアイは僅かに動くエドワードの口許へ耳を寄せた。
「……水よ……氷の矢フリーズアロー！」

それはもはや矢ではなく柱と言っても過言ではなかった。

真上から束ねられた青い矢が降り注いだのだ。

砂と氷の小さな粒が舞い上がり、二人を覆い隠した。

「っち！」

拘束を脱したエドワードは大きく滑りながらも後ろへ下がった。

「奪い返されたならもう一度奪うまでだ！」

パンツ

エドワードは手を合わせた後その手を地面に当てた。

錬成光が辺りを照らし、巨大な魔方陣が大地に姿を現した。

「これで、終わりだ！」

エドワードは自身の全魔力を魔方陣に注ぎ込んだ。

「同じ手は二度と喰わないよ」

その声と共にエドワードが魔方陣に注いだ量を遙かに上回る量の魔力が赤眼の魔王ルビアーイから噴き上げた。

「………そんな」

渾身の力を放った術が効かなかった事実^にエドワードは膝を突きそうになるが刀を地面に刺しす事で支えにして辛うじて立っていた。

「もう、万策尽きたと言った所かな」

撒き上がった砂煙が晴れると服は多少破れているが無傷の赤眼の魔王ルビアーイからがいた。

「っ………」

エドワードは地面に刺した刀を抜き、震える手で構えた。

「そんなに怯えないで欲しいな。これくらいのオイタなら大した支障もないし」

赤眼の魔王は小さく笑いながらエドワードに近付いてきた。

「崩霊裂！」

女の声と共に光の柱が赤眼の魔王ルビアーイに炸裂した。

「大丈夫ですか、エドワードさん！」

アメリカが駆け寄ってきて復活リザレクションを掛けた。

「はああ！」

光が消えると同時にガウリイが斬妖剣ブラスト・ソードで斬りかかった。

「マーカー中尉から話は聞いてるわ。全く、一人でこんな無茶をするなんて」

リナは呆れたようにエドワードを見た。

「自分でもわかってるさ」

エドワードは自嘲の笑みを浮かべた。

「笑えるなら大丈夫そうね。さあ、反撃開始よ！」

リナは叫んだ。

「これはこれは……魔を滅する者まで来るなんてね」
スレイヤーズ

赤眼の魔王はにこやかに笑った。
ルビータイ

「どうするんだ？」

ゼルガデイスが剣に魔法を掛けようと抜き払うとエドワードが近付いた。

パンッ

錬成光が刃に走り剣の内側に文字が浮かんだ。

「これは……」

まるで文字を刻んだ刃を硝子でコーティングしたかのように透けて見える様にゼルガデイスは息を飲んだ。

「斬妖剣ほどじゃないが傷はつけられる筈だ」
ブラスト・ソード

「そうか、助かる」

ゼルガデイスはそう言うのと駆け出した。

「ガウリイ！」

「おう！」

幾度も戦いの賜物か僅かな掛け声で意思疏通した二人は連携しながら赤眼の魔王へ向かった。
ルビータイ

「餓竜咬！」
デイス・ファンゲ

影の竜がガウリイと並んで赤眼の魔王に迫った。
ルビータイ

「甘いよ」

赤眼の魔王の周りが見えない障壁が現れそれを阻んだ。
ルビータイ

「青魔烈弾波！」
ブラム・ブレイザー

「螺光衝霊弾！」
フェルザレド

ゼルガデイスとアメリカが放った光の玉が障壁が消えた瞬間に叩き込まれた。

「烈閃咆」
エルメキア・フレイム

止めにエドワードが光の柱を赤眼の魔王に叩き込んだ。「」無事
ルビータイ

ですか、赤眼の魔王様」
ルビータイ

空間を歪め現れた二人の女が光の柱を消し去った。

「獣王……海王……」
グレート・ビースト タイプ・シー

その姿を見たエドワードはあまりの状況の悪さに舌打ちをした、

「ゼラス、ダルウィン、もう時間かい？」

「はい」

キキーツ

車の音が響いた。

「何事だ！」

車からロイが飛び出した。

「そうか、残念だよ。エド、また迎えに来るよ」

「誰が行くか！」

エドワードは叫んだ。

「中將が二人?!」

車から降りたハボツクは赤眼の魔王ルビータイとロイの顔を見比べた。

「なんでそんなにつんけんするかな」

赤眼の魔王ルビータイは眉を八の字にした。

「大事な人間を乗っ取った奴に愛想良くするつもりはない」

「乗っ取ったつて……俺なのは変わらないのに」

「赤眼の魔王様ルビータイ、そろそろ……」

ゼラスが赤眼の魔王ルビータイに声を掛けた。

「わかった。またね、エド」

赤眼の魔王ルビータイ達は姿を消した。

「変わらない?……腹心を率いているのに?」

エドワードは赤眼の魔王ルビータイが姿を消したところを泣きそうな顔で見つめた。

真実

「君達、大丈夫か？」

「あたし達はね。でもエドが・・・」

リナは少し離れたところにいるエドワードの後ろ姿を見た。

「鋼の・・・？」

ロイはエドワードの後ろ姿を見ると怪訝な表情を浮かべた。
ザッ

ロイはリナ達をハボックに任せると足音を消さずエドワードに近付いた。

何かが違う・・・

「鋼の、随分早くに来れたんだね」

ロイはエドワードの肩に手を掛けて初めて違和感の正体に気付いた。

「・・・中将？ 悪いほんやりしてた」

エドワードはロイの方を向いて言った。

「君は・・・誰だ・・・？」

ロイは呆然と呟いた。

「え？・・・あ・・・」

エドワードは自分の姿を思い出し、顔を青ざめさせた。

「鋼のなのか？」

「・・・ああ」

エドワードの姿が一瞬歪み、ロイ達がよく知る姿になった。

「だが・・・先程の姿は・・・それにあの男は・・・？」

ロイは途切れ途切れに問い掛けた。

「とりあえず、場所移しましょうよ」

リナが二人の間に割り込んだ。

「・・・そうだな。鋼の、司令部に来てくれ」

ロイはぎこちなく頷くとエドワードを促した。

「ああ」

一行は車に乗り込んだ。

「さて、一体何がどうなっているか話して貰おうか？」
執務室につくとロイはエドワードを見据えた。

「……アイツは赤眼の魔王ルビーアイと呼ばれている」

エドワードは深く息をした後口を開いた。

「“魔族”の話はしたでしょ。あれはその親玉」
リナが補足した。

「ならば何故私と同じ姿をしていたんだ？」

「それは……」

リナがエドワードの方を見た。

「人間の体を奪ったんだ」

エドワードは言った。

「あの姿は、俺の……いや」

エドワードの姿が歪んだ。

「私の夫のものだ」

蒼い瞳を前に向けエドワードは言った。

「夫……」

「……この姿は私の元型アーキタイプ、本来の姿だと思ってくれ」
目を見開く周りから目を逸らすように顔を伏せたエドワードは言った。

「私はセイレーンと呼ばれるあちらの大陸で暮らす種族だ。千年程前にこちらに来了。そして十数年前にヴァン・ホーエンハイムに用があつて自宅を訪ねたら行方不明である事を知って、今見た様に姿を変え周りに術をかけ息子に成り済ました」
エドワードは大きく息をついた。

「……本当……なのか？」

「それはあたし達も保証するわ」

リナはロイの言葉に頷いた。

「エドワードは間違いなくセイレーンだし、セイレーンは元々長命

な種族、千年くらい優に生きるわ」

リナは言った。

「そんな……」

ホークアイが呆然と呟いた。

「アイツはカタート山脈に封印されてた筈だったんだ」

「その所は私が後で本国に確認します」

エドワードが暗い声で言うのとアメリカが言った。

「そうか……アイツは器の残滓に釣られて私を狙ってるんだ」

「つつー事は……」

「必ずまた現れる」

ハボックの推測をエドワードは肯定した。

「そういうわけだから中将、しばらく休暇を貰いたい」

エドワードは言った。

「なっ?!」

「むしろ退役の方が良かったか?」

目を見開くロイにエドワードは小首をかしげながら言った。

「そんな事許せる筈ないだろう!」

ロイは声を張り上げた。

「中将……?」

「ゴホンツ……君の有能さは内外に知れ渡ってるんだ。いくら君自身の意思だったとしても受理される事はないと思う」

驚く周りを誤魔化すように一度咳をしたロイは続けた。

「そんなに人気なの?」

「軍属だった頃から民衆の味方として国民からの人気はどの国家錬金術師よりも高い。それに最年少国家錬金術師としての記録は未だ破られていない上査定でも常に高い成績を残している。辞表を出したとしてもはね除けられるのがオチだろうね」

リナの言葉にロイは言った。

「だがコイツがこのまま此処にいれば大量の犠牲が出る。間違いな

くな」

ゼルガデイスは言った。

「そんなにスゴイのか？」

ハボツクが困惑を露に尋ねた。

「そりゃ、前に出たときは国が幾つか滅びたからだし、私達が勝てたのは二回とも偶然の産物よ」

「赤眼の魔王を倒したのか？！ しかも二回？！」

リナの言葉にエドワードは目を見開いた。

「一回目はたまたま隠し札が上手く発動しただけ、二回目に至ってはあっちが死にたがってたからよ」

リナは言った。

「しかもあの術は私の容量じゃ不完全なものしか使えない。あの時はガウリーの光の剣があつたからその力を足せたけど、アレはもう持ち主に帰しちゃつたからもう取りに行ける場所がないわ」

「ならその術を私が使えば良い。私の容量キャパシテイならば足りるだろう」

エドワードは言った。

「混沌言語の理解からなんて間に合う筈がないわ」

リナは首を左右に振った。

「舐めるな。小娘」

エドワードの気配に冷気が混じる。

「二人供、勝手に話を進めないでくれ」

僅かに険悪になる空気にロイは二人の間に割り込んだ。

「確か我々の兵器は魔族には効かなかつたな」

「そうよ」

リナは頷いた。

「いや、手はない訳じゃない」

エドワードはリナと真逆の事を言った。

「普通の武器にも魔族に効くようにする方法はある。手間は掛かるがな」

エドワードはそう言って懐から銃を出すと手を合わせた。

錬成光と共に銃に複雑な模様が刻まれた。

「これで使い手の意志を銃弾に纏わせて飛ばす事が出来る」

エドワードは銃に刻まれた紋様を指でなぞる。

「意志？」

「相手は精神生命体ですから相手を滅ぼすって意志を直接叩き込めばダメージに繋がります」

ホークアイの疑問にアメリカが答えた。

「銃弾にも同じように刻めば更に効果を上げられる筈だ」

「なるほど」

「模様さえ正しく刻めれば誰でも使えるから「わかった。私から話
は通しておく。収納されている銃に模様を刻んでくれ」・・・了解
・・・」

話を遮り言ったロイにエドワードは心の中で拍手を送った。

危険がある可能性を理解し対処法があるならば最低限の予防策を講
じる。例えその方法をもたらしたのが今まで嘘をついていた部下
であったとしても。

レイならグダグダ言っただけにしばかれるんだが・・・

過去に向こうとする意識を引き締め、エドワードは立ち上がった。

「一晩で全部終わらせる」

「あたしも行くわ。ガウリイ、アンタも」

「ああ」

リナがガウリイの腕を掴んで立ち上がった。

「アイツの一番の狙いはアンタなんだから一人になるのは危険よ」

リナの言葉にエドワードはロイを見た。

「・・・今の我々では足手まといにしかない。本来は黙認
しよう」

エドワードは頷くと二人を連れて部屋を出た。

「なるほど、アチラの害獣が海を越えてこちらに来たと」

グラマンは目の前に立つロイを見上げた。

「はい、現在エルリック大佐がリナ・インバース嬢の指示の元、支給品である銃の改造を行っております」

「その話の信憑性は？」

「インバース嬢の手解きを受けていたエルリック大佐が戦闘を行っております。私が駆け付けた時に彼等は一瞬で姿を消しました……一通り確認はしましたが手品や錬金術の類いではないと思われず」

「精神生命体か」

「こちらには対抗策が少ない事を狙つての事と思われず」

「……わかった、この件は君に任せよう」

グラマンは言った。

「あいては魂・心が剥き出しな状態なんです。ですからこつちが攻撃した際に“相手を滅する”という強い意志を込めるとそれだけダメージに繋がるんです」

ロイが執務室に戻って来ると、中ではアメリカとゼルガデイスによる講義が行われていた。

「つまりは心の持ちようつてわけか」

「ああ。アイツ等は人の負の感情を糧にしているから弱気になればそれだけ強くなる」

八ボツク言葉にゼルガデイスは頷いた。

「やりづらいですね」

「向こうには銃なんて武器はありませんから、同時に使っても術と違って相性とか考えなくて良いですし」

「訓練した軍人なら精神力もあるはずだ」

アメリカとゼルガデイスが言った。

「じゃあ、銃による遠距離が主流になりそうだな」

ロイがそう言うのとアメリカが首を横に振った。

「何かあるのかね？」

「前にリナが言っていたんですがこちらでも銀が幽霊の類いに効くという話があるんですよね」

「ああ、確か吸血鬼とかに効くって」

「あれは銀が精神力を伝えやすいって性質があるからなんです。相手に刺さった瞬間に“滅べ”って念ずればダメージを与えられます」

「おそらくあの大佐なら銀でなくても精神力を伝えるようにする術を知ってるんじゃないか？」

ゼルガデイスが言った。

エドワードとリナ達が部屋に戻ってきた。

「なんの話をしてるの？」

「ああ、丁度よかった。鋼の、ナイフにも銃のように模様をつけられるかい？」

「出来るけど……護身用にも使えないぞ」

ロイの問いにエドワードは断言した。

「最低でもリンとかと同等にタイマンが出来る奴じゃないと白兵戦は確実に返り討ちになる」

「そりゃキツいな」

八ポックが優れた剣技を持つ隣国の皇太子を思い出し顔をひきつらせた。

「それに近付くだけでヤバい奴もいないわけじゃないし下手に慢心されると困る」

「そうか……なら仕方ない」

ロイは頷いた後、周りを鋭い目で見たした。

「鋼のやインバース嬢達の話の総合すると敵は非常に、下手をすれば人造人間ホムンクルスよりも厄介な可能性が高く、そして周りへの被害も一切考慮しない可能性が高い」

ロイは表情を崩さずエドワード達を見渡した。

「鋼の、君が中心になって彼等の足取りを追ってくれ。インバース嬢、済まないが協力してくれ」

「わかった」

「もちろんよ」

「捕縛しようなどと考えるな。戦闘になった時には必ず仕留める」

「『Yes, Sir!』」

全員が頷いた。

迫る足音

「ドラクマの密偵？」

ロイはもたらされた報告に顔をしかめた。

「はい、ですが様子が妙なんです」

ホークアイは報告書に目を落とした。

「『化け物を擁護するアメトリスに正義の鉄槌を』などと言っています」

「化け物？ …… そういえばずいぶん前だが夕子の悪い宗教が広がっているという話があったな」

ロイは手を口許にやり呟いた。

「そういえば …… それ絡みでしょうか？」

「だろうな …… 全く魔族だけでも厄介だというのに …… 」

赤眼の魔王ルビィアイが復活してからアメトリス内でも魔族が確認されている。

「恐らくその辺りも信仰心を集める要因となっているのでは？」

「だろうな」

ホークアイの言葉にロイは頷いた。

「まったく、こちらを共通の敵にして纏まるのは勝手だが仮想敵国辺りに止めて置けばよいものを …… ホークアイ少佐、現在特定されている密偵は何人いる？」

「報告されているだけで30人を越えるかと。そのうちの10人がセントラルを本拠地に行っているそうです」

ホークアイが書類を捲って言った。

「そうか …… 」

「既に何名かが軍の内部に繋がりをつけているようです」

「ならばそれを利用してダミーの情報を流す。もちろん繋がりをつけられた者にもダミーだとは教えるな」

ロイは溜め息を吐きたいのを堪えて言った。

「わかりました」

ホークアイは頷くと指示を出すために部屋を出て行った。

ホークアイとほぼ入れ違いになって扉がノックされた。

「誰だ？」

『エルリックです』

「入れ」

書類を持ったエドワードが部屋に入ってきた。

「失礼します。中将。対魔武器の支給についての書類です」

「分かった」

机に置かれた書類にロイは素早く目を通した。

「アメリカ王女を通して技術交流の話も順調に進んでいるようですね」

「ああ・・・出来れば真っ先に交換されるのがこんな分野でなければなお良かったのだがな」

ロイの溜め息に同調するようにエドワードは頷いた。

「鋼の、国内での被害はどうなっている？」

書類の後ろの方に資料として載せられた簡単な数字とグラフにロイは詳細を尋ねた。

「とりあえず武器支給のお陰である程度は収まっていますが、魔族の出現場所に偏りがでてます」

「偏り？」

グラフで書かれた魔族がらみの事件の東西南北の地方における数は大差がない。

「血の紋に集中しています」

エドワードの報告にロイは眉を潜めた。血の紋、それはホムンクルス達が国土錬成陣を作り出すために故意に作られた惨劇の場。

「魔族は人の負の感情を糧とするんだったな」

「はい」

「そうか・・・他に特筆すべき事は？」

「特にはありません」

「わかった。引き続き頼む」

「はい」

エドワードは敬礼して去ろうとした。

「あ、そうだ。先日面白い本が手に入ったんだが読むかね？ 金属錬成についてのものだが」

「機会があれば。では、失礼します」

エドワードはそれだけ言って部屋を出た。

「…………やはり大分違うのだな…………前ならば詰め寄る勢いで貸して欲しいと言っていたのに」

ロイは呟いた。

「大佐！ 住宅地で対魔事件発生です！」

エドワードが執務室に戻るとリードマンが急いた声で叫んだ。

「状況は？」

「魔道師と思われる人物が魔術を行使し破壊行為を行っています。

通報から考えて系統は精霊魔術だと考えられます」

マーカーが走り書きされた紙を読み上げる。

「犯人が人間なら詠唱の妨害をすれば大抵は無力化出来る筈。犯人は屋外か？」

「いえ、通りに面したレストランに立て込もっているそうです」

「ならば催涙弾をしようし無力化図る。私が着くまでに出来るだけ無関係な人間を避難させてくれ」

「Yes, Sir！」

マーカーが通信機に向かった。

「大佐！」

エドワードが現場に駆け付け付けるとその場にいた軍人達が一斉に敬礼した。

「仕事を続けてくれ。犯人に動きは？」

「いえ、ただ馬鹿の一つ覚えのように火の玉をアチコチにぶつけています」

「火の玉……ファイアーボールか……」

犯人が使っている術に検討をつけたエドワードは眉を潜めた。

「犯人の身元がわかりました！」

一人の軍人が駆け込んできた。

「そうか……あのバカはどこ誰だ？」

「はっ！ ケイン・ナイマツハ、22歳。セントラル在住の浪人生だそうです」

「……偽造の可能性は？」

「は？ 家族や近隣住民に確認を取りましたので、まず間違いはないかと」

エドワードの問い掛けに一瞬怪訝な顔をした兵士はエドワードの表情に慌てて答えた。

「使っているのは^{ファイアーボール}火炎球だけ、しかも生まれも育ちも此方……という事は」

「誰か彼に教えた人間がいるという事ですね」

マーカールの言葉にエドワードは頷いた。

^{ファイアーボール}火炎球は必要な混沌言語を覚えさえすれば誰にでも使える術の代表格である。

「下手をすればかなり根深くなるぞ」

「そうですね」

「催涙弾、準備できました」

「合図をしたら一斉に投げ込め。総員、ガスマスク装着用意！」

エドワードの声に兵士達はガスマスクを頭につけた。指示が聞こえにくくなるのでまだ顔には着けない。

「装着後三カウントで催涙弾を発射、速やかに犯人を取り押さえろ」

「Yes, sir!!」

その場に居た下士官達が一斉に敬礼した。

「ガスマスク装着・・・3、2、1、発射！」

喫茶店に投げ込まれた鉄の玉が白い煙を勢いよく吐き出した。

「なっ、人質がっゴホゴホッ！」

煙に巻かれて男と人質の女性が咳き込む。その時、男の涙で曇った視界の隅に大量の人影が現れた。

「人質救出しました！」「確保！」

男の腕が人質から引き剥がされたかと思うとそのまま投げ飛ばされた。

「クソっ！ ほのゲホッ」

男が混沌言語を唱えようとするが喉の痛みや鼻水が邪魔で言葉が続かない上身動きが封じられた。

金属音と共に腕に冷たい感触がした。

「連行するぞ」

後ろ手に固められた男は引き摺られるように煙の外に出た。

エドワードは先に煙から出た人質の元に向かった。

「大佐、お疲れさまです」

人質となっていた女性は白いタオルで顔を覆いながら用意されていた椅子に座っていた。

「構わず仕事を続けてくれ・・・大丈夫ですか？」

膝をついたエドワードが問い掛けると女性はグシャグシャに顔を崩しながら何度も頷いた。

「後20分もすれば煙の効果も治まります。それまでゆっくり休んでいて下さい」

エドワードは優しく言い聞かせると立ち上がり連行された犯人が入れられた護送車へ向かった。

数日後

「鋼の、ビンゴだ」

執務室へ呼び出されたエドワードにロイは言った。

「ケイン・ナイマツハの交遊歴の中にドラクマの工作員がいた」

「つて事は魔術の技術はドラクマ経由で来たと？」

「おそろくな」

そう言ったロイは椅子に凭れ、天井を仰いだ。

「まったく、厄介な事になったな。武器も無しに言葉だけであれだけの破壊力を振り回せるとは……」

「まだマシだぜ。まだ力を使うのにある程度のタイムラグが必要だからな。インバース達並みになると火炎球みたいな基礎の術、一言で使える」

「そうか……」

うんざりとした様子でロイは言った。

「とりあえず催涙弾を使えば素人はすぐに対応できるとわかっただけでも御の字だ。対処法を確立さえ出来れば被害はだいぶ抑えられる。鋼の、マニュアルの作成を頼めるかい？」

「わかった」

エドワードは頷いた後、僅かに視線をさ迷わせ、暗い顔で口を開いた。

「戦争に……なると思つか？」

エドワードの問い掛けにロイは小さく息を飲んだ。

「嫌かい？」

「当たり前だ……一応私もあちらで従軍した事もある……悲惨以外の何物でもなかった。わかるだろう？」

「ならば戦争にならぬよう努力すればいい。やり方はいくらでもあるだろう？」

ロイは言った。

「そうだな」

エドワードは小さく微笑み頷いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9376i/>

異端者の踊り

2011年12月22日23時48分発行